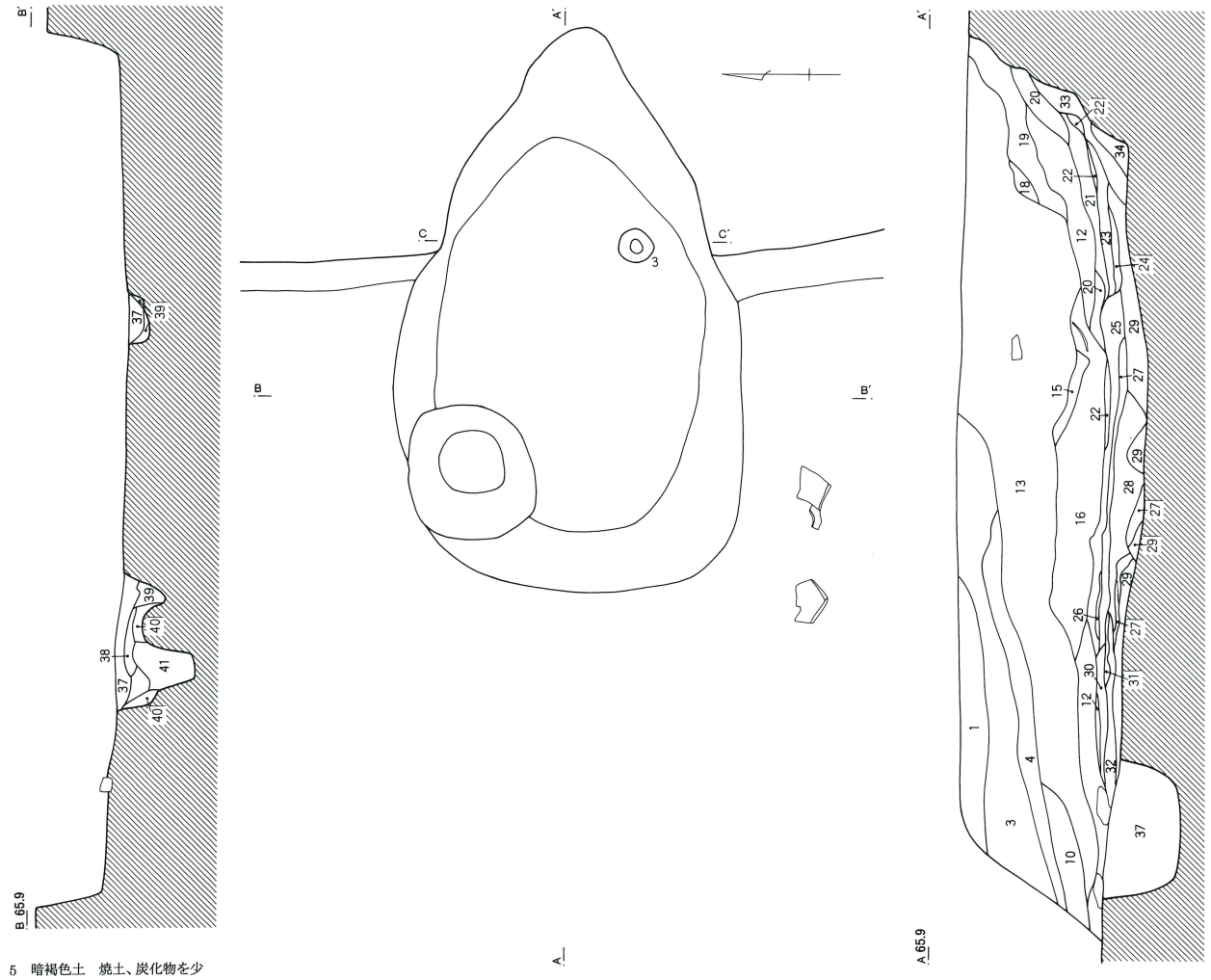
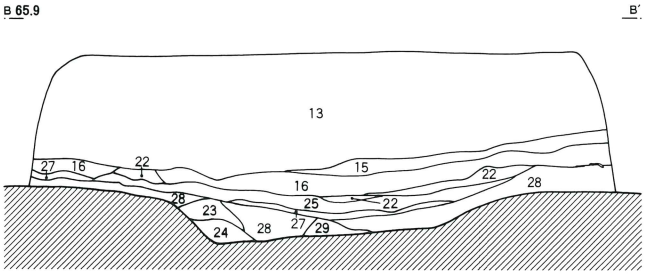
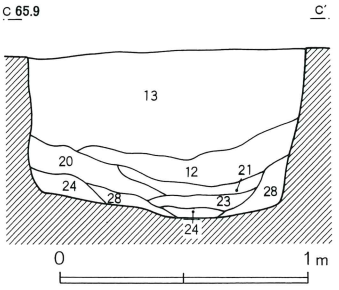
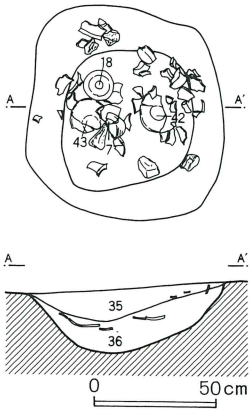
第330図　第197号住居跡カマド・貯蔵穴









5　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含み、礫、B軽石を多量に含み、黄褐色土をブロック状に含む 砂質

6　暗褐色土　焼土、炭、B軽石を少量含み、礫を多量含む

7　暗褐色土　焼土、砂礫少量含み、炭化物微量含む 砂質

8　灰褐色土　ふみしめられた固い砂質土（貼り床）

9　灰褐色土　焼土、炭化物を微量含み、灰色砂質土を多量に含む

10　暗灰褐色土　焼土、炭化物、砂、粘土を少量含む

11　暗褐色土　焼土を多量に含み、礫を少量含む

12　暗褐色土　焼土、焼土ブロック、炭化物を多量に含む

13　暗赤褐色土　焼土、焼土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む 粘性あり

14　褐色土　焼土、焼土ブロックを多量に含み、炭化物、礫、B軽石を少量含む 砂質

15　暗褐色土 焼土を多量含み、炭化物を少量含む 粘性あり

16　褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含み、炭化物、黄褐色粘土を少量含む 粘性あり

17　黒色土　炭主体 焼土を少量含む

18　赤褐色土　焼土主体

19　暗褐色土　灰を少量含む

20　暗黄褐色土　焼土をブロック状に多量に含み、灰、炭を少量含む

21　黒色土　炭化物、灰主体 焼土を少量含む

22　褐色土　礫主体 焼土を微量含み、B軽石を少量含む

23　灰黄褐色土　黄褐色粘土主体 焼土を少量含む 粘性あり（袖部構築土）

24　灰黄褐色土　黄褐色粘土、砂主体 焼土、炭、礫を少量含む 粘性あり

25　灰褐色土　焼土、灰、炭を多量に含む

26　橙色土　焼土主体 炭、黄褐色粘土を少量含む

27　黒色土　炭化物層

28　灰黄褐色土　焼土、砂利を多量に含み、炭を少量含む

29　灰黄褐色土　焼土を多量に含み、礫を少量含む

30　灰黄褐色土　黄褐色粘土主体 部分的に炭のうすい層を含む

31　橙色土　焼土主体 炭化物、炭を多量に含む

32　灰褐色土　黄褐色粘土主体 焼土、炭化物を少量含み、灰を多量に含む 粘性あり

33　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化物、砂を少量含む

34　暗褐色土　焼土を少量含み、砂利を多量に含む

35　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む 粘性あり

36　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を部分的に含む 粘性あり

37　暗褐色土　焼土、炭を多量に含み、砂利を少量含む 粘性あり(貼り床)

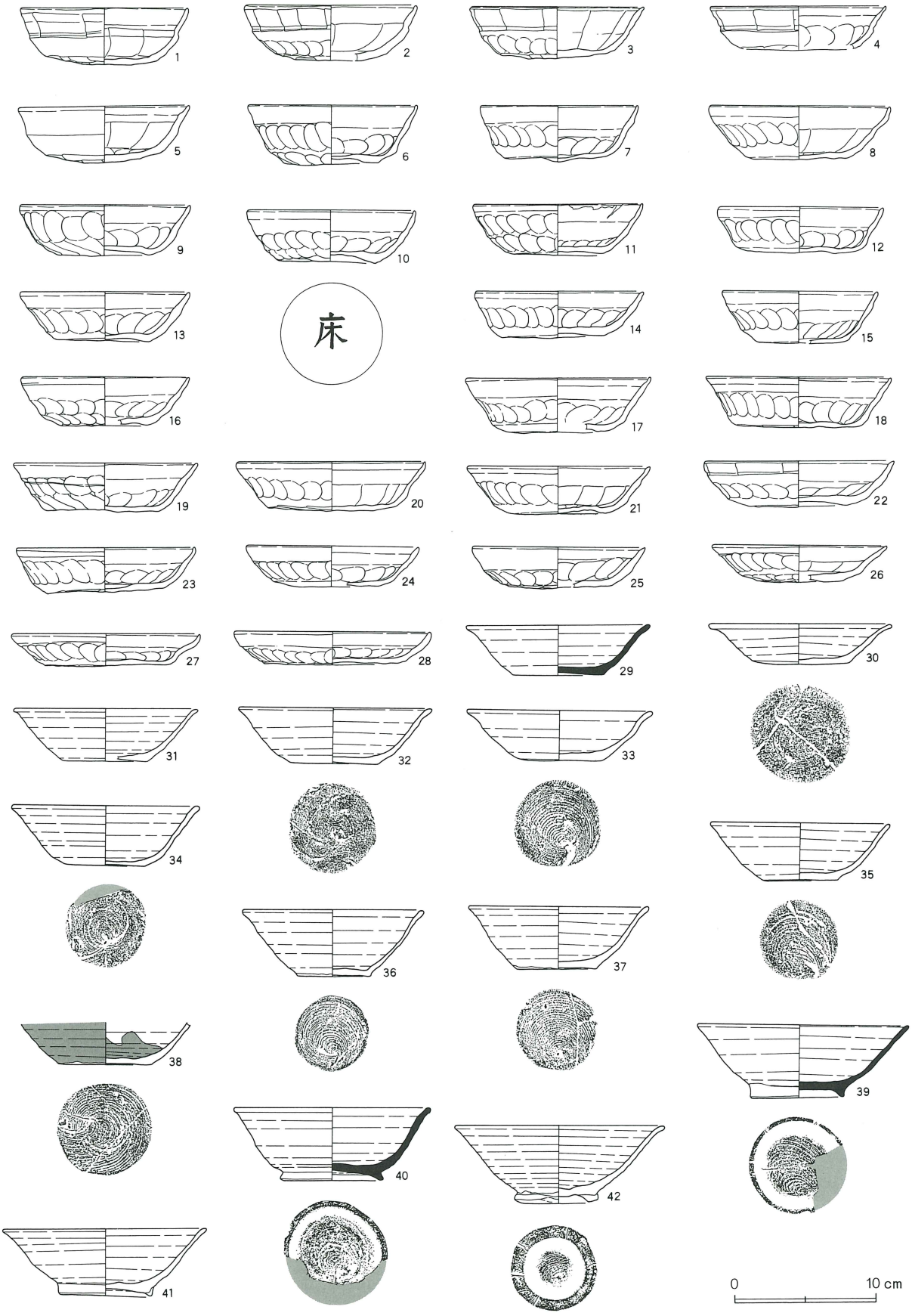
38　暗褐色土　焼土、炭、砂を多量に含む

39　暗灰褐色土　焼土、炭を少量含み、砂利を多量に含む

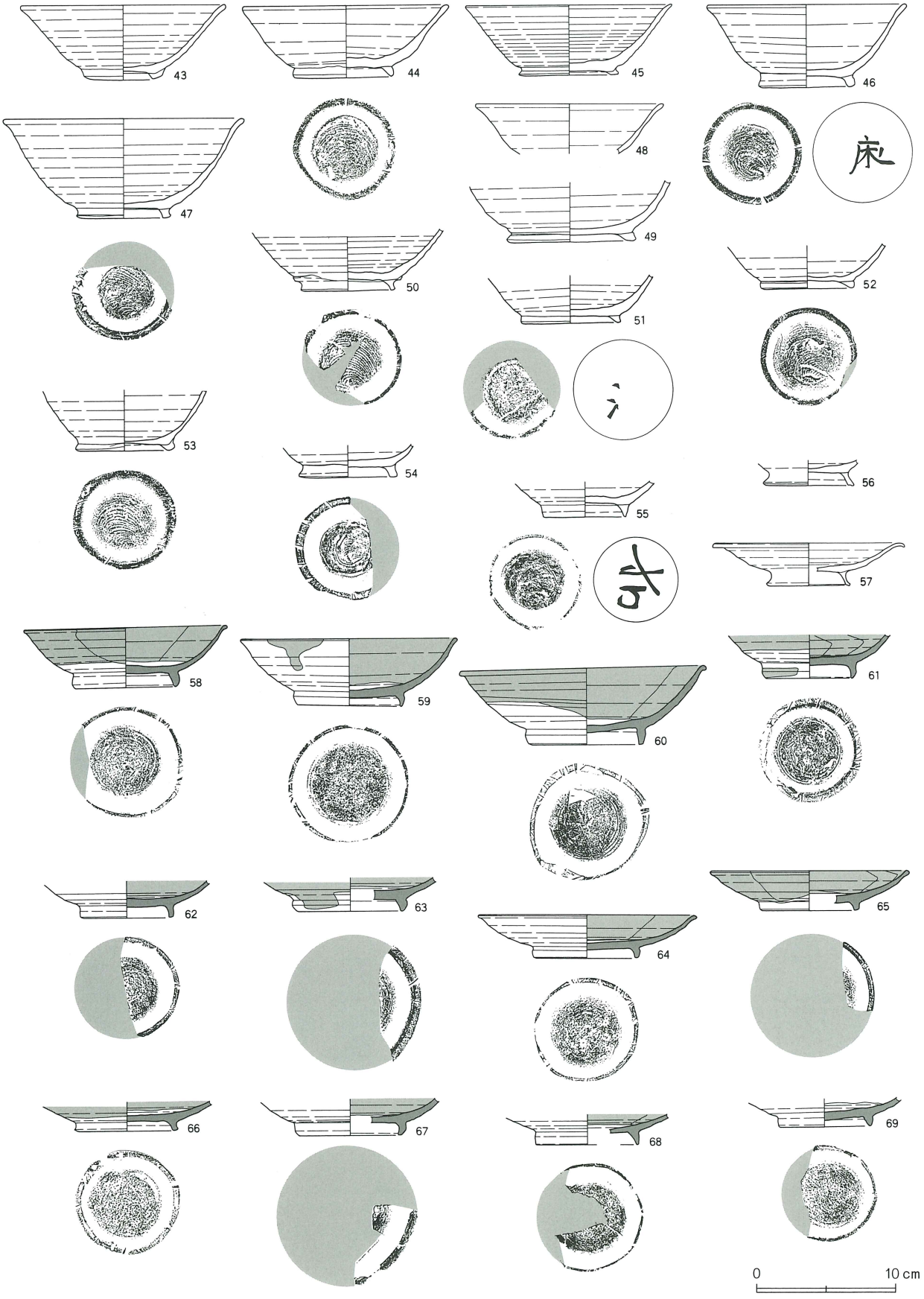
40　暗黄褐色土　焼土を少量含む（砂礫層）

41　暗灰褐色土　砂主体 焼土、暗褐色土を少量含む

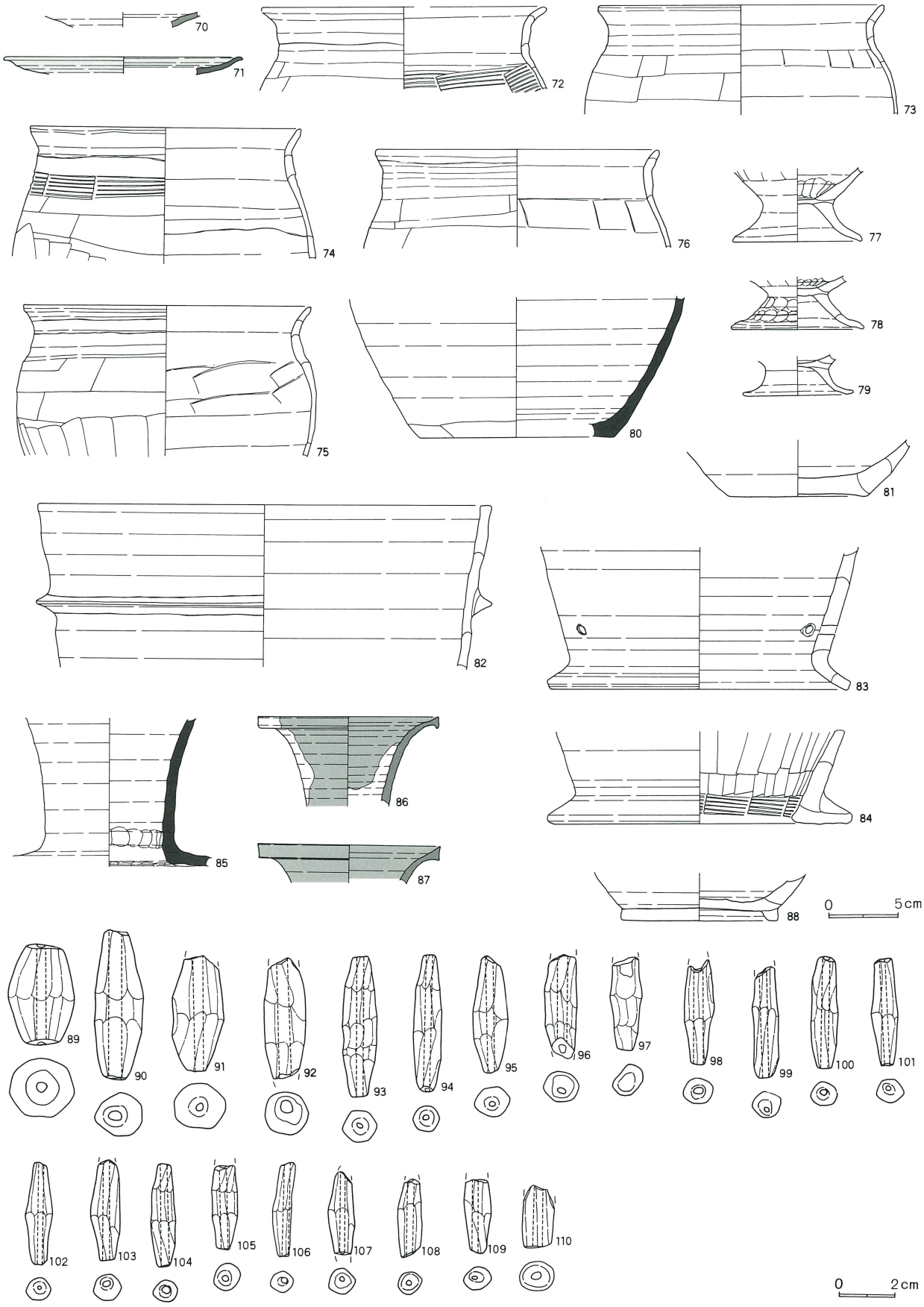
第331図　第197号住居跡出土遺物（1）



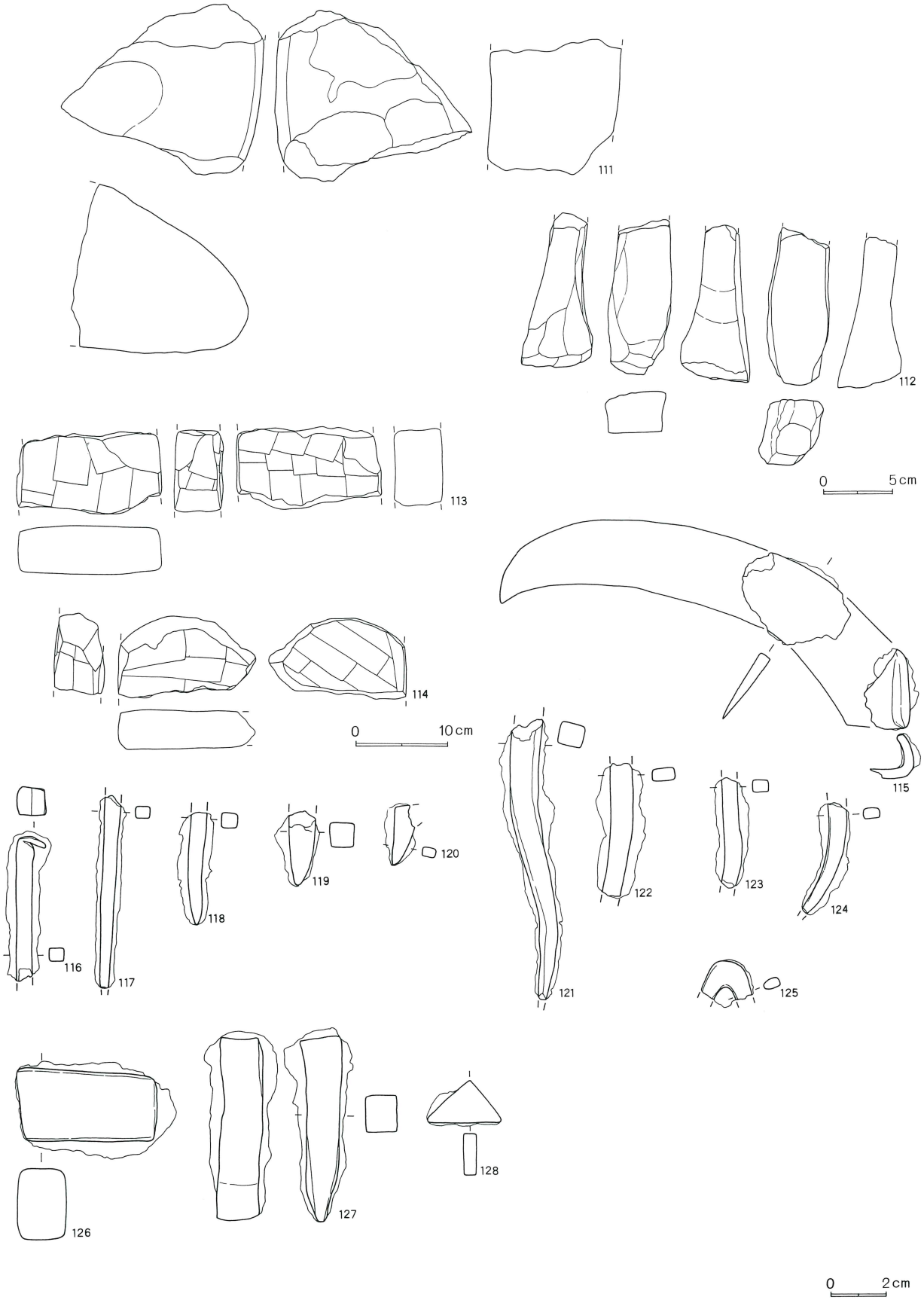
第332図　第197号住居跡出土遺物（２）



第333図　第197号住居跡出土遺物（３）



第334図　第197号住居跡出土遺物（4）



第287表　第197号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
53	高台付椀	NS				6.4	B, E, G	良好	R	灰白	40	
54	高台付椀	NS				6.2	B	良好	R	灰白	20	
55	高台付椀	NS				5.8	B, D	良好	R	黄灰	20	
56	高台付椀	NS				6.2	B	良好	R	灰白	20	貼床内
57	高台付皿	HS	13.1	3.0		5.8	B, E	良好	R	浅黄橙	20	貼床内
58	高台付椀	K	14.3	4.3		7.1	B	良好	R	オリーブ灰		底－100。他－50。P2。貼床内
59	高台付椀	K	15.3	4.8		7.4	D	良好	L	灰白		底－100。他－50。P5
60	高台付椀	K	17.3	5.4		7.5	B, D	良好	R	オリーブ灰		底－100。他－25
61	高台付椀	K				6.1	B, D	良好	L	灰白	100	
62	高台付椀	K				6.0	B, D	良好		灰白	50	
63	高台付椀	K				7.4	B, D	良好	R	オリーブ灰	25	
64	高台付皿	K	15.3	3.1		7.1	B, D	良好	R	灰白		底－100。他－15
65	高台付皿	K	13.8	2.8		6.5	D	良好	R	オリーブ灰	20	
66	高台付皿	K				6.7	D	良好	R	灰白	100	貼床内
67	高台付皿	K				7.2	B	良好	R	灰白	20	
68	高台付皿	K				7.1	D	良好		灰白	80	
69	高台付皿	K				6.8	D	良好	R	灰白	60	
70	段皿	K					D	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	5	
71	折縁皿	M					B	普通		淡緑	5	
72	甕BⅢc	H	20.0				B, E, H	良好		外－灰黄褐。内－黄橙	30	
73	甕BⅢa	H	20.0				B, C, E	良好		浅黄橙	20	カマド
74	甕BⅢa	H	19.0				B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	
75	甕AⅢb	H	20.1				B, E, I	良好		橙	50	カマド
76	甕BⅢa	H	19.8				B, E, H	良好		黄橙	20	
77	台付甕	H				9.0	B, E, I	良好		浅黄橙	60	
78	台付甕	H				9.2	A, B, E	普通		浅黄橙	30	
79	台付甕	H				6.9	B, C, E	良好		内－橙。外－褐灰	90	P6
80	壷	S				13.7	B	良好		青灰	15	貼床内
81	壷	NS				9.1	B, C, H	良好	R	灰白	100	
82	甑BⅡ	NS	31.7		7.0		B, C	良好		灰白	10	
83	甑	NS				20.9	B, E	良好		灰白	15	
84	甑	NS				20.6	B, E, G	良好		灰白	30	
85	長頸壷	S					B, G	良好	R	青灰	70	
86	長頸壷	K	12.7				D	良好	L	オリーブ灰	25	
87	長頸壷	K	12.9				D	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	5	
88	壷	NS				10.9	B, G	良好		浅黄橙	80	

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。煙道部から焚き口部までの長さは、2.32ｍと非常に大形のカマドであった。

袖は、検出できなかった。しかし燃焼部の位置から袖は、造り付けで住居跡内に長く延びていたと推定した。カマド内からは、遺物もほとんど出土しなかった。

焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に掘り込まれていた。煙道部は、急な傾斜をもって階段状に立ち上がっていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は、方形で規模は、長径0.85ｍ・短径0.76ｍ・深さ0.25ｍと、カマドや住居の規模に比べ小形であった。貯蔵穴の西側に接して、長さ1.0ｍの不整形の浅い掘り込み

を検出した。

遺構の切り合い関係は、第196号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（3）、貯蔵穴内およびその周辺から土師器の坏（5・7・10・16・18・19・20・23）・皿（27）、須恵器の高台付椀（42・43）、土師器の台付甕（77）が出土し、1号小穴内から土師器の台付甕（79）、5号小穴周辺から土師器の坏（15・25）、甕（81）が出土した。また住居跡の中央から鉄釘（116・117・124）、凝灰岩の切石（113）が出土した。

1から24までは、土師器の坏である。1・3・6から17・19・21・22・24は、坏AⅥである。ほかは、坏AⅣである。10の底部外面には、墨書「床」がみられる。25から28は、土師器の皿である。2・4・15・16・17・24・25・26・は底部が欠損している。

29から38は、椀である。29は須恵器（S）、32と38は、須恵器（HS）である。その他は須恵器（NS）である。39から56は、高台付椀である。39・40は、須恵器（S）である。46は底部外面に墨書「床」がみられる。48・57は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。51は墨書土器である。文字は判読できない。55は底部外面に墨書「十万」がみられる。31・48は底部、38・49から53は口縁部が欠損している。54から56は底部のみである。38は黒色の付着物が底部内面と外面全面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

58から63は、灰釉陶器の高台付椀である。64から69は、灰釉陶器の高台付皿である。70は、灰釉陶器の段皿である。71は、緑釉陶器の折縁皿である。62・63・66から69は口縁部、65・71は底部が欠損している。70は体部のみである。

72から79は、土師器の甕である。72から74・76は胴部中位以下、75は胴部下位以下が欠損している。77から79は脚部のみである。

80は、須恵器（S）の甕である。81は、須恵器（NS）の甕である。82から84は、土師器甑である。85は、須恵器（S）の長頸壺である。80は胴部下位のみ、81・83・84は底部のみ、85は頸部のみである。82は胴部中位以下が欠損している。

86・87は、灰釉陶器の長頸壺である。口縁部のみである。

第288表　第197号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
89	橙	100	3.6	2.3	0.3	18.0	B 1	Ⅰa	62	
90	橙	100	5.3	1.7	0.5	12.3	C 1	Ⅰb	170	
91	浅黄橙	90		1.8	0.3	10.7	C 1	Ⅱa	171	
92	浅黄橙	80		1.6	0.5	7.7	C 1	Ⅷ	172	
93	橙	100	5.0	1.3	0.3	6.1	C 2	Ⅰa	422	
94	橙	100	4.9	1.0	0.2	3.3	C 2	Ⅰa	423	
95	黄橙	100	4.2	1.3	0.2	4.4	C 2	Ⅰb	424	
96	にぶい橙	60		1.3	0.3	3.9	C 2	Ⅷ	425	
97	にぶい橙	60		1.1	0.8	3.9	C 2	Ⅲa	426	
98	浅黄橙	70		1.1	0.3	2.3	C 2	Ⅱb	427	
99	橙	80		1.0	0.2	3.1	C 2	Ⅰb	428	
100	橙	100	4.0	0.9	0.3	3.1	C 2	Ⅰa	429	
101	橙	100	3.8	1.0	0.2	2.3	C 2	Ⅰa	430	
102	浅黄橙	100	3.7	0.9	0.2	1.8	C 2	Ⅰa	431	
103	黄橙	90		1.0	0.3	2.9	C 2	Ⅰb	432	
104	橙	100	3.7	0.9	0.3	1.9	C 2	Ⅰc	433	
105	橙	80		0.9	0.3	2.2	C 2	Ⅱa	434	
106	褐灰	100	3.3	0.8	0.2	1.4	C 2	Ⅰa	435	
107	褐灰	60		0.9	0.2	2.0	C 2	Ⅱa	436	
108	浅黄橙	90		0.8	0.2	1.5	C 2	Ⅱb	437	
109	橙	50		0.9	0.2	2.0	C 2	Ⅱb	438	
110	にぶい橙	50		1.2	0.3	2.3	C 2	Ⅷ	439	

88は、須恵器（ＮＳ）の壷である。底部のみである。

89から110は、土錘である。

111・112は、砥石である。

113・114は、凝灰岩の切石である。

115から128は、鉄製品である。115は鎌（破片）、116・117・118・119・121は釘、120は鋏、122・123・124は棒状鉄製品、125は折れ曲がった棒状鉄製品、126は不明鉄製品、127は楔、128は三角形の板状鉄製品である。

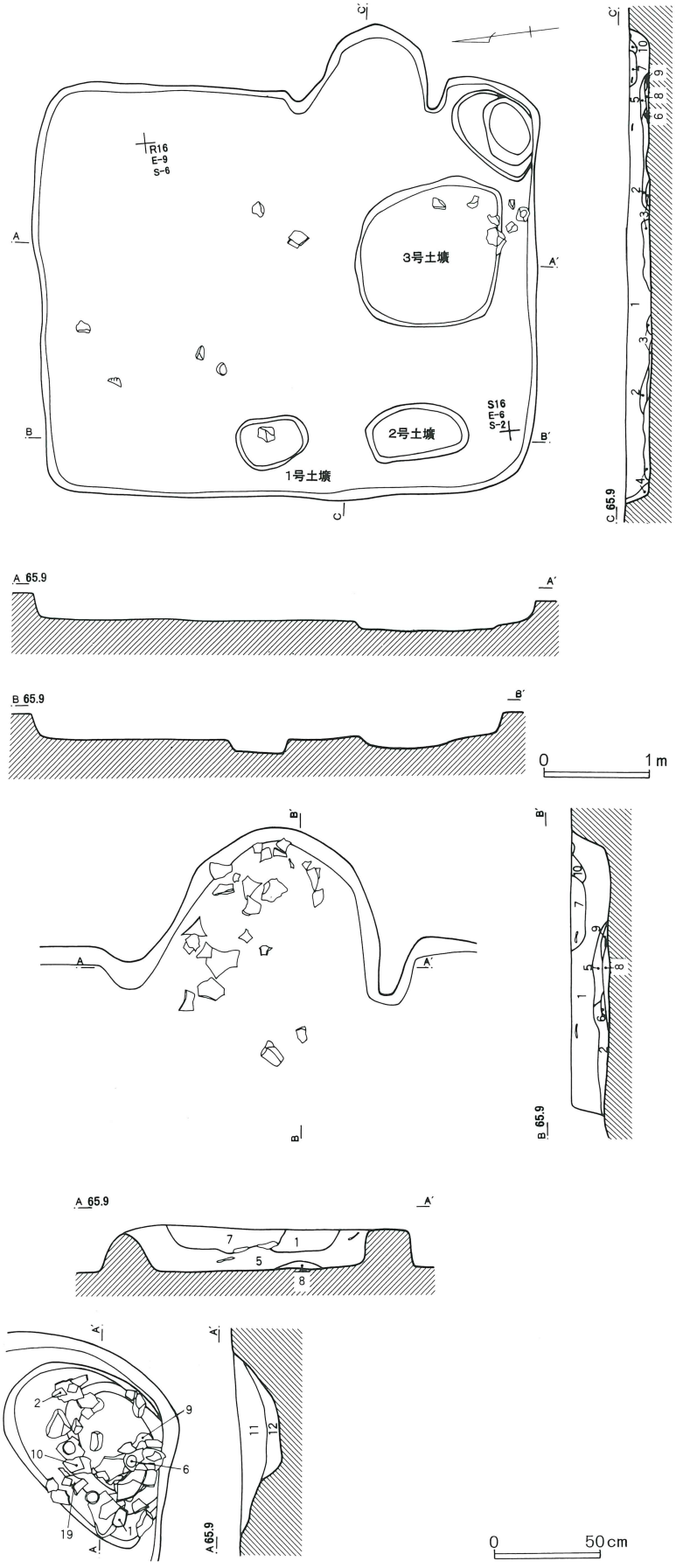
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第197号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第198号住居跡（第335図・第336図）

Ｒ・Ｓ－16グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.60ｍ・短辺3.76ｍ・深さ0.23ｍであった。住居跡の床面には、土壙三基を検出した。１号土壙は、楕円形で長径0.65ｍ・短径0.45ｍ・深さ0.12ｍ。２号土壙は、楕円形で長径0.91ｍ・短径0.5ｍ・深さ0.06ｍ。３号土壙は、不整方形で長径0.85ｍ・短

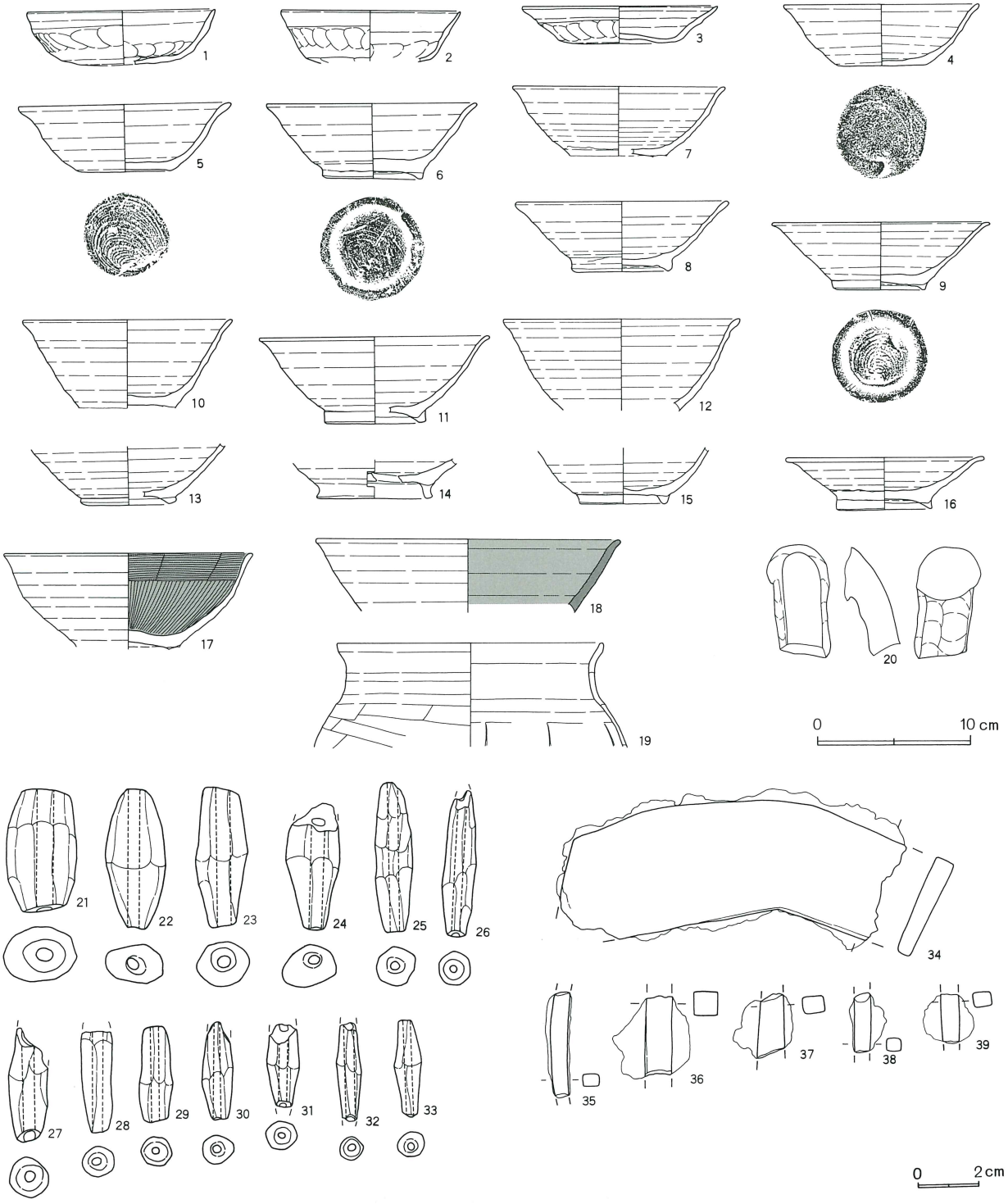
第335図　第198号住居跡



第１９８号住居跡

1　暗褐色土　焼土を多量に含み、砂利を少量含む
2　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、暗灰褐色土ブロックをしもふり状に含む
3　暗褐色土　暗灰褐色土ブロックをしもふり状に多量に含む 焼土等は含まない
4　暗黄褐色土　砂利を少量含む
5　暗褐色土　焼土、炭を多量に含み、暗灰褐色土をしもふり状に含む 粘性あり
6　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む（天井部崩落土）
7　暗灰褐色土　焼土少量含み、白色粒子を多量含む 砂質
8　黒褐色土　焼土を微量含む
9　暗褐色土　炭化粒子を少量含む
10　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を微量含む
11　暗褐色土　焼土、炭化材を少量含む 灰褐色を多量含む
12　暗灰褐色土　灰褐色土少量含む

第336図　第198号住居跡出土遺物



径0.8m・深さ0.13mであった。

主軸方位は、N－101°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られていた。非常に短く住居跡内に延びていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右脇で検出した。形状は、不整楕円形であった。規模は、長径0.82m・短径0.62m・深さ0.19mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（2）、須恵器の

高台付椀（6・9・10）、土師器の甕（19）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2は、土師器の坏Aである。3は、土師器の皿である。1・2は底部が欠損している。

4・5は、須恵器（HS）の椀である。6から15は、高台付椀である。7・9・10・13・15は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。7・11・

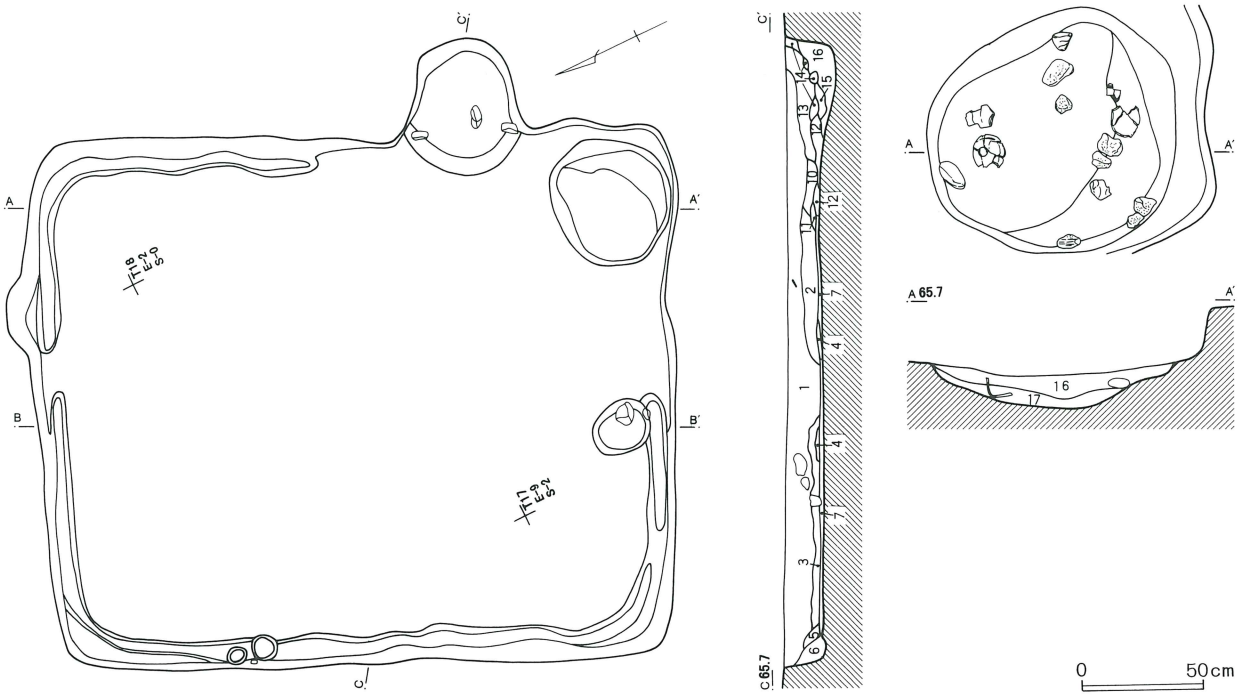
第289表　第198号住居跡出土遺物観察表

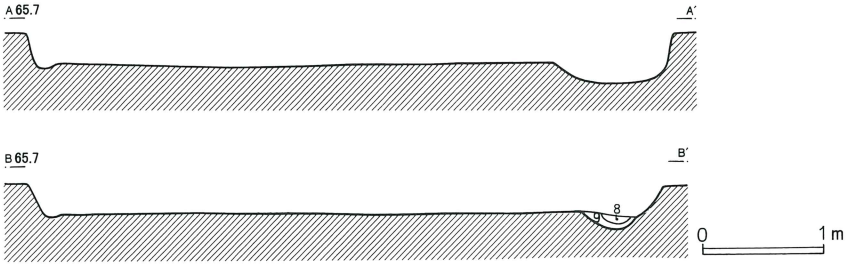
番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.5		6.0	B, D, E	普通		黄橙	60	貯蔵穴
2	坏 A	H	11.5				B, E	不良		淡黄	20	貯蔵穴
3	皿	H	12.6	2.4		6.7	B, D, E	不良		橙白	70	
4	椀	HS	12.6	4.0		5.7	B, I	良好	R	にぶい黄橙	90	
5	椀	HS	13.5	4.3		5.6	B, C	良好	R	内－褐灰。外－にぶい橙	40	
6	高台付椀	HS	13.5	4.8		6.2	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	60	貯蔵穴
7	高台付椀	NS	13.7	5.2		5.6	B, D, E	良好	R	灰白	30	
8	高台付椀	HS	13.6	4.5		6.0	B, G	普通	R	灰白	60	貯蔵穴
9	高台付椀	NS	14.0	4.3		5.7	B	良好	R	灰白	60	貯蔵穴
10	高台付椀	NS	13.5	6.2		5.7	B, E, I	良好	R	灰白	50	貯蔵穴
11	高台付椀	HS	14.7	5.6		6.5	B, C, E	普通	L	にぶい黄橙	30	
12	高台付椀	HS	15.2				B, E, G	良好	R	外－にぶい橙。内－灰黄褐	20	
13	高台付椀	NS				5.3	B, E, I	良好	R	灰黄	20	
14	高台付椀	HS				7.4	B, E, I	良好	R	内－褐灰。外－橙	20	
15	高台付椀	NS				5.3	B, G	良好	R	灰白	25	
16	高台付皿	NS	12.8	3.3		5.9	B, G, I	良好	R	灰白	70	
17	高台付椀	黒色	15.9	6.6		6.2	B, E, G	良好	R	内－褐灰。外－にぶい橙	50	
18	高台付椀	K	19.5				D	良好	L	外－灰白。内－オリーブ灰	10	
19	甕 B Ⅲ a	H	17.1				B, E, H	良好		浅黄橙	15	貯蔵穴
20	脚付釜	H					A, B, E, H	良好		橙		

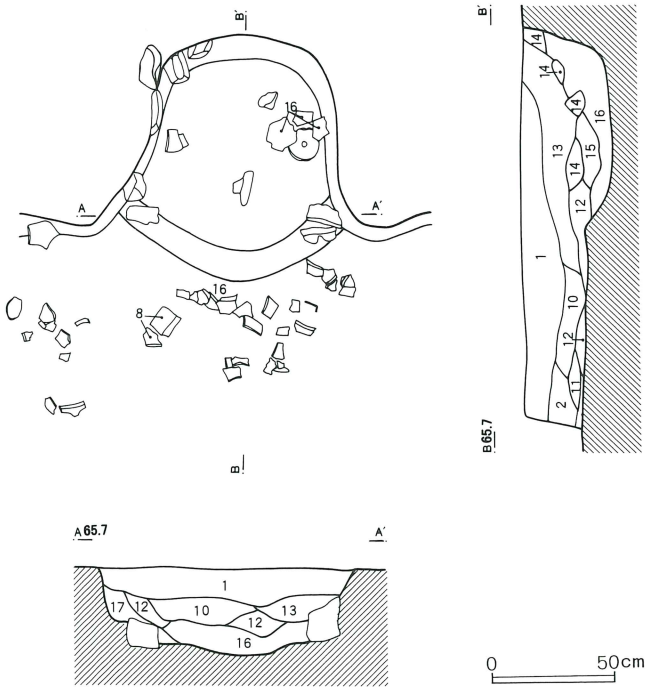
第290表　第198号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
21	にぶい赤褐	100	4.0	2.4	0.5	16.6	B 1	Ⅰa	63	
22	にぶい赤褐	100	4.5	1.9	0.4	10.2	C 1	Ⅰa	173	
23	浅黄橙	100	4.5	1.8	0.4	10.6	C 1	Ⅰa	174	
24	褐灰	70		1.1	0.4	8.0	C 1	Ⅱa	175	
25	浅黄橙	100	4.8	1.4	0.3	7.5	C 2	Ⅰa	440	
26	にぶい橙	90	4.8	1.0	0.2	5.5	C 2	Ⅰb	441	
27	にぶい橙	60		1.2	0.3	5.5	C 2	Ⅷ	442	
28	橙	70				3.4	C 2	Ⅱa	443	
29	黄橙	100	3.1	0.9	0.2	2.9	C 2	Ⅰa	176	
30	にぶい橙	70		1.0	0.3	2.1	C 2	Ⅱa	444	
31	橙	60		1.0	0.2	2.1	C 2	Ⅷ	445	
32	浅黄橙	80		0.8	0.2	1.3	C 2	Ⅱb	446	
33	橙	100	3.1	0.9	0.2	1.7	C 2	Ⅰa	447	

第337図　第199号住居跡







第１９９号住居跡

1　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含み、小礫を少量含む
2　褐色土　焼土、炭化物を少量含み、Ｂ軽石、地山ブロックを多量に含む
3　暗褐色土　焼土、炭化物を部分的に多量に含み、地山ブロックを少量含む
4　暗褐色土　焼土、炭化物ブロックを多量に含む
5　暗赤褐色土　焼土を多量に含む
6　黒褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
7　褐色土　部分的に焼土を多量に含み、礫、砂、黄褐色土を多量に含む（貼り床）
8　黒褐色土　焼土を少量含み、炭を多量に含む
9　暗黄褐色土　焼土、炭を少量含み、地山ブロック、礫を含む
10　暗褐色土　焼土を微量含む
11　暗褐色土　焼土を微量含み、黄白色粘土ブロックを少量含む
12　黒色土　炭化物主体 焼土、黄白色粘土ブロックを少量含む
13　暗褐色土　焼土を多量に含み、黄白色粘土ブロックを少量含む
14　暗褐色土　焼土を多量含み、炭化物ブロックを少量含む
15　黒褐色土　焼土、炭化物を少量含む
16　暗灰褐色土　焼土を少量含み、炭を微量含み、砂礫を多量に含む
17　暗褐色土　焼土を微量含み、炭、礫を少量含む

第338図　第199号住居跡遺物分布図

12は底部、13・15は口縁部が欠損している。14は底部のみである。

16は、須恵器（ＮＳ）の高台付皿である。

17は、黒色土器の高台付椀である。高台が欠損している。

18は、灰釉陶器の高台付椀である。底部が欠損している。

19は、土師器の甕である。20は、土師器の脚付釜の脚部である。19は胴部中位以下が欠損している。

21から33は、土錘である。

34から39は、鉄製品である。34は板状鉄製品（不明）、35から39は角棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第198号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第199号住居跡（第337図・第338図・第339図・第340図・第341図）

Ｓ・Ｔ－17・18グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.16ｍ・短辺4.17ｍ・深さ0.31ｍであった。北壁のやや東寄りに、小さな張り出しを検出した。この張り出し部とカマドから貯蔵穴を除いて、幅0.3ｍの壁溝を検出した。また住居跡の南壁中央から径0.45ｍ・深さ0.15ｍの小穴を検出した。

床面から炭化材が多量に出土したことから、いわゆる焼失住居と判断した。

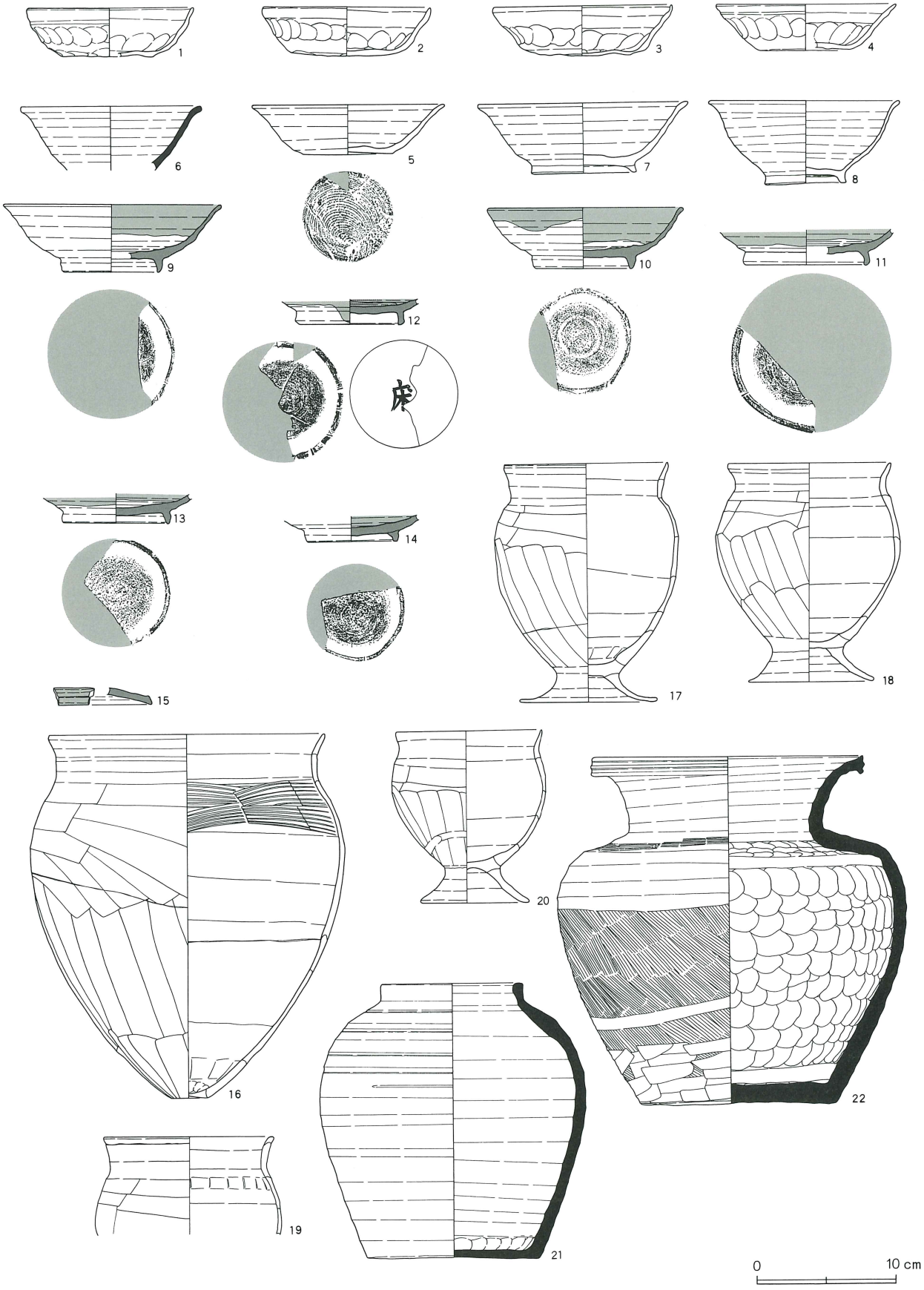
主軸方位は、Ｎ－127°－Ｅであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は検出されず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、整った方形で、燃焼部の底面には円形の掘り込みがみられた。

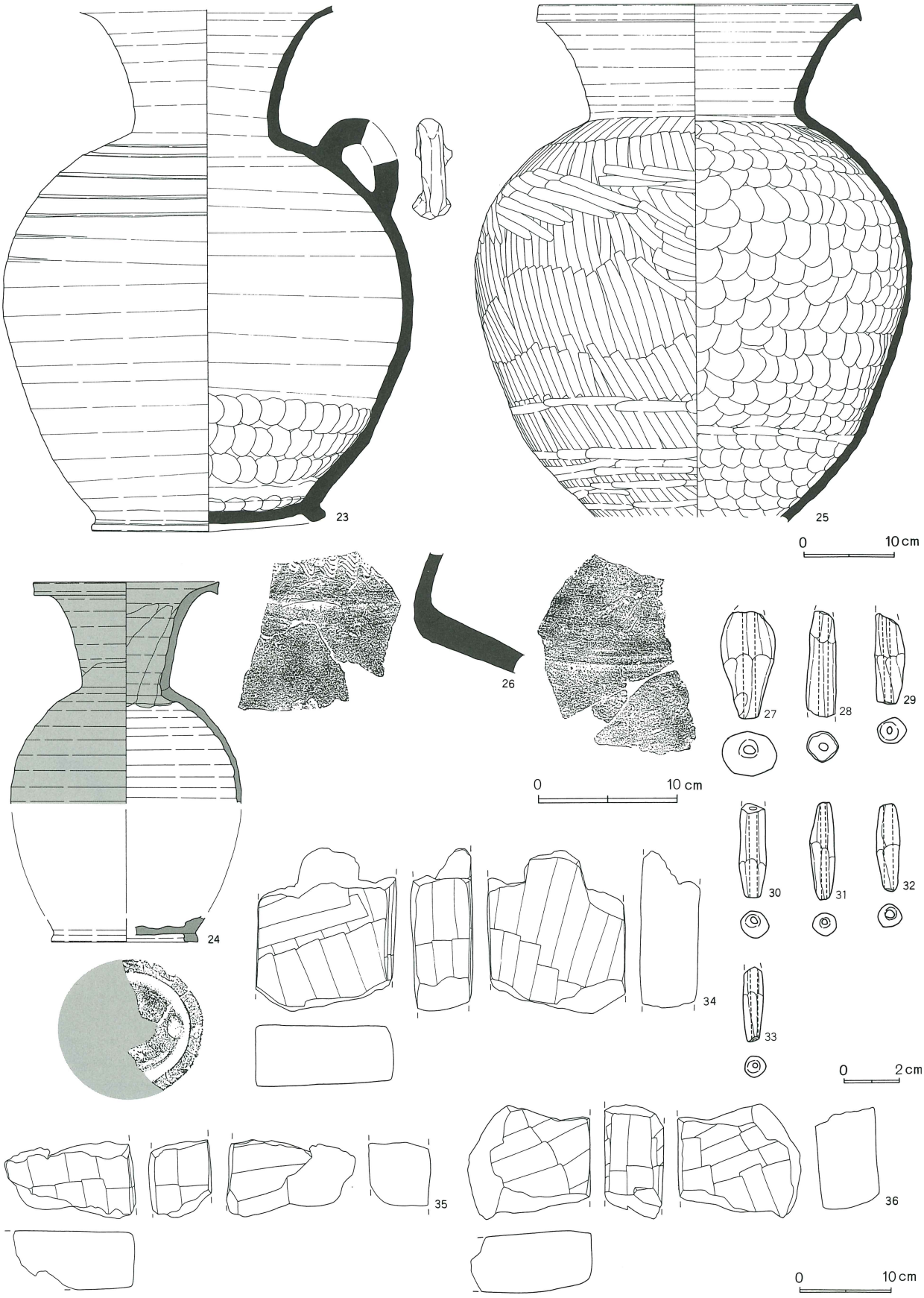
第291表　第199号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.5		6.6	B, D	良好		暗橙	40	
2	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.5		5.2	B, D, E, G	普通		橙	100	
3	坏 A Ⅵ	H	12.7	3.6		6.4	B, D, E, H	普通		暗橙	100	
4	坏 A Ⅵ	H	12.8	3.3		6.2	B, D, E	普通		黄褐	30	
5	椀	NS	13.6	3.6		6.3	B, D, E	良好	R	灰白	60	
6	高台付椀	S	12.7				B, D	良好	R	灰	20	
7	高台付椀	NS	15.1	5.0		7.3	B, E, G	良好	R	灰白	50	貯蔵穴
8	高台付椀	HS	13.3	5.9		5.5	B, C	良好	R	灰黄	90	貯蔵穴・カマド
9	高台付椀	K	15.4	4.8		6.7	B, D	良好		淡灰白	40	
10	高台付椀	K	13.9	4.3		6.9	B, D	良好		灰白	50	
11	高台付椀	K				8.6	D	良好		灰白	20	
12	高台付椀	K				7.1	B	普通		淡灰白	20	
13	高台付椀	K				7.4	B, D	良好		淡灰白	20	
14	高台付椀	K				6.1	B	良好		淡灰白	20	
15	蓋	K					D	良好		淡灰褐	10	
16	甕 B Ⅰ a	H	19.7	25.9		2.6	B, D, E	良好		浅黄橙	80	カマド

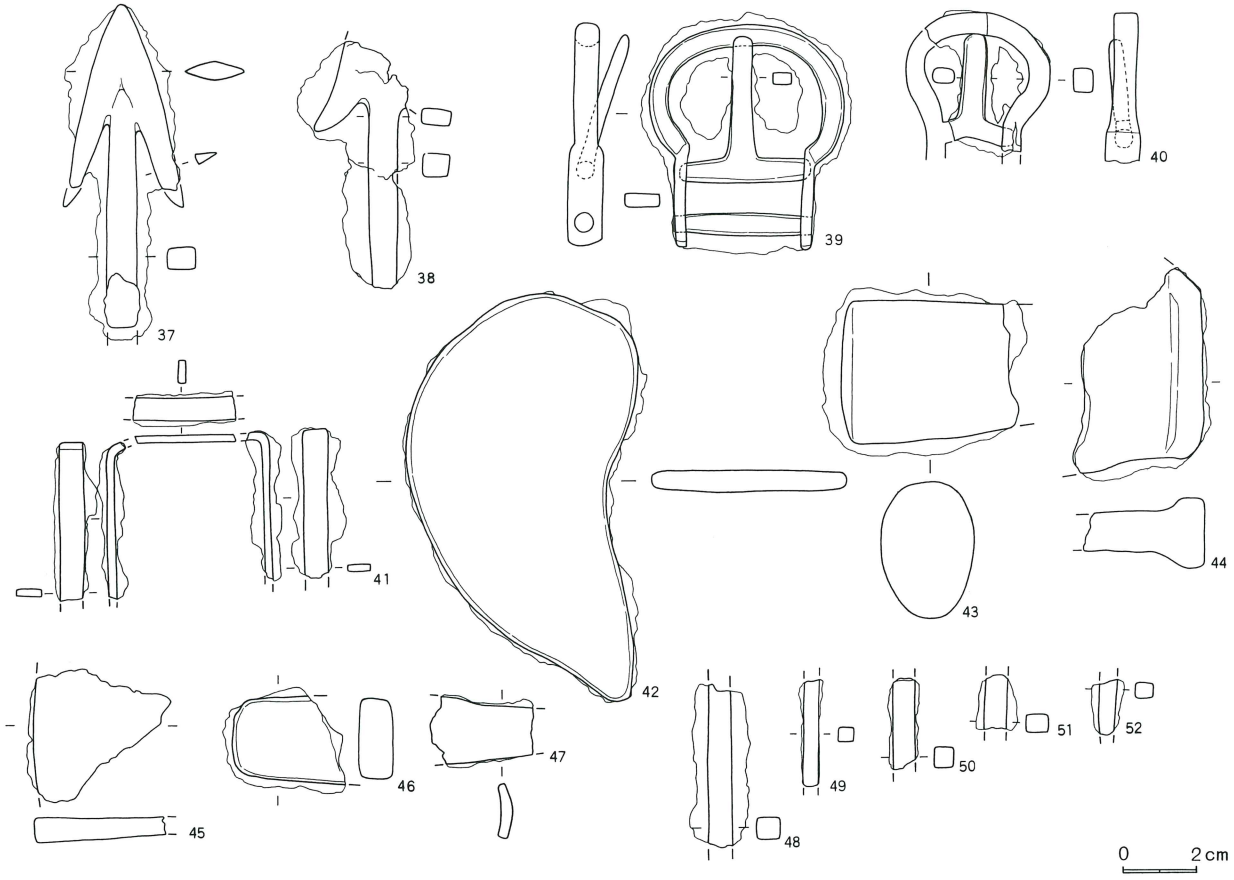
第339図　第199号住居跡出土遺物（1）



第340図　第199号住居跡出土遺物（２）



第341図　第199号住居跡出土遺物（３）



第292表　第199号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
17	台付甕	H	11.6	17.0		9.2	B, H	やや不良		橙	80	
18	台付甕	H	11.5	15.6		8.8	B, H	良好		橙	90	カマド
19	台付甕	H				11.9	D, E	普通		橙	20	カマド
20	台付甕	H	10.3	12.2		7.4	B, D, E	普通		橙	90	
21	短頸壷	S	9.9	19.5		12.2	B, G	良好	R	暗灰色(やや赤色の焼きムラあり)	80	
22	短頸壷	S	19.2	25.0		14.9		良好		暗灰	100	口縁一部欠損
23	長頸壷	S	19.7	38.7	15.8					暗灰		
24	長頸壷	K	13.1	25.4		10.3	D	普通		淡灰白		
25	大甕	S	34.2	58.2				良好		暗灰褐	70	
26	大甕	S					B, E, K	良好		青灰	5	

第293表　第199号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
27	褐灰	50		2.0	0.4	9.0	C 1	Ⅲa	177	
28	橙	60		1.2	0.4	3.9	C 2	Ⅱb	448	
29	にぶい橙	80		1.0	0.3	2.9	C 2	Ⅱa	449	
30	浅黄橙	70		1.0	0.3	2.8	C 2	Ⅱa	450	
31	浅黄橙	100	3.5	0.8	0.2	1.9	C 2	Ⅰc	451	
32	浅黄橙	100	3.1	0.9	0.3	1.8	C 2	Ⅰa	452	
33	浅黄橙	60		0.7	0.2	1.4	C 3	Ⅱa	645	

貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、不整円形で規模は、径1.02ｍ・深さ0.12ｍであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内や前面から須恵器の高台付椀（８）、土師器の甕（16）が、カマド右脇から土師器の台付甕（20）、須恵器の大甕（25）が出土した。住居跡の北東部から土師器の坏（２・３）、須恵器の甕（22）・把手付壷（23）、灰釉陶器の長頸瓶（24）、凝灰岩の切石（35）が出土した。

１から４は、土師器の坏である。２は、坏ＡⅣである。他は、坏ＡⅥである。４は底部が欠損している。

５は、須恵器（ＮＳ）の椀である。

６は、須恵器（Ｓ）の高台付椀である。底部が欠損している。

７・８は、高台付椀である。７は須恵器（ＮＳ）、８は須恵器（ＨＳ）である。

９から14は、灰釉陶器の高台付椀である。12は底部外面に墨書「床」がみられる。15は、灰釉陶器の蓋である。９は底部、11は口縁部と底部が欠損している。12から14は底部のみ、15は口縁部のみである。

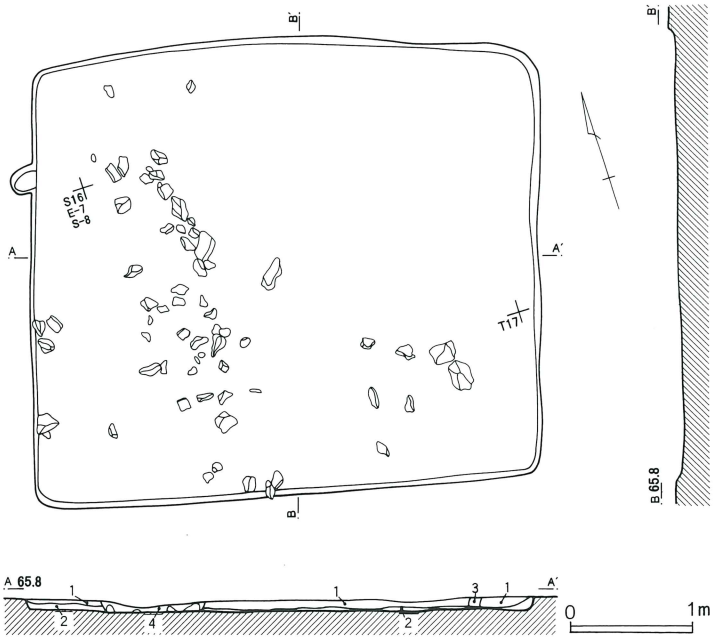
16から20は、土師器の甕である。19は胴部下位以下が欠損している。

21・22は、須恵器（Ｓ）の短頸壷である。23は、須恵器（Ｓ）の長頸壷である。24は、灰釉陶器の長頸壷である。25・26は、須恵器（Ｓ）の大甕である。23は口縁部、24は胴部下位、25は底部が欠損している。26は胴部破片である。

27から33は、土錘である。

34から36は、凝灰岩の切石である。

第342図　第200号住居跡・出土遺物



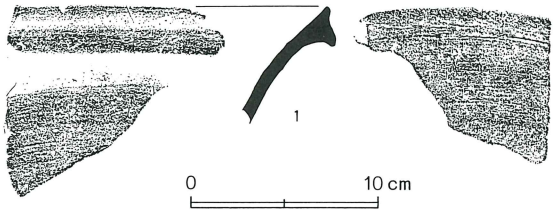
第２００号住居跡

1　暗灰褐色土　焼土粒子を微量含み、白色粒子を多量に含み、暗褐色土ブロックを少量含む

2　暗黄褐色土　白色粒子を多量に含む

3　暗褐色土　Ｂ軽石を少量含む 粘性あり

4　暗灰褐色土　砂質



37から52は、鉄製品である。37・38は鉄鏃、39・40は鉸具、41は不明品、42は板状不明鉄製品、43は金槌か、44から47は延板及び板状鉄製品、48から52は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第199号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第200号住居跡（第342図）

Ｓ・Ｔ－16・17グリッドで確認した。周辺は、土壙・小穴などがみられたが、疎らであった。

第294表　第200号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	大　甕	S					A, B, C, H	良　好		灰　白	5	

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.05m・短辺3.53m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N－19°－Eであった。

カマドは検出されなかった。

住居跡の西半分から川原石が、多量に出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器（S）の大甕である。口縁部破片である。

以上、出土遺物から第200号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第201号住居跡（第343図）

U－17・18グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.05m・短辺2.38m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N－91°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部の位置から、左袖が短く造り付けられていたと推定した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。焚き口部の前面から川原石が、まとまって出土した。構築材であろう。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。底部が欠損している。

2は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

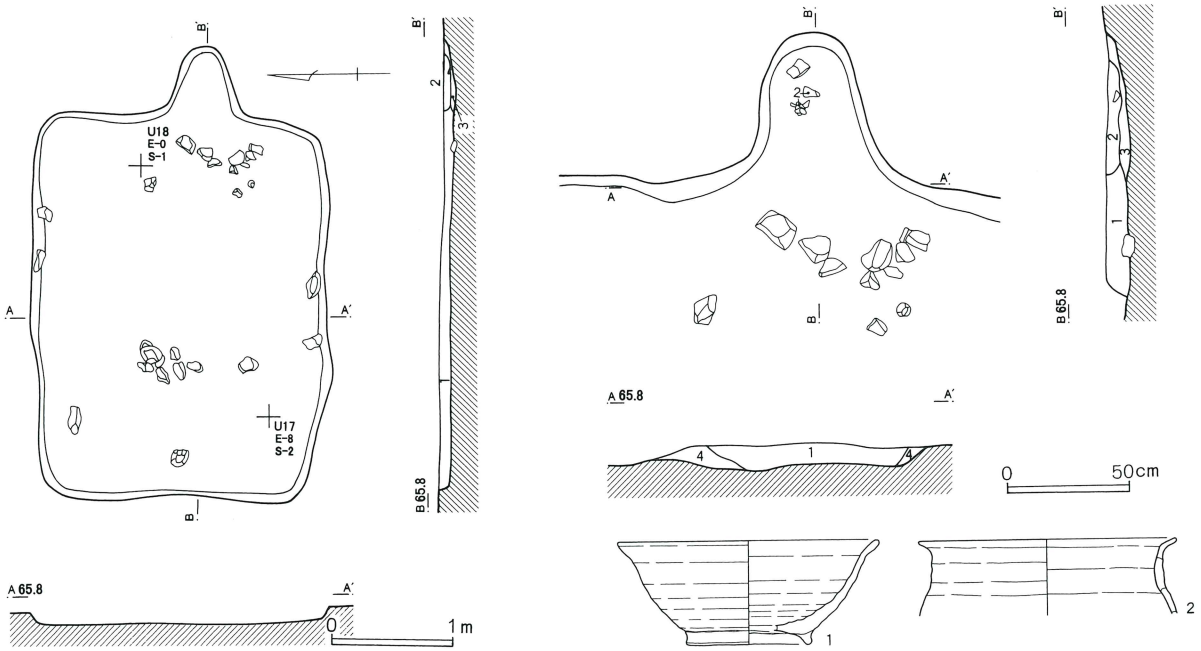
以上、出土遺物から第201号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第202号住居跡（第344図・第345図・第346図・第347図・第348図・第349図）

Q・R－20グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・土壙などの遺構は密集していた。また砂利層が確認面のため、確認作業が困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、辺5.79m・短辺4.48m・深さ0.44mと、比較的大形の住居跡であった。住居跡の中央やや北東寄りに、二基の小穴

第343図　第201号住居跡・出土遺物



第２０１号住居跡

1　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含み、B軽石を少量含み、礫を多量に含む

2　暗褐色土　焼土ブロックを多量含み、B軽石を少量含む

3　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を微量含み、地山ブロックを少量含む

4　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含み、地山ブロック、礫、B軽石を少量含む

を並んで検出した。

カマドは、北壁の北東寄りと東壁の南東寄りに二基検出した。覆土の状況から、１・２号カマドとも、住居跡の埋没まで共用していたと推定した。

１号カマドの袖は検出できず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、不整楕円形に掘り込まれ、奥に向かって深くなっていた。

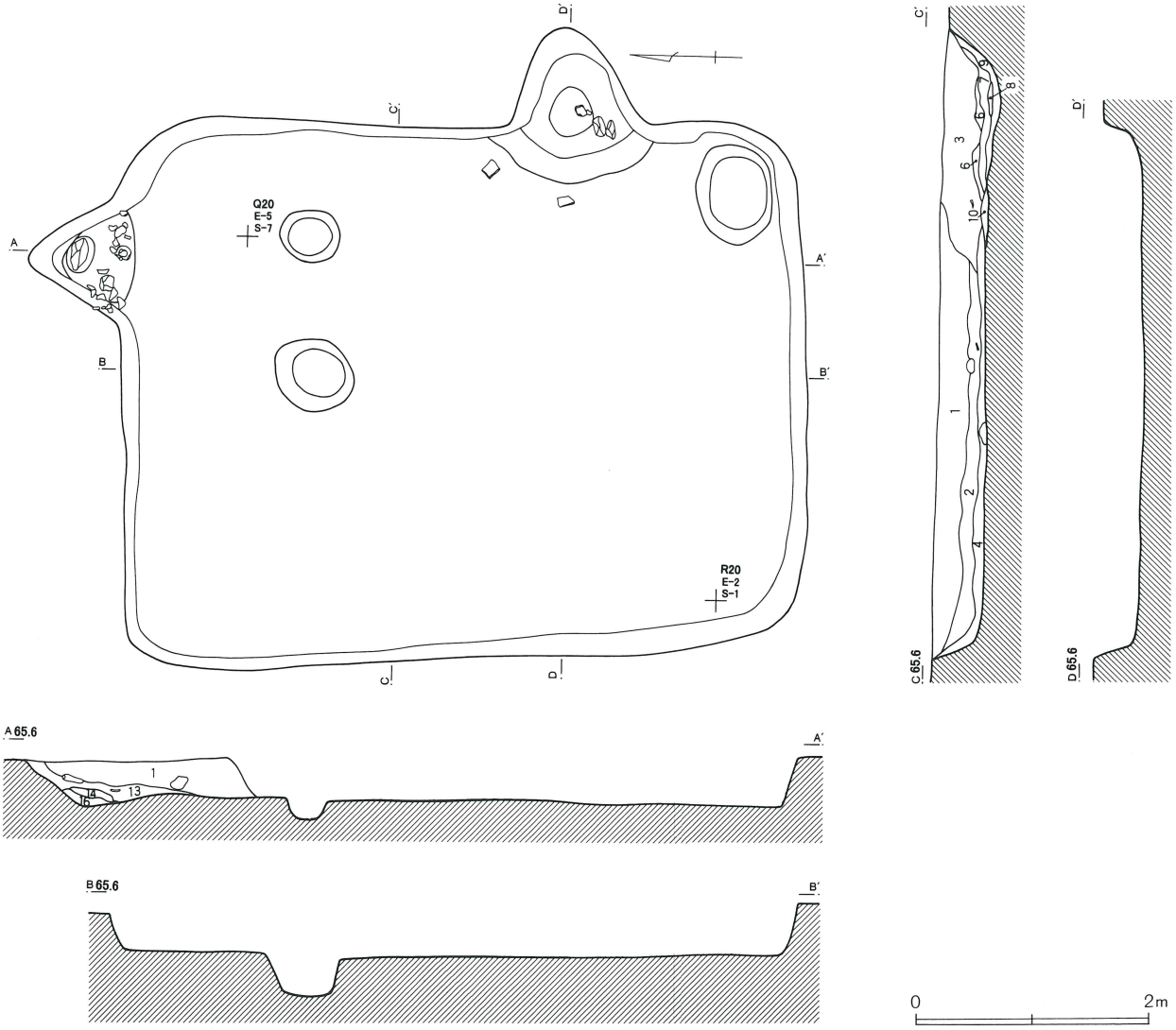
２号カマドの袖は検出できず、１号カマドと同様に当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、円形に掘り込みがみられ、底面に小さな凹凸がみられた。

貯蔵穴は、２号カマドの右側隅に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.83ｍ・短径0.65ｍ・深さ0.16ｍであった。

遺構の切り合い関係は、集石列より古かった。

遺物は、１号カマド内から土師器甕（52・60）が、

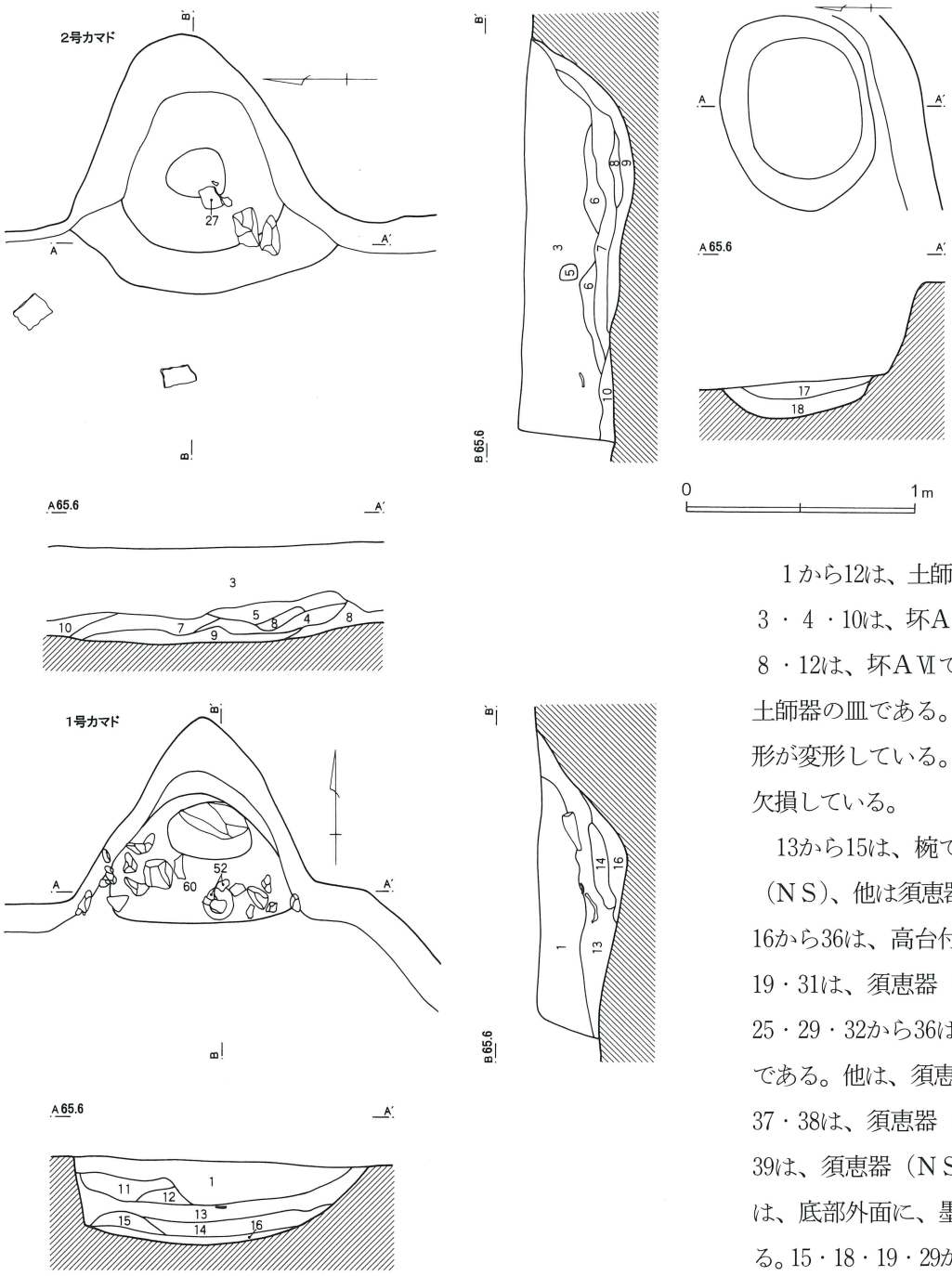
第344図　第202号住居跡



第２０２号住居跡

1　暗褐色土　焼土、大形礫、砂利を多量に含む
2　暗褐色土　焼土、砂利を少量含む 粘性あり
3　暗褐色土　焼土、炭を多量に含み、暗灰褐色土ブロックを少量含む
4　暗灰褐色土　焼土を微量含み、砂を少量含む 粘性あり
5　暗黄褐色土　砂を少量含む 粘質土
6　暗褐色土　焼土を少量含み、砂を多量に含む
7　暗褐色土　焼土主体 粘性あり（天井部崩落土）
8　黒色土　炭を多量に含む 粘性あり
9　暗褐色土　焼土、炭、砂を多量に含み、粘性のある暗灰褐色土ブロックを少量含む
10　暗褐色土　焼土、暗黄褐色土を少量含む
11　暗褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
12　暗黄褐色土　焼土を多量に含む 砂質
13　暗褐色土　焼土を多量に含み、暗黄褐色土を少量含む 粘性あり
14　暗黄褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
15　暗黄褐色土　焼土、砂を少量含む
16　黒褐色土　焼土、砂を多量に含む
17　暗褐色土　焼土、灰を少量含む 砂を含む
18　暗褐色土　焼土、炭を微量含む 砂利を少量含む

第345図　第202号住居跡カマド・貯蔵穴



2号カマドから須恵器の高台付椀（27）が、貯蔵穴内から土師器の坏（5）、須恵器の高台付椀（25）、土師器の甕（50・56）、鉄製品（83）が出土した。また、住居跡の中央から西側にかけて須恵器の大甕（63）が散乱して出土した。また石製巡方（82）が、住居跡の中央やや北寄りから出土した。そのほか住居床面から、大形の川原石と、多量の土器が出土した。

1から12は、土師器の坏である。1・3・4・10は、坏AⅣである。2・5・8・12は、坏AⅥである。9・11は、土師器の皿である。11は、熱を受け器形が変形している。9から11は底部が欠損している。

13から15は、椀である。13は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。16から36は、高台付椀である。16から19・31は、須恵器（S）である。24・25・29・32から36は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。37・38は、須恵器（S）の皿である。39は、須恵器（NS）の皿である。35は、底部外面に、墨書「床」がみられる。15・18・19・29から34は口縁部、22・23・27・28・39は底部、26は高台が欠損している。35・36は底部のみである。

40から42は、灰釉陶器の高台付椀である。43から45は、灰釉陶器の高台付皿である。41・43は底部、42は口縁部が欠損している。44・45は底部のみである。

46から60は、土師器の甕である。61は、灰釉陶器の長頸壺である。62は、灰釉陶器の小瓶である。63から66は、須恵器（S）の大甕である。46から49・51・53・

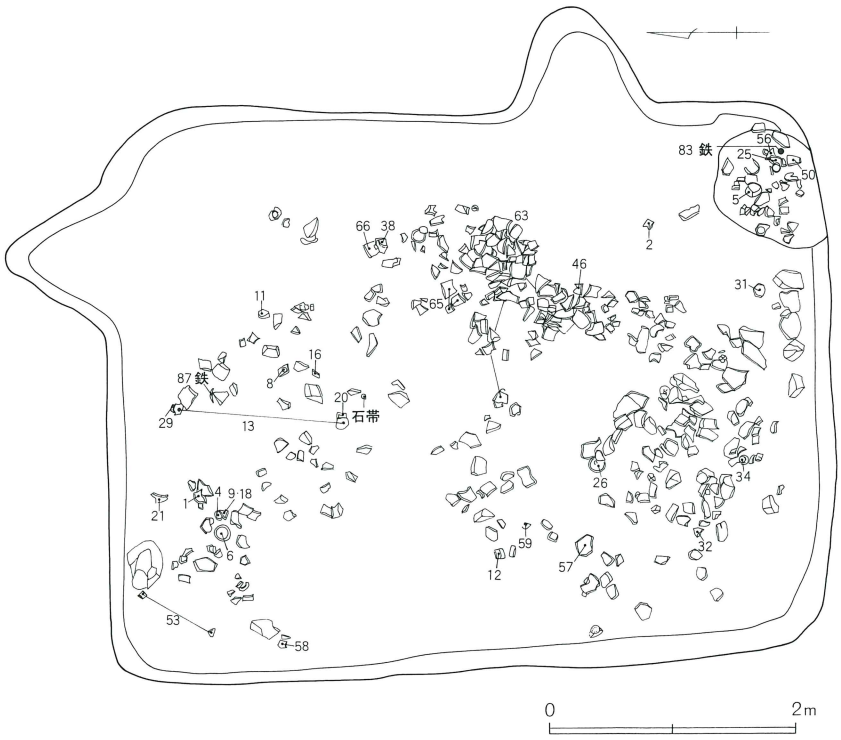
第295表　第201号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	13.7	5.5		6.3	B, C, E, I	良　好	R	浅黄橙	20	カマド
2	甕 B Ⅱ a	H	13.5				B, E, H	良　好		橙	30	カマド

第296表　第202号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.9		7.1	B, D, E	普　通		黄　褐	40	
2	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.9		5.2	B, D, E	普　通		黄　褐	40	
3	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.4		7.6	D, E, H	普　通		黄　褐	60	
4	坏 A Ⅳ	H	12.9	3.4		8.5	B, D, E	普　通		黄　橙	100	カマドA
5	坏 A Ⅵ	H	12.9	3.3		7.8	B, D, E	普　通		黄　橙	60	貯穴
6	坏 A	H	12.1	3.4		7.2	B, E	普　通		淡　橙	100	
7	坏 A	H	12.0	3.4		7.9	B, D, E	普　通		黄　褐	40	
8	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.3		7.1	B, D, E	普　通		淡　橙	70	
9	皿	H	13.0	3.3		9.5	B, D, E, H	普　通		茶　褐	30	貯穴
10	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.3		6.7	B, D	普　通		黄　褐	20	
11	皿	H	12.6	2.8		6.9	B, E, H	普　通		灰　褐	30	カマドA
12	坏 A Ⅵ	H	11.0	3.1		5.6	B, E, H	普　通		淡黄褐	30	
13	椀	NS	11.6	3.9		5.3	B, E, I	良　好		黄　灰	90	
14	椀	HS	12.8	4.0		6.1	B, E, I	普　通	R	灰　黄	70	
15	椀	HS				5.8	B, G, I	良　好	R	にぶい黄橙	30	
16	高台付椀	S	12.7	5.3		7.1	B, D	良　好	R	灰	70	
17	高台付椀	S	13.7	5.5		6.3	B	良　好	R	灰	20	
18	高台付椀	S				6.8	B, D	良　好	R	灰	20	
19	高台付椀	S				5.7	B	良　好	R	灰	50	

第346図　第202号住居跡遺物分布図



54・55は胴部中位以下、50・52・56は胴部下位以下、57は胴部中位以上と脚部、58・59は胴部中位以上、62は口縁部と底部が欠損している。60・61は底部のみ、64は口縁部のみである。65・66は口縁部破片である。

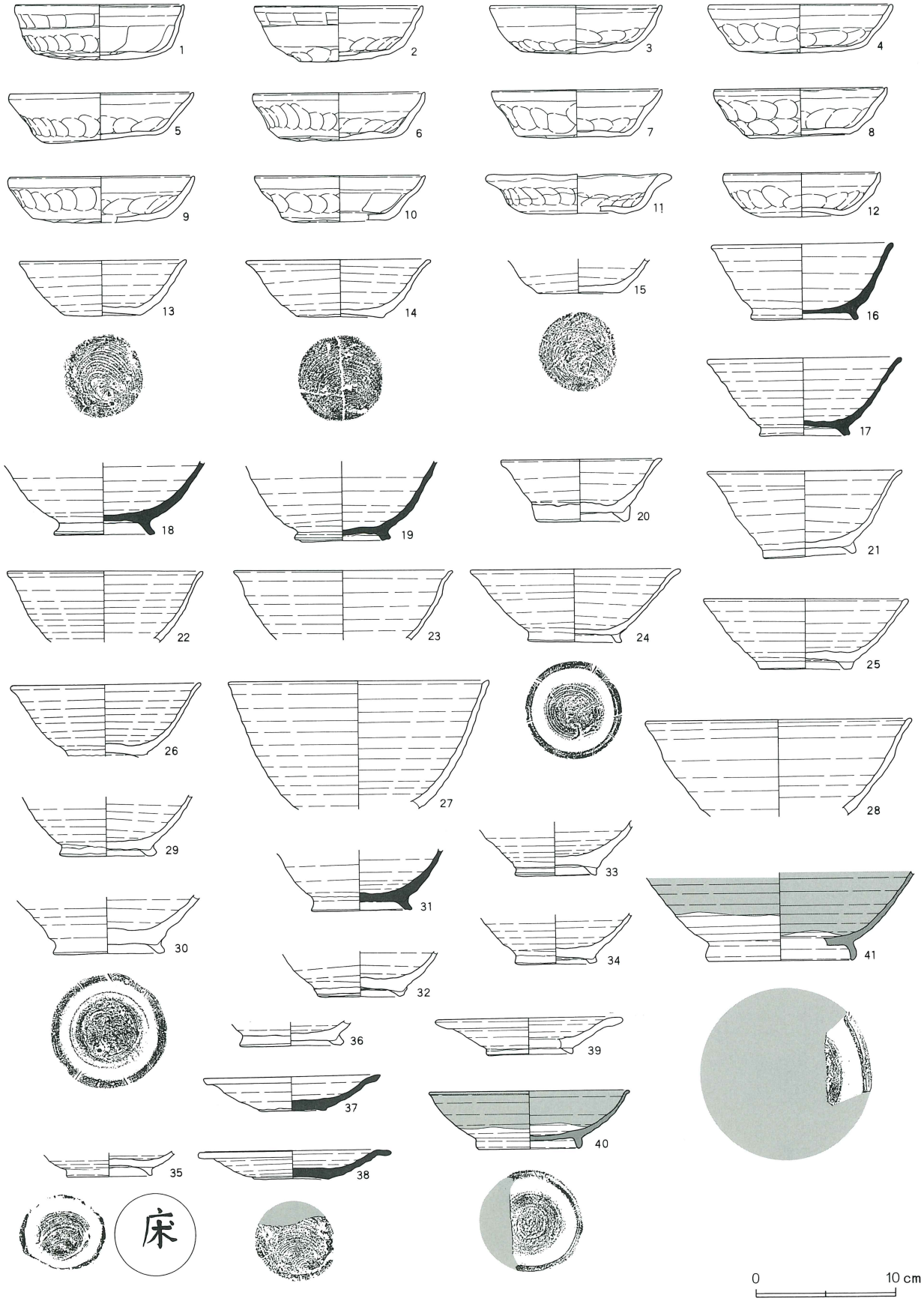
67から81は、土錘である。

82は、石製腰帯具（石帯）の巡方である。

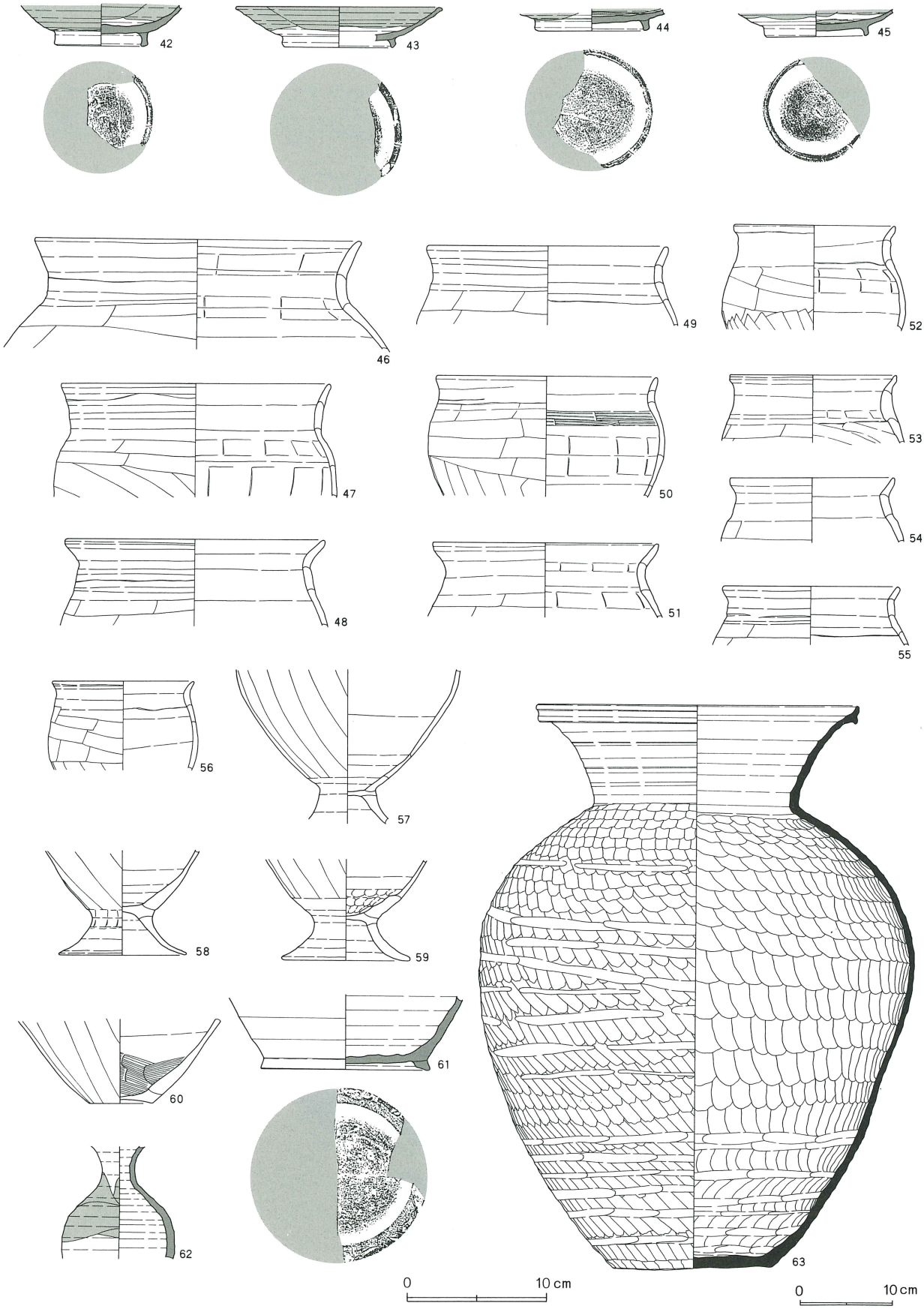
83は、銅製の半管状金具と棒状鉄製品が付着したものである。84は刀子、85は刀子の刃部、86・87は釘、88は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第202号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

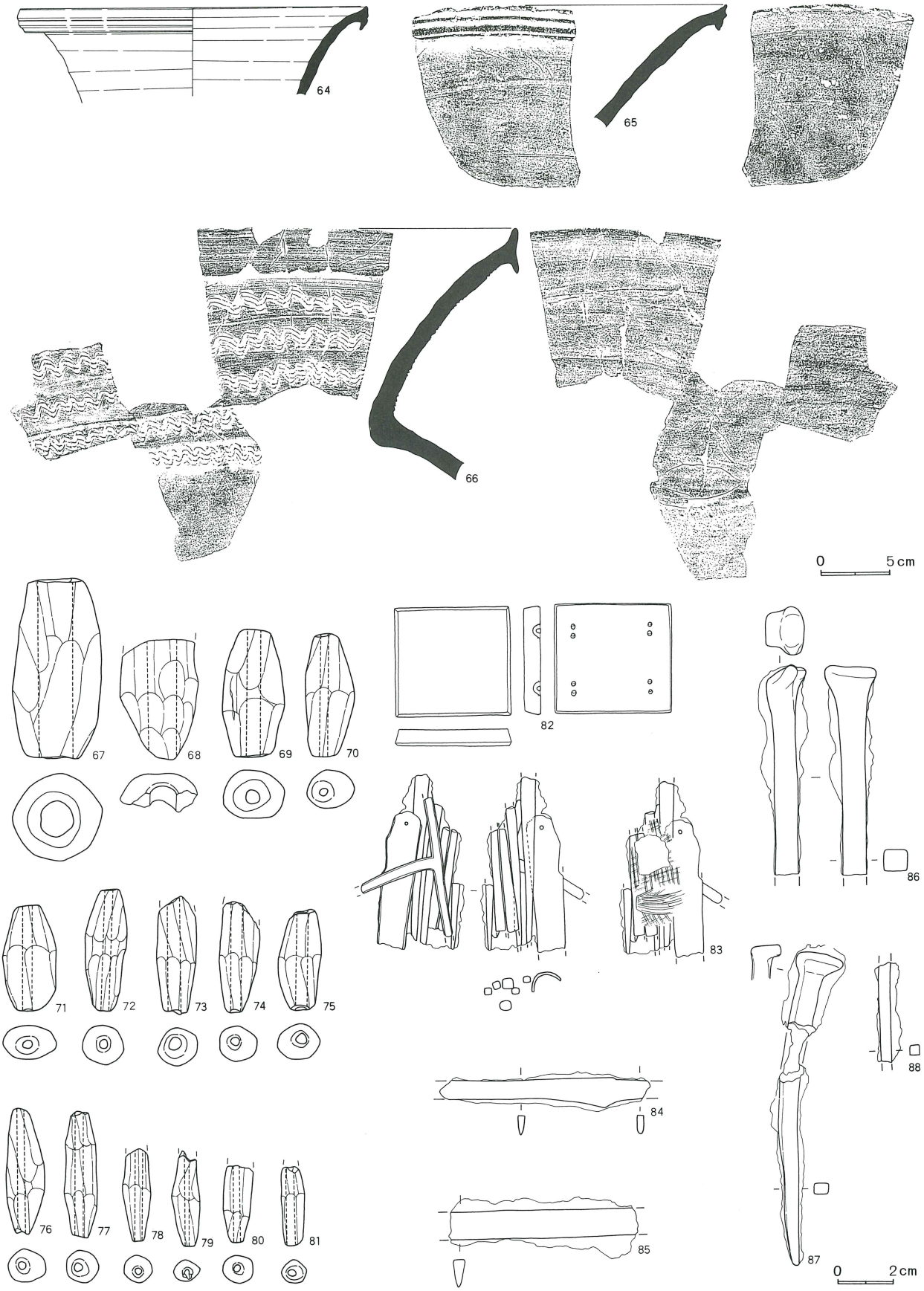
第347図　第202号住居跡出土遺物（1）



第348図　第202号住居跡出土遺物（２）



第349図　第202号住居跡出土遺物（3）



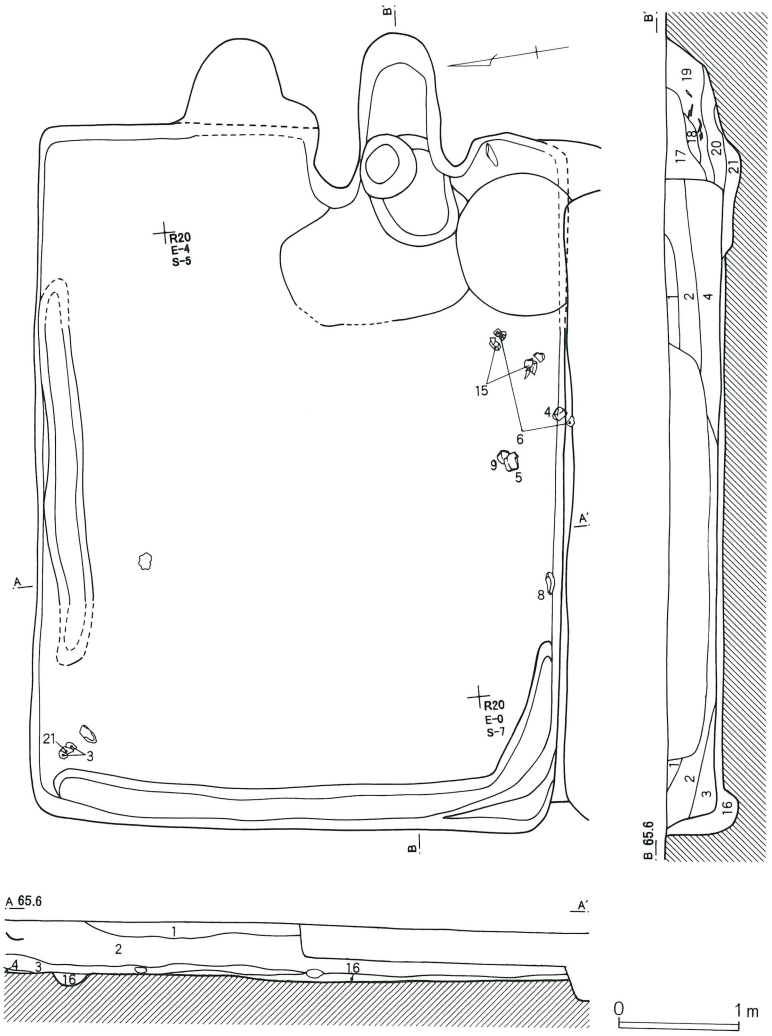
第297表　第202号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
20	高台付椀	NS	11.4	4.4		5.1	B, E, G	良好	R	灰白	80	
21	高台付椀	NS	13.8	6.0		6.3	B, E, I	普通	R	灰白	90	
22	高台付椀	NS	13.8				B, I	良好	R	灰	20	
23	高台付椀	NS	15.4				B, D	良好	R	灰白	20	
24	高台付椀	HS	14.6	5.2		6.5	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	95	貯穴
25	高台付椀	HS	14.4	5.0		6.2	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	50	貯穴
26	高台付椀	NS	13.3				B, E	良好	R	灰黄	100	高台欠損
27	高台付椀	NS	18.4				B, E	良好	R	灰白	10	カマドA
28	高台付椀	NS	18.8				B, E	良好	R	灰白	20	
29	高台付椀	HS				6.3	B, C, I	良好	R	にぶい橙	40	
30	高台付椀	NS				7.3	B, E	良好	R	灰白	30	
31	高台付椀	S				6.8	B, D	良好	R	灰白	30	
32	高台付椀	HS				5.5	B, C, E, I	良好	R	にぶい黄橙	30	
33	高台付椀	HS				5.4	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	30	
34	高台付椀	HS				5.0	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	30	
35	高台付椀	HS				5.9	B, D, E, H	普通	R	にぶい黄橙	30	
36	高台付椀	HS				7.1	B, C, E, I	良好	R	にぶい橙	20	
37	皿	S	12.2	2.4		4.7	B	良好	R	灰	25	
38	皿	S	12.2	1.8		5.4	B	良好	R	灰	60	
39	高台付皿	NS	12.8	2.6		6.0	B, I	良好	R	褐灰	25	
40	高台付椀	K	14.1	4.1		7.1	B, D	良好		灰白	30	
41	高台付椀	K				10.2	B	良好		淡灰白	20	
42	高台付椀	K				5.9	B	良好	R	灰白	10	
43	高台付皿	K	14.3	2.9		7.7	B	良好	L	灰白	25	
44	高台付皿	K				7.4	B, D	良好	R	灰白	20	
45	高台付皿	K				6.8	B, D	良好		淡灰白	20	
46	甕AⅠb	H	22.9				B, E, H	良好		橙	25	
47	甕AⅢc	H	18.9				B, C, E	良好		浅黄橙	15	
48	甕BⅢa	H	18.3				B, D, E	良好		浅黄橙	25	
49	甕BⅢa	H	16.9				B, C, E	良好		浅黄橙	20	
50	甕AⅠc	H	15.5				B, C, E	良好		浅黄橙	30	貯穴
51	甕BⅢa	H	16.0				B, D, E	良好		橙	20	
52	台付甕	H	11.3				B, D, E	良好		浅黄橙	30	
53	台付甕	H	11.7				B, C, H	良好		橙	70	
54	台付甕	H	11.5				B, E, H	良好		にぶい黄橙	40	カマドA
55	台付甕	H	12.2				B, C, E, H	良好		浅黄橙	40	
56	台付甕	H	10.0				B, E	良好		にぶい黄橙	25	貯穴
57	台付甕脚	H					B, C, E, H	良好		橙	90	
58	台付甕脚	H				8.9	B, E	良好		橙		脚部－70。他－40
59	台付甕脚	H				8.6	B, E, H	良好		橙	40	
60	甕底部	H				4.5	B, C, H	良好		にぶい橙	100	カマドB
61	長頸壷	K				11.7	B	良好	R	灰白	10	
62	小瓶	K						良好		灰白	40	
63	大甕	S	17.0	30.0		8.4		良好		青灰	60	
64	大甕	S					B	普通		青灰	10	
65	大甕	S					B	普通		青灰	10	
66	大甕	S					B	普通		青灰	10	

第298表　第202号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
67	にぶい黄橙	100	6.4	3.2	1.2	64.1	A 1	Ⅰb	16	
68	にぶい黄橙	30				12.2	B 1	Ⅶ	64	
69	にぶい橙	100	4.6	2.2	0.5	17.0	B 1	Ⅰa	65	
70	浅黄	100	4.4	1.7	0.3	10.0	C 1	Ⅰa	178	
71	橙	100	3.8	2.0	0.3	9.3	C 1	Ⅰa	179	
72	にぶい橙	100	4.4	1.5	0.3	8.5	C 1	Ⅰa	180	
73	にぶい褐	70		1.4	0.4	6.7	C 1	Ⅲb	181	
74	橙	60		1.4	0.3	5.2	C 1	Ⅲa	182	
75	にぶい橙	100	3.6	1.5	0.4	6.7	C 1	Ⅰa	183	
76	褐灰	100	4.6	1.3	0.3	6.7	C 2	Ⅰc	453	
77	褐灰	100	4.5	1.2	0.3	5.8	C 2	Ⅰa	454	
78	黄橙	70		1.0	0.2	2.3	C 2	Ⅱb	455	
79	黄橙	80		1.0	0.2	1.8	C 2	Ⅱb	456	
80	黄橙	50		1.1	0.2	2.2	C 2	Ⅱb	457	
81	橙	70		0.9	0.3	1.8	C 3	Ⅰc	458	

第350図　第203号住居跡



第203号住居跡（第350図・第351図・第352図）

R－19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らだが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。また大形の川原石が覆土中に多量に混入し、硬く締まっていたため、調査は困難を極めた。

当初は、二基のカマドを設置した一軒の住居跡と考えたが、壁溝の位置から二軒の住居跡の重複と判断した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.55m・短辺4.20m・深さ0.44mであった。北壁の一部と西壁に幅0.32mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－97°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、暗黄褐色土で造り付け、住居跡内に短く延びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の掘り込みがみられた。また燃焼部の左側に径0.42mの小穴を検出した。燃焼部から煙道部へは緩やか

に傾斜しながら移行していた。

遺構の切り合い関係は明瞭に把握できなかったが、第204・205・207号住居跡より古いと判断した。

遺物は、カマド内から土師器の甕（16）が、南壁際から土師器の坏（4）・皿（5・6）、須恵器の坏（9）、土師器の鉢（15）が出土した。

1から3は、土師器の坏AⅣである。4から8は、土師器の皿である。8は底部が欠損している。

9は、須恵器（NS）の椀である。10は、須恵器（NS）の高台付椀である。12から14は、蓋である。13は、須恵器（S）、他は須恵器（NS）である。15は、土師器の鉢である。10・11は底部のみである。14は天井部、15は底部が欠損している。10は朱色の付着物が底部外面に確認できる。

16・17は、土師器の甕である。胴部下位以下が欠損している。

18から21は、灰釉陶器の長頸壷である。22は、灰釉陶器の短頸壷である。23は、須恵器（S）の広口壷である。24は、器形不詳ながら高脚付盤の脚部である。25は、須恵器（S）の鉢である。26は、灰釉陶器の広口壷である。19は口縁部、22は胴部下位、25は胴部下位以下が欠損している。20・23・26は口縁部のみ、21は胴部上位のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第203号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

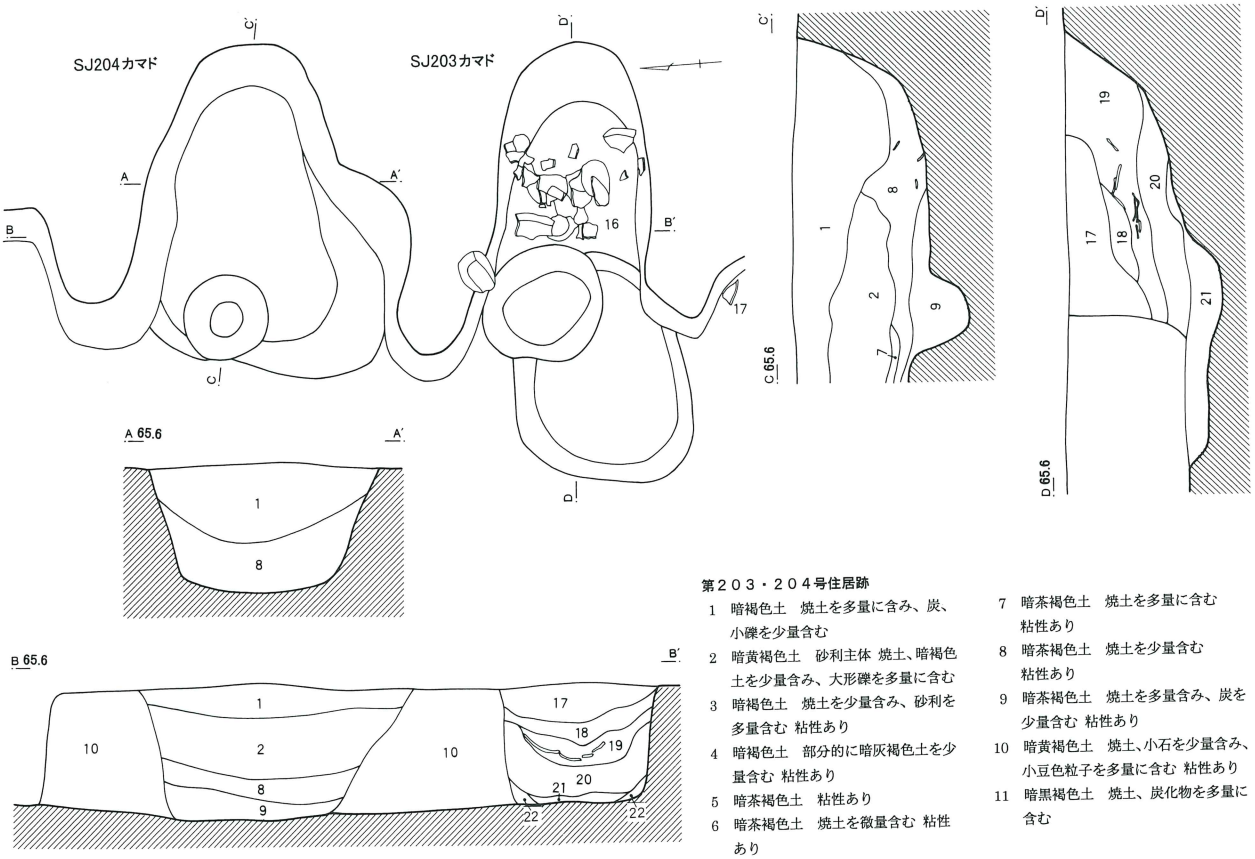
第204号住居跡（第351図・第353図・第354図）

R－19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比

第299表　第203号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅣ	H	11.7	2.9		7.8	B, D, E	普通		黄褐	20	
2	坏AⅣ	H	12.8	3.5		9.4	B, D, E	普通		黄褐	60	
3	坏AⅣ	H	10.7	3.1		7.3	B, D, E, H	普通		黄橙	100	
4	皿	H	12.9	3.0		8.5	B, D, E	普通		淡黄橙	30	
5	皿	H	15.7	2.5		13.6	B, D, E	普通		淡黄橙	70	フク土
6	皿	H	16.1	2.4		10.5	B, C, D, E	普通		淡黄橙	70	
7	皿	H	14.7	2.4		11.9	B, E, H	普通		淡橙	30	カマド
8	皿	H	16.8	2.6		11.4	B, D, E	普通		淡黄橙	40	
9	椀	NS	13.4	4.5		7.0	B, E, I	良好	R	黄灰	70	
10	高台付椀	NS				8.6	B	良好	R	灰白	5	カマド
11	長頸壷	NS				9.0	B, E	良好	R	灰白	20	
12	蓋	NS	16.1	3.1		7.7	B	良好	L	内－灰白。外－灰	40	
13	蓋	S	15.4	3.7		5.5	B	良好	R	灰	50	
14	蓋	NS	12.7			4.9	E	良好	R	灰白	25	
15	鉢	H	19.1			10.1	B, E	良好		橙	80	
16	甕AⅣa	H	21.5				B, E	良好		橙		口縁－60。胴－10。カマド1
17	甕AⅢc	H	20.5				B, E	良好		橙	80	カマド1
18	長頸壷	K	8.2	22.7		8.3	B, D	良好		暗赤灰	70	SJ234。224
19	長頸壷	K				12.2	B	良好		灰白	30	
20	長頸壷	K	8.0				B, H	良好		暗黒灰	10	
21	長頸壷	K					B	良好		内－青灰。外－オリーブ灰	5	
22	短頸壷	K	10.7				B	良好		灰白	20	
23	広口壷	S	13.8				B, D	良好	R	灰	5	
24	器形不明（脚部）	S				10.5	B	良好	R	黄灰	5	
25	鉢	S	23.6				B	良好	R	灰	10	
26	広口壷	K	25.8				B, D	良好		オリーブ灰	5	

第351図　第203・204号住居跡カマド



第２０３・２０４号住居跡

1　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭、小礫を少量含む
2　暗黄褐色土　砂利主体 焼土、暗褐色土を少量含み、大形礫を多量に含む
3　暗褐色土　焼土を少量含み、砂利を多量含む 粘性あり
4　暗褐色土　部分的に暗灰褐色土を少量含む 粘性あり
5　暗茶褐色土　粘性あり
6　暗茶褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
7　暗茶褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
8　暗茶褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
9　暗茶褐色土　焼土を多量含み、炭を少量含む 粘性あり
10　暗黄褐色土　焼土、小石を少量含み、小豆色粒子を多量に含む 粘性あり
11　暗黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
12　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
13　暗茶褐色土　焼土、炭を多量に含む
14　暗褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
15　暗褐色土　焼土を微量含み、砂利を多量含む 粘性あり
16　暗灰褐色土　砂利層
17　暗褐色土　焼土を多量含み、炭、小礫を少量含む 粘性あり
18　暗茶褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
19　暗茶褐色土　焼土主体 粘性あり(天井崩落土)
20　暗茶褐色土　焼土、砂を多量に含み、炭を少量含む
21　暗褐色土　焼土を少量含み、炭を多量に含む
22　暗茶褐色土　焼土を多量に含み、砂利を少量含む

0　1m

較的疎らだったが、住居跡が五軒重複し、確認に非常に手間取った。また大形の川原石が覆土中に多量に混入し、硬く締まっていたため、調査は困難を極めた。

当初は、二基のカマドを付設した一軒の住居跡と認識していたが、第203号住居跡の壁溝を検出したことで二軒の切り合いと判断した。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺5.61ｍ・短辺5.3ｍ・深さ0.45ｍであった。北壁に幅0.35ｍの壁溝を検出した。

五基の小穴を検出した。このうち１号～４号小穴は、住居跡の主柱穴と判断した。また住居跡の南壁の中央に楕円形の土壙を検出した。規模は、長径1.21ｍ・短径0.96ｍ・深さ0.13ｍであった。

主軸方位はＮ－98°－Ｅであった。

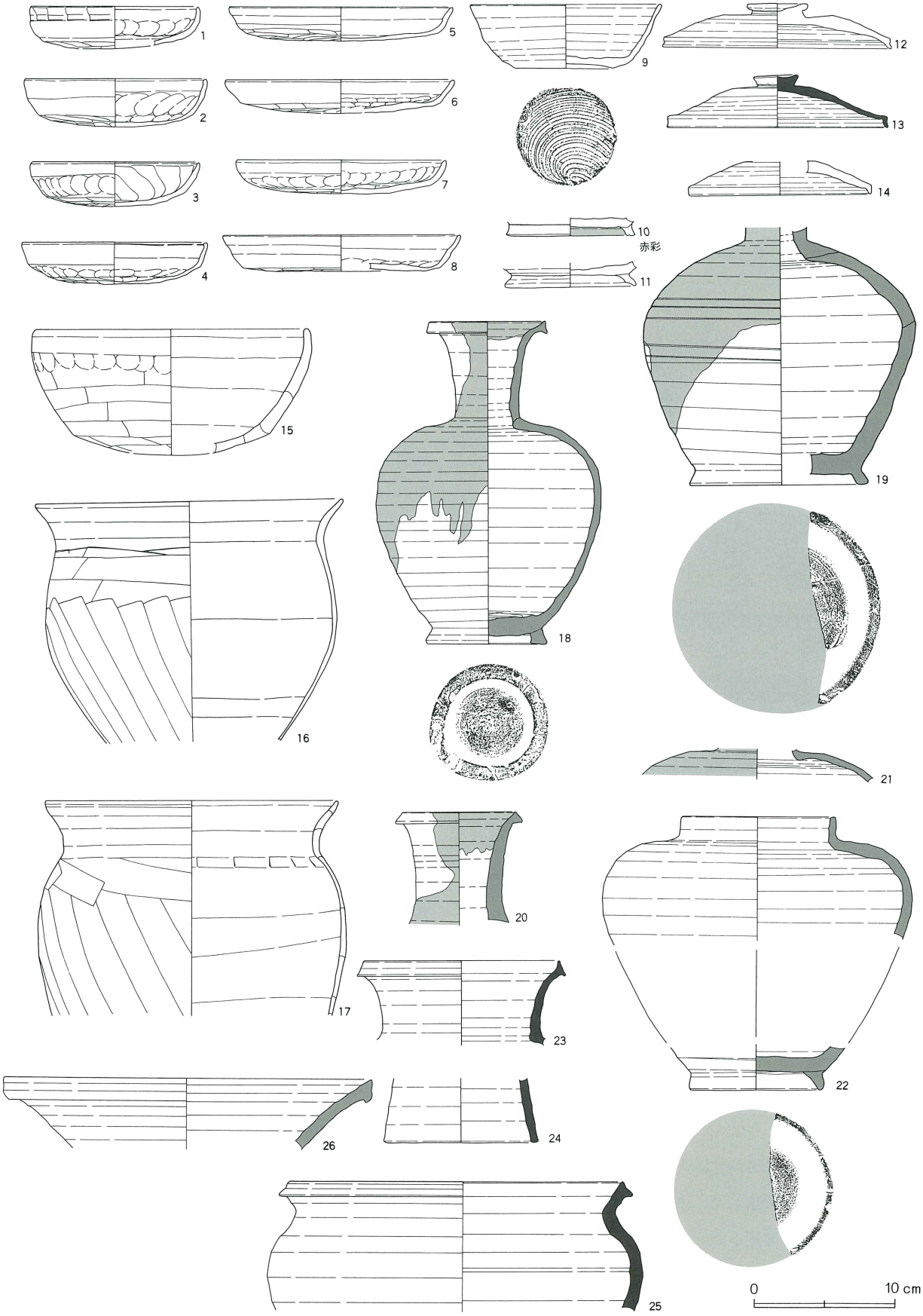
カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、暗黄褐色土で造られ、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、右側がやや張り、底面は浅く窪んでいた。焚き口部には、径0.33ｍ・深さ0.21ｍの小穴がみられ、焼土が多量に出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出した。形状は、円形で規模は、径1.13ｍ・深さ0.16ｍであった。

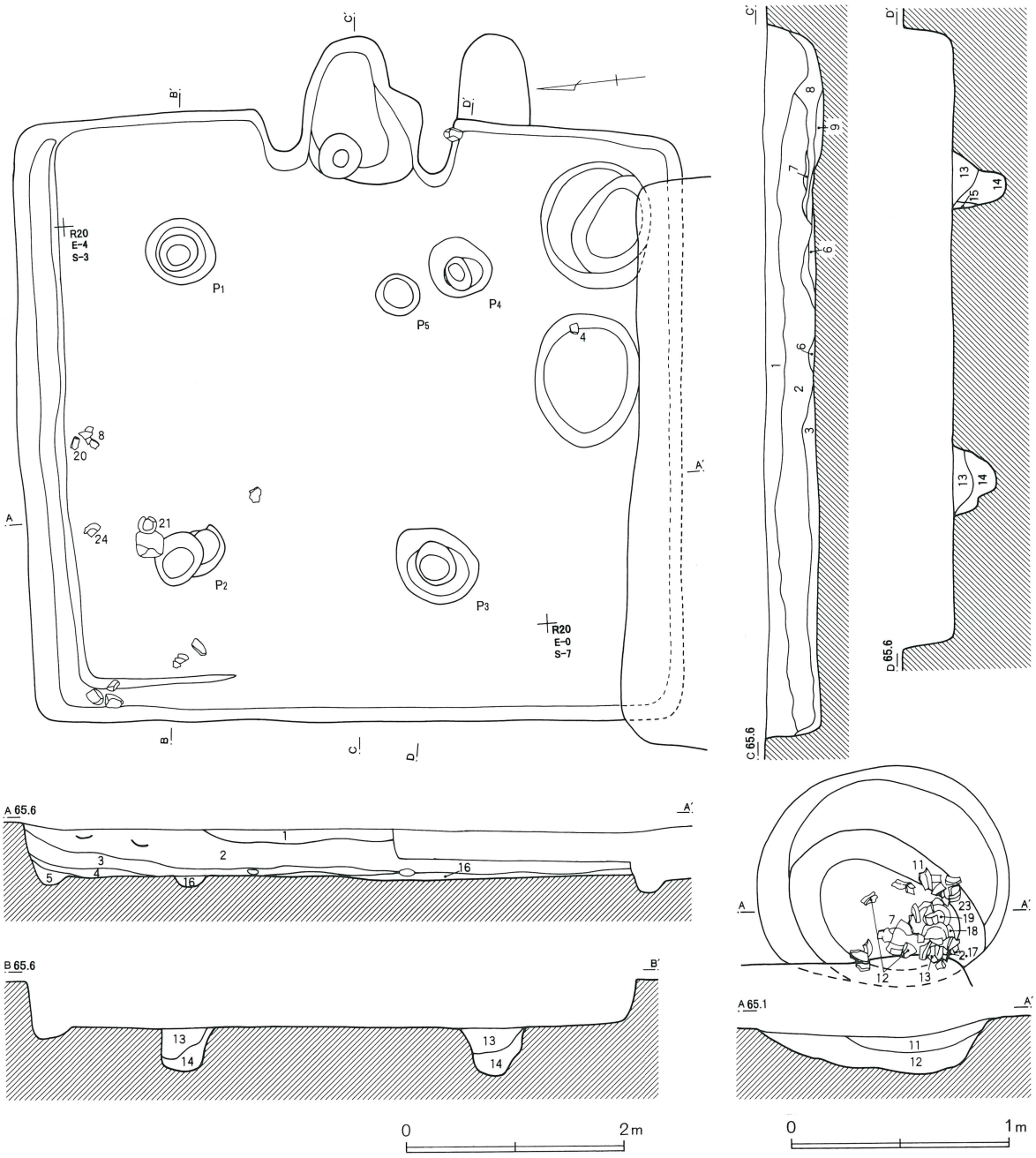
遺構の切り合い関係は、明瞭に把握できなかった。しかし第205・207号住居跡より古く、第203号住居跡より新しいと判断した。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（２・７・11）・皿（13）、須恵器の坏（17・18・19）、土師器の甕（23）がまとまって出土した。また住居跡の北壁中央から土師器の坏（８）、須恵器の蓋（20・21）、灰釉陶器の壷

第352図　第203号住居跡出土遺物



第353図　第204号住居跡



底部（24）が出土した。

1から12は、土師器の坏である。1から9は、坏AⅣである。10・11は、坏AⅡである。12は、暗文土器である。13・14は、土師器の皿である。1・6・9から12・14は底部が欠損している。

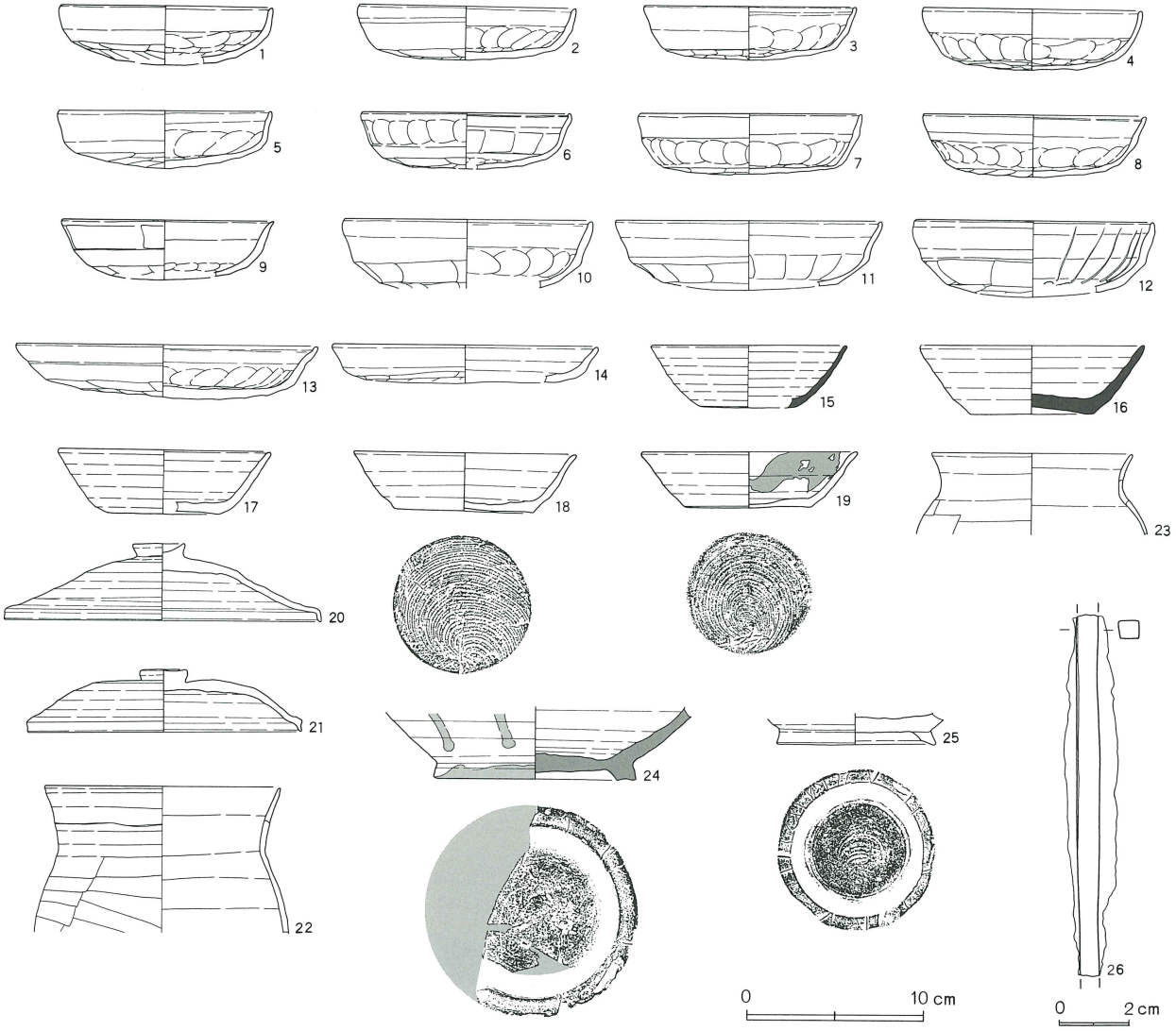
15から19は、椀である。15・16は、須恵器（S）である。他は、須恵器（NS）である。20・21は、蓋である。20は須恵器（HS）、21は須恵器（NS）である。15・17は底部が欠損している。19は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

22・23は、土師器の甕である。24は、灰釉陶器の長頸壺である。25は、須恵器（NS）の長頸壺である。22・23は胴部中位以下が欠損している。24・25は底部のみである。

26は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第204号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第354図　第204号住居跡出土遺物



第205号住居跡（第356図・第357図・第358図）

R・S－19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡が五軒重複していたため、確認に非常に手間取った。

当初は、カマドを二基付設した住居跡と考えたが、土層断面の観察から二軒の重複と判断した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.37m・短辺4.2m・深さ0.50mであった。カマド部分を除き、壁面に幅0.3mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－99°－Eであった。

カマドは、東壁の中央に検出した。左袖は、地山を掘り残した後褐色土で造り付けていた。第206号住居跡のカマド右袖が再利用され、先端に川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は、不整円形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、長さ1.35mと細長く、煙り出し部に向い緩やかに傾斜していた。煙り出し部は、径0.2mの小穴状であった。

遺構の切り合い関係は、第207号住居跡よりも古く、第206号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（3）が出土した。

1から5は、土師器の坏である。3・4は、坏AⅡである。ほかは、坏AⅡである。6・7は、土師器の皿である。4は底部が欠損している。

8は、須恵器（S）の高台付椀である。9は、須恵

第300表　第204号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	H	11.8			8.9	B, D, E, H	普通		暗黄橙	50	貯穴.フク土
2	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.0		7.8	B, D, E	普通		黄褐	100	貯穴
3	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.0		7.0	B, D, E	不良		灰褐	60	
4	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.5		7.3	B, D, E	普通		暗黄橙	90	
5	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.2		7.0	B, E, G	普通		黄橙	80	カマド
6	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.1		7.0	B, E	普通		黄橙	30	
7	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.3		9.6	B, D, E	普通		淡黄橙	70	貯穴
8	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.5		8.3	B, D, E, H	普通		淡黄褐	80	
9	坏 A Ⅳ	H	11.7			6.6	B, D, E	普通		淡橙	50	
10	坏 A Ⅱ	H	13.9			9.8	B, D, E	普通		黄褐	20	カマド
11	坏 A Ⅱ	H	14.9			9.9	B, D, E	普通		黄褐	30	貯穴
12	坏（暗文）	H	13.2			10.0	B, E, G	普通		黄褐	30	貯穴
13	皿	H	16.8	3.0		9.3	B, D, E	普通		淡橙	90	貯穴
14	皿	H	14.8	2.2		10.6	B, E, H	不良		淡黄褐	20	
15	椀	S	10.9	3.5		5.4	B	良好	R	灰	20	
16	椀	S	12.5	3.9		7.0	B	良好	R	灰白	25	
17	椀	NS	11.7	3.5		6.3	B, E, I	良好	R	灰白	40	貯穴
18	椀	NS	12.3	3.2		7.8	B, D	良好	R	灰白	95	貯穴
19	椀	NS	12.0	3.1		7.1	B, E, G	普通	R	灰	100	貯穴
20	蓋	HS	17.7	4.3		3.9	B, E, I	良好	R	橙	80	
21	蓋	NS	15.3	3.5		5.2	B, C, E, I	良好	R	灰白	90	
22	甕 A Ⅲ e	H	13.1				B, D	良好		浅黄橙	20	
23	台付甕	H	11.2				B, E, H	良好		橙	60	貯穴
24	長頸壺	K				11.1	B, D	良好		オリーブ灰	60	
25	長頸壺	NS				8.7	B, G	良好	R	灰白	20	

器（NS）の蓋である。8は口縁部、9は天井部が欠損している。

10は、土師器の甕である。胴部中位以上と脚部が欠損している。

11は、須恵器（S）の甕である。口縁部のみである。

12は、土錘である。

13・14は、凝灰岩の切石である。

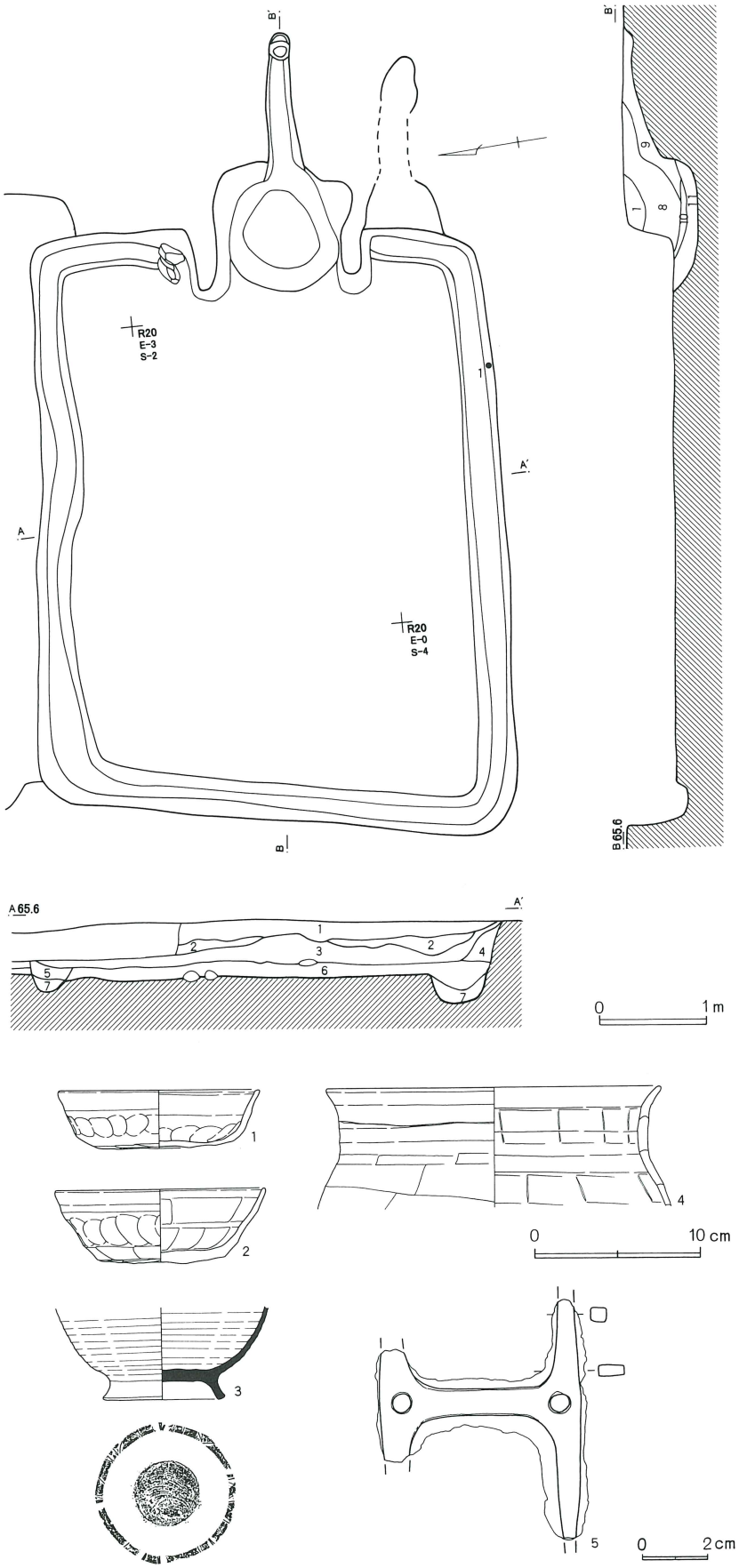
15・16は、鉄製品である。15は板状鉄製品、16は火打鎌である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第205号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第301表　第205号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.6		7.8	B, D, E	良好		黄褐	50	貯穴
2	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.5		8.4	B, D, E, H	普通		暗黄橙	70	貯穴
3	坏 A Ⅱ	H	13.7	3.6		10.9	B, D, E, H	普通		黄褐	50	カマド1
4	坏 A Ⅳ	H	13.9	4.2		8.8	B, E, H	普通		黄橙	20	
5	坏 A Ⅱ	H	14.1	4.6		8.7	B, E	普通		橙	70	貯穴
6	皿	H	15.6	2.9		12.2	B, D, E	普通		黄褐	100	貯穴
7	皿	H	14.6	2.5		11.2	B, E, H	普通		黄褐	20	
8	高台付椀	S				7.9	B	良好	R	褐灰	20	
9	蓋	NS	17.0	2.7		3.8	B, D	良好	R	灰白	25	
10	台付甕	H					B, C, H	良好		橙		胴下位－25。他－80
11	大甕	S	19.0				B	良好	R	灰	5	貯穴

第355図　第206号住居跡・出土遺物



第206号住居跡（第355図・第356図）

R・S－19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。当初は、二基のカマドを付設した一軒の住居跡と考え調査を始めたが、断面観察から重複した二軒の住居跡と判断した。

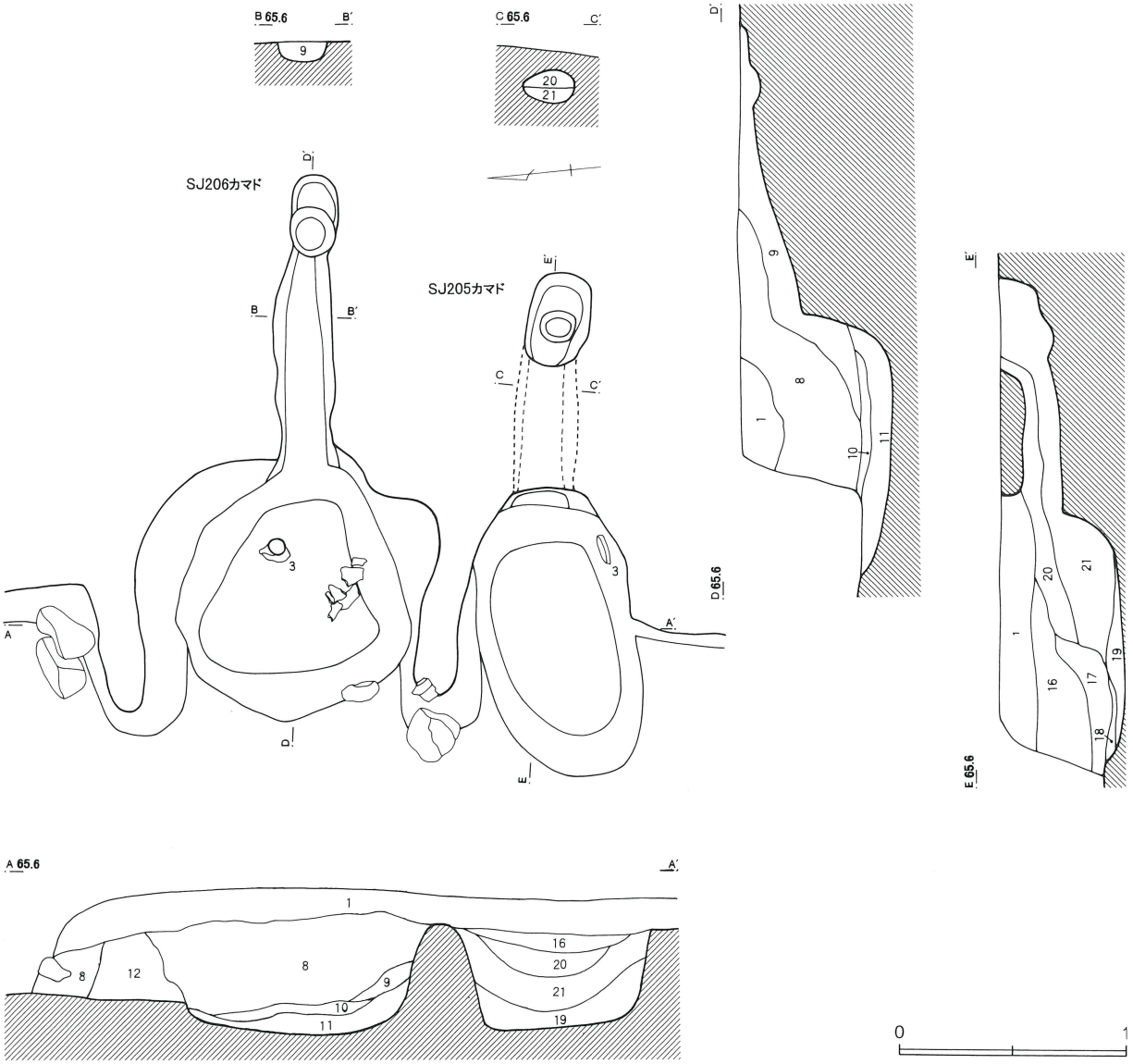
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.30ｍ・短辺3.91ｍ・深さ0.53ｍであった。住居跡の北西隅から南壁にかけては、幅0.35ｍの壁溝を検出した。また、南壁の中央で長径1.27ｍ・短径0.5ｍ・深さ0.28ｍの楕円形の土壙を検出し、多量の炭化物を出土した。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。地山を掘り残して左袖を造り、住居跡内に短く伸びていた。右袖は、第205号住居跡のカマドの構築時に破壊したのか、検出できなかった。

焚き口部から燃焼部にかけ楕円形の掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られていた。長さ1.15ｍ

第356図　第205・206号住居跡カマド



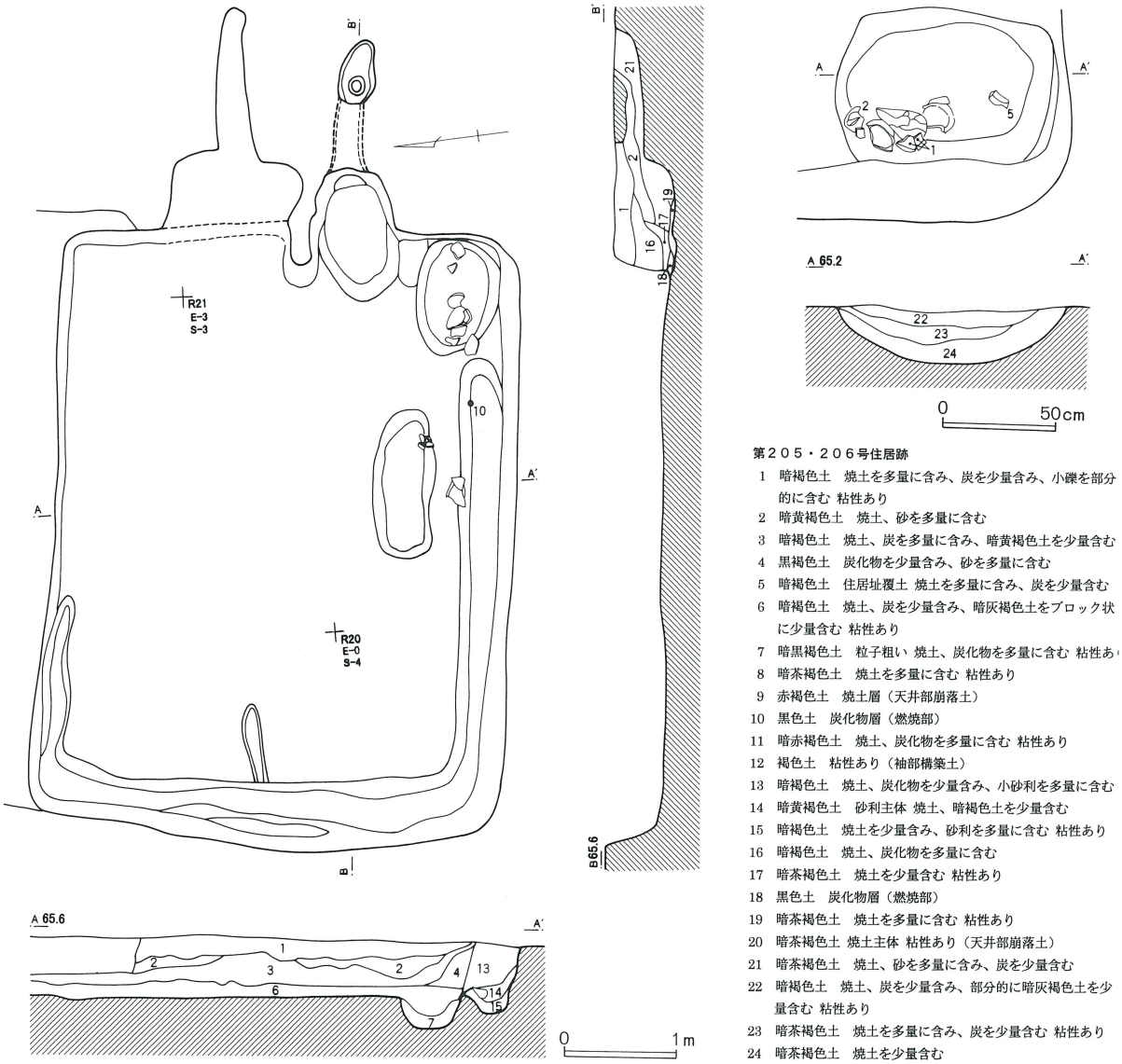
第302表　第206号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.5		7.0	B, D, E	普　通		淡　橙	80	
2	坏 A Ⅱ	H	12.4	4.4		7.6	D, E	普　通		淡 黄 橙	80	
3	高台付椀	S				6.7	B, D	良　好	R	褐　灰	70	カマド
4	甕 B Ⅲ b	H	19.8				B, C, E	良　好		橙	20	カマド

第303表　第206号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	橙	90	3.8	1.0	2.0	5.0	C 2	Ⅰ b	459	

第357図　第205号住居跡



第２０５・２０６号住居跡

1　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含み、小礫を部分的に含む 粘性あり
2　暗黄褐色土　焼土、砂を多量に含む
3　暗褐色土　焼土、炭を多量に含み、暗黄褐色土を少量含む
4　黒褐色土　炭化物を少量含み、砂を多量に含む
5　暗褐色土　住居址覆土 焼土を多量に含み、炭を少量含む
6　暗褐色土　焼土、炭を少量含み、暗灰褐色土をブロック状に少量含む 粘性あり
7　暗黒褐色土　粒子粗い 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あ
8　暗茶褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
9　赤褐色土　焼土層（天井部崩落土）
10　黒色土　炭化物層（燃焼部）
11　暗赤褐色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
12　褐色土　粘性あり（袖部構築土）
13　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含み、小砂利を多量に含む
14　暗黄褐色土　砂利主体 焼土、暗褐色土を少量含む
15　暗褐色土　焼土を少量含み、砂利を多量に含む 粘性あり
16　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
17　暗茶褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
18　黒色土　炭化物層（燃焼部）
19　暗茶褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
20　暗茶褐色土 焼土主体 粘性あり（天井部崩落土）
21　暗茶褐色土　焼土、砂を多量に含み、炭を少量含む
22　暗褐色土　焼土、炭を少量含み、部分的に暗灰褐色土を少量含む 粘性あり
23　暗茶褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む 粘性あり
24　暗茶褐色土　焼土を少量含む

と細長く、底面は、煙り出し部に向かい緩やかに傾斜していた。煙り出し部は、長径0.39ｍの楕円形の小穴で底面が、煙道部よりやや深く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は、第205・207号住居跡より古く、第203・204号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（３）が出土し、住居跡の南壁から土師器の台付甕（10）が出土した。

１・２は、土師器の坏である。１は坏AⅣ、２は坏AⅡである。

３は、須恵器（S）の高台付椀である。口縁部が欠損している。

４は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

５は、不明鉄製品である。

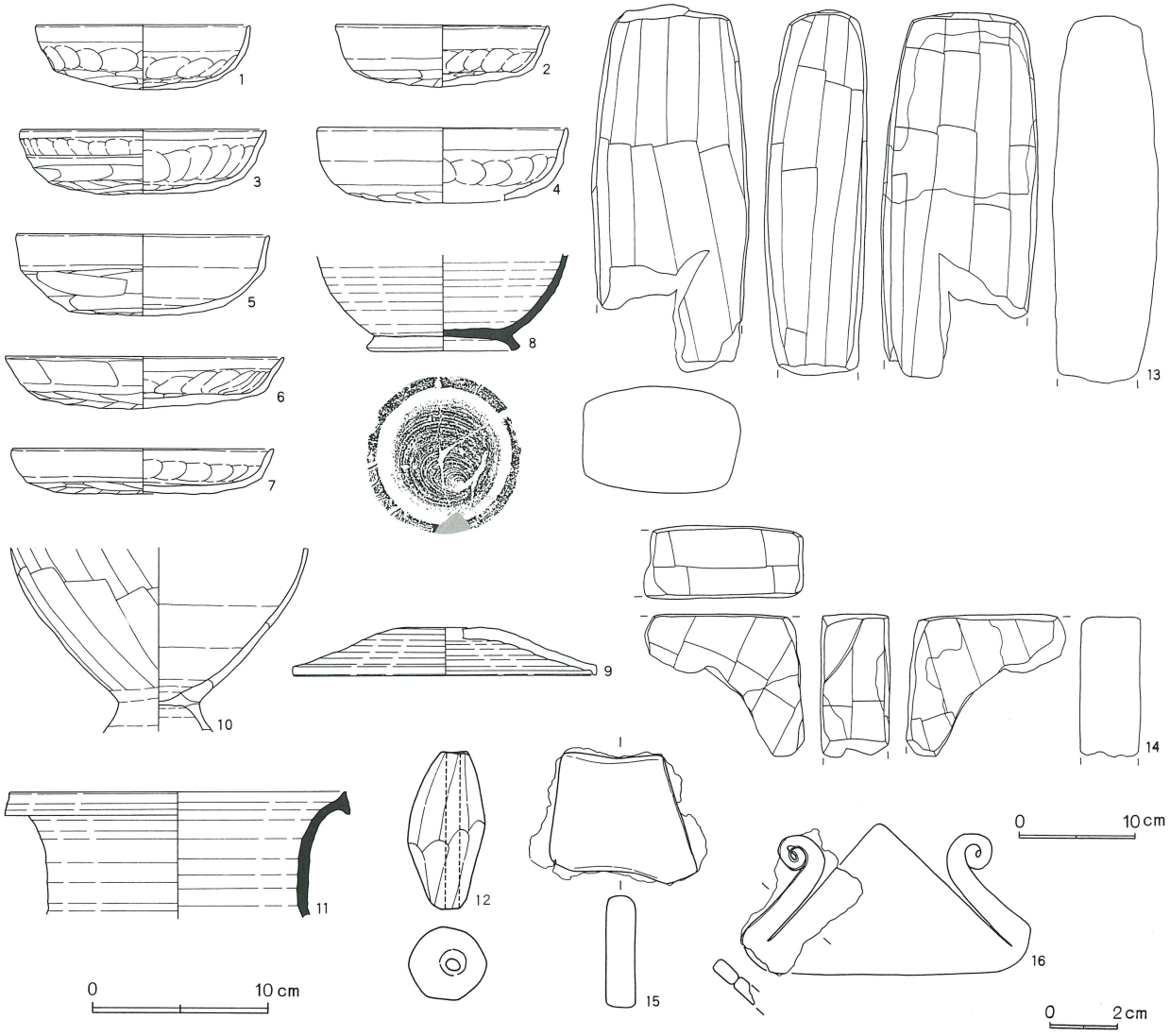
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第206号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第207号住居跡（第359図）

R－19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.62

第358図　第205号住居跡出土遺物



m・短辺3.18m・深さ0.26mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、暗褐色土で造り付け、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、半円形で底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは小さな段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.95mと細長く、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第203・204・205・206号住居跡より新しかった。

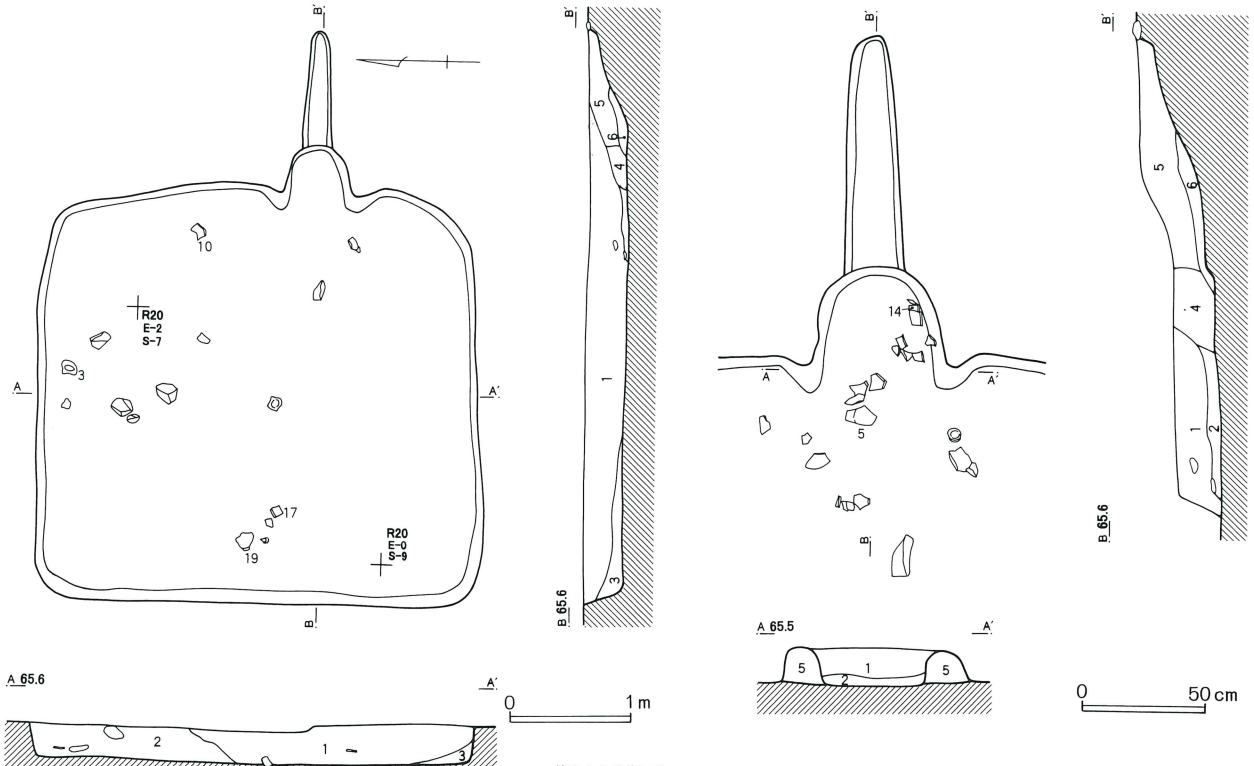
遺物は、カマド内から須恵器の坏（5）・蓋（14）が出土し、住居跡の北壁の中央から土師器の坏（3）、西壁の中央から土師器の甕（17）、須恵器の大甕（19）が出土した。

1から3は、土師器の坏である。1は坏AⅡ、3は坏AⅣである。1・2は底部が欠損している。

4から6は、椀である。4は須恵器（S）、他は須恵器（HS）である。7は、高台付皿である。13・14は、須恵器（NS）の蓋である。4は口縁部、7は高台、14は天井部が欠損している。13は紐のみである。

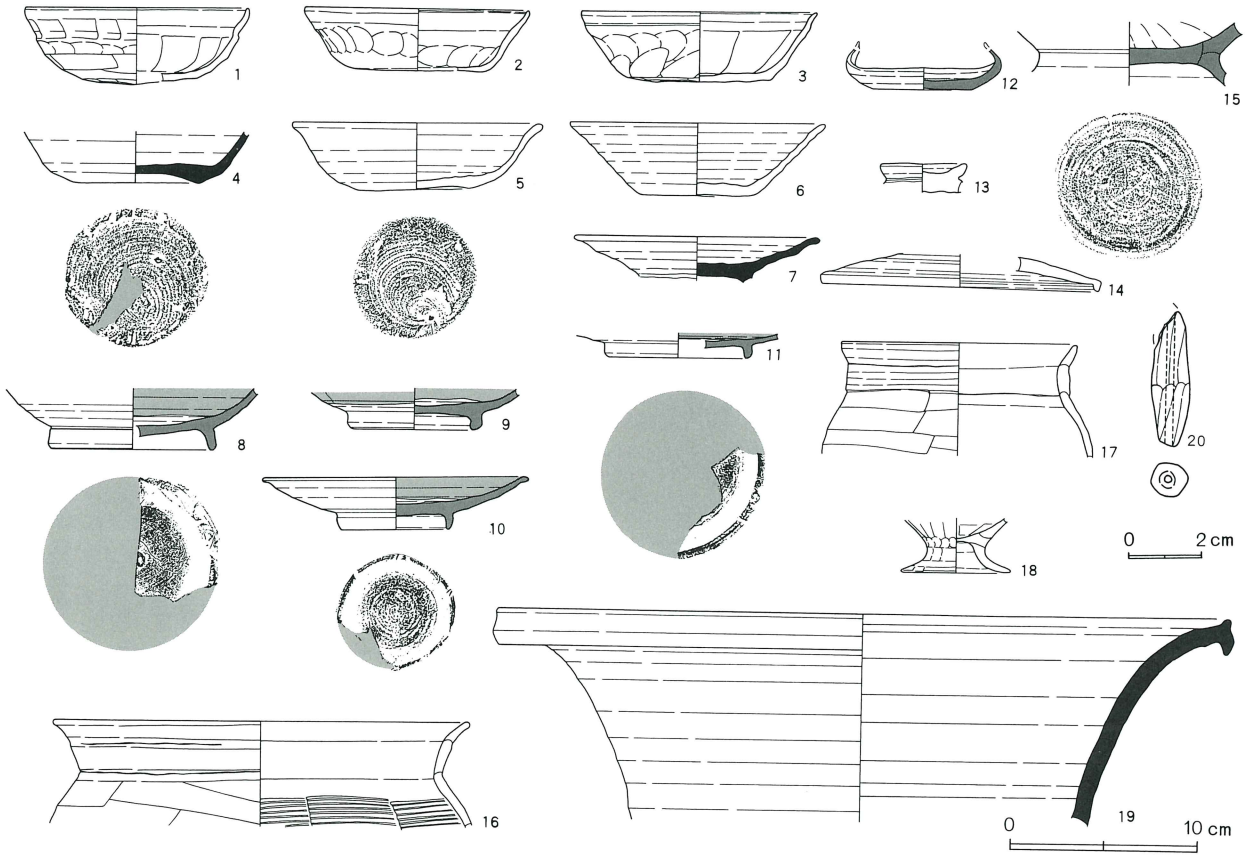
8・9は、灰釉陶器の高台付椀である。10・11は、灰釉陶器の高台付皿である。12は、灰釉陶器の耳皿である。8は口縁部、12は耳が欠損している。9・11は底部のみである。

第359図　第207号住居跡・出土遺物



第２０７号住居跡

1　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む
2　黒褐色土　焼土を少量含み、炭を微量含む
3　褐色土　焼土、炭を少量含む
4　黒色土　炭化物主体 焼土、暗褐色土を少量含む
5　暗褐色土　焼土を微量含み、炭化物を少量含む
6　暗黄褐色土　焼土ブロックを多量に含む



第304表　第207号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅱ	H	11.8	4.0		6.0	B, D, E, H	普通		黄褐	30	
2	坏 A	H	11.9	3.2		6.8	B, E, H	普通		暗茶褐	30	
3	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.7		7.5	B, E, G, H	普通		暗橙	70	
4	椀	S				6.6	B	良好	R	灰	10	
5	椀	HS	13.1	3.5		6.0	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄橙	40	カマド
6	椀	HS	13.4	3.8		6.0	B, E, G	良好	R	にぶい黄橙	30	カマド。フク土
7	高台付Ⅲ	S	12.7				B	良好	R	灰	60	
8	高台付椀	K				8.5	B, D	良好		灰白	20	
9	高台付椀	K				6.3	D	良好	R	灰白	100	
10	高台付Ⅲ	K	13.7	2.8		5.6	B, D	良好	R	灰白		底－90。他－20
11	高台付Ⅲ	K				7.5	B, D	良好	R	灰白	10	
12	耳Ⅲ	K				5.2	D	良好		灰白	30	
13	蓋	NS	4.2				B, E	良好	R	灰白	50	
14	蓋	NS	14.7				B, G	良好	R	灰白	5	カマド
15	長頸壺	K					B, D	良好		灰白	80	
16	甕 B Ⅲ c	H	21.9				C, E, H	普通		浅黄橙	20	カマド
17	台付甕	H	12.3				B, G, E	普通		浅黄橙	30	
18	台付甕	H	5.5				B, E	良好		橙	20	
19	大甕	S	38.8				B, G	良好		青灰	10	

第305表　第207号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	にぶい橙	80		1.0	0.2	2.3	C 2	Ⅰb	459	

15は、灰釉陶器の長頸壺である。底部のみである。

16から18は、土師器の甕である。16・17は胴部中位以下が欠損している。

19は、須恵器の大甕である。口縁部のみである。

20は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第207号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第306表　第208号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.9		5.4	B, C, E	不良		橙	90	カマド
2	坏 A Ⅵ	H	11.6	3.6		6.6	B, E, G	不良		こげ茶	80	
3	高台付椀	NS	14.3	5.1		5.3	B, I	普通	R	灰白	50	
4	高台付椀	HS	16.1				B, C, E, I	良好	R	灰黄	60	カマド
5	甕 B Ⅲ c	H	20.6				B, C, H	良好		橙	25	
6	台付甕	H	11.9				B, C, E, H	良好		にぶい橙	20	

第307表　第208号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	橙	90		1.1	0.2	2.6	C 2	Ⅰb	460	

第208号住居跡（第360図）

ほぼ同規模の第208号住居跡と並ぶように、S－18グリッドから確認された。周辺は、土壙・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.96ｍ・短辺2.13ｍ・深さ0.20ｍと小形であった。住居跡の北西隅に三基の小穴を検出した。径0.3ｍ～0.5ｍ、深さ0.06ｍ～0.15ｍと住居跡の規模に比べ、大形の小穴であった。

主軸方位は、N－100°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜していたが、掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは、緩やかに立ち上がって移行していた。

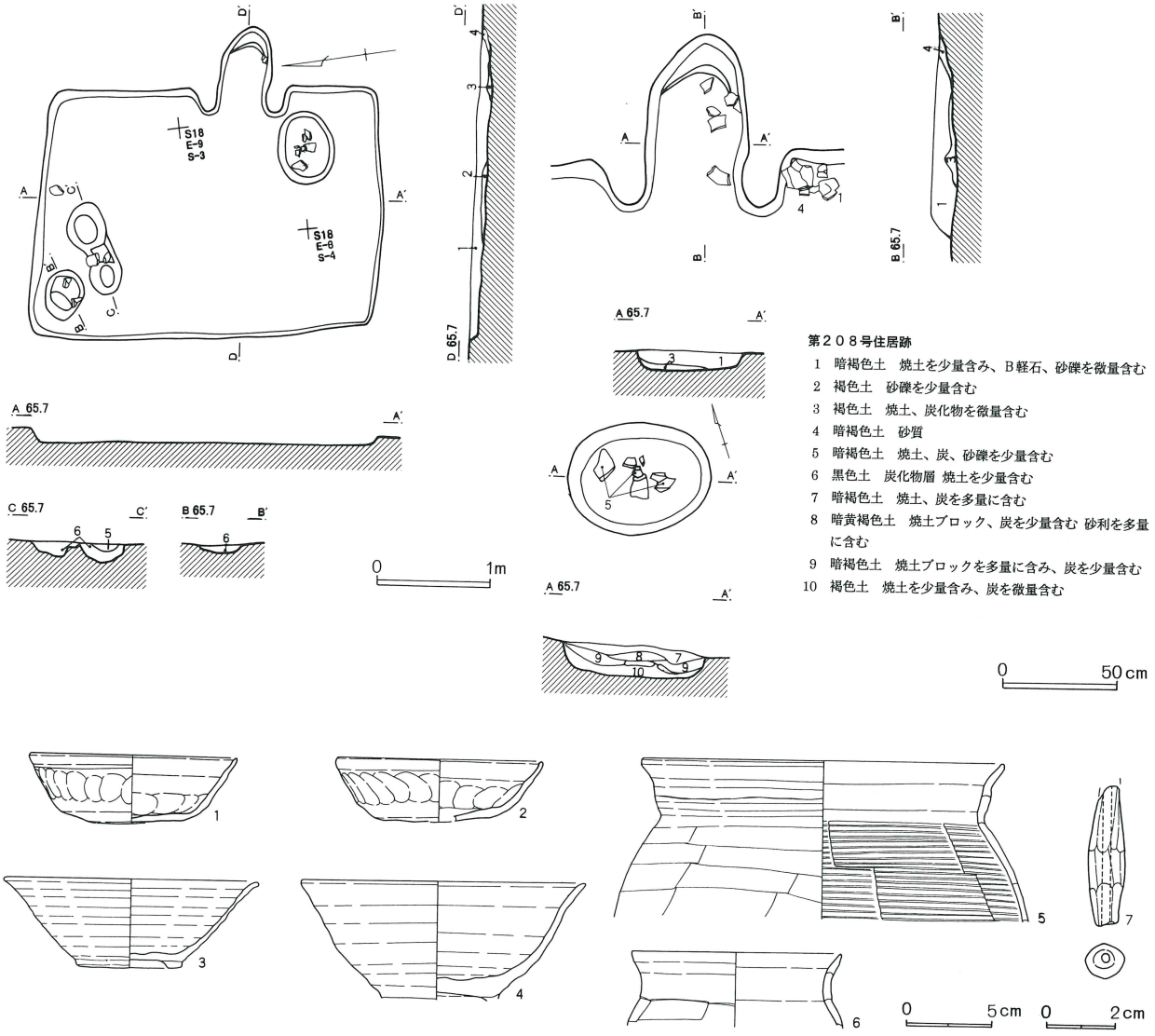
貯蔵穴は、カマドの右脇に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.61ｍ・短径0.48ｍ・深さ0.13ｍであった。覆土の上面に多量の炭化物が出土した。

遺構の切り合い関係は、第518号土壙より新しかった。

遺物は、カマド右脇から土師器の坏（1）、須恵器の高台付椀（4）が出土し、貯蔵穴内から土師器の甕（5）が出土した。

1・2は、土師器の坏AⅥである。2は底部が欠損

第360図　第208号住居跡・出土遺物



している。

3・4は、高台付椀である。3は須恵器（NS）、4は須恵器（NS）である。4は高台が欠損している。

5・6は、土師器の甕である。5は胴部中位以下、6は胴部上位以下が欠損している。

7は、土錘である。

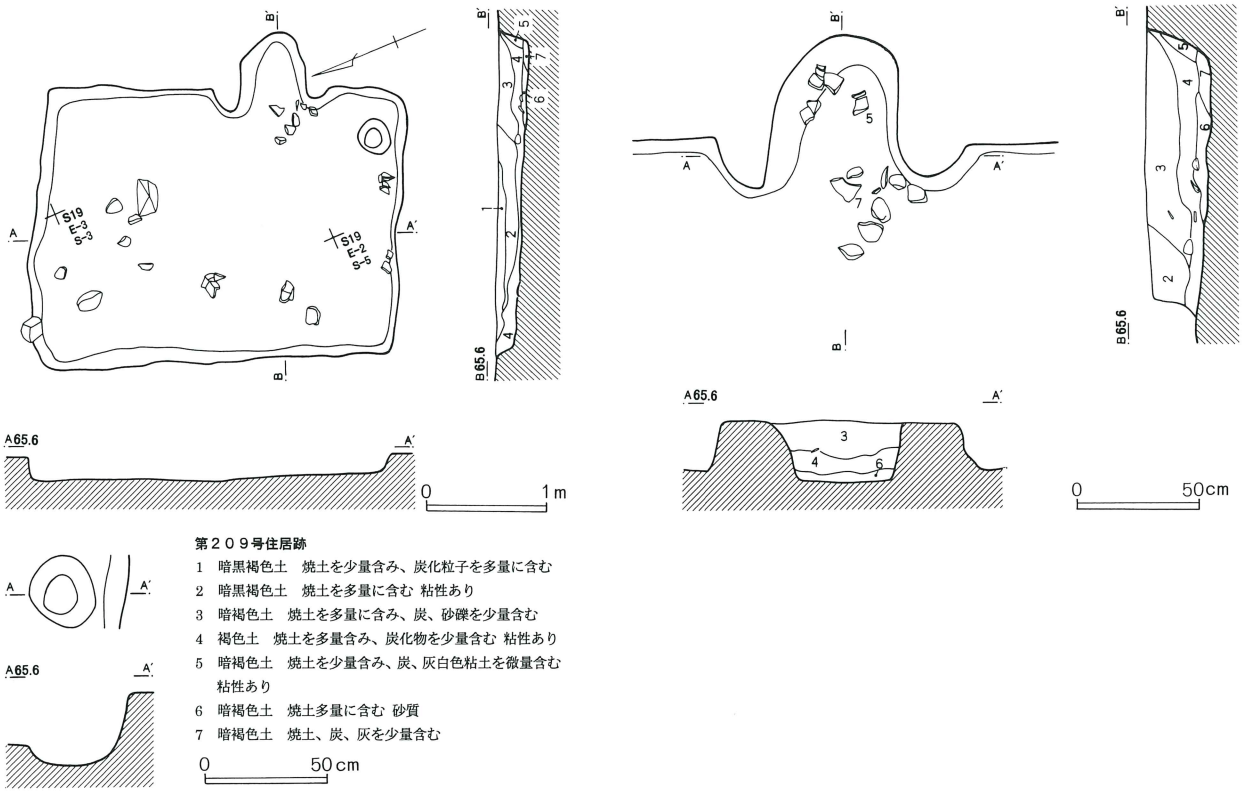
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第208号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

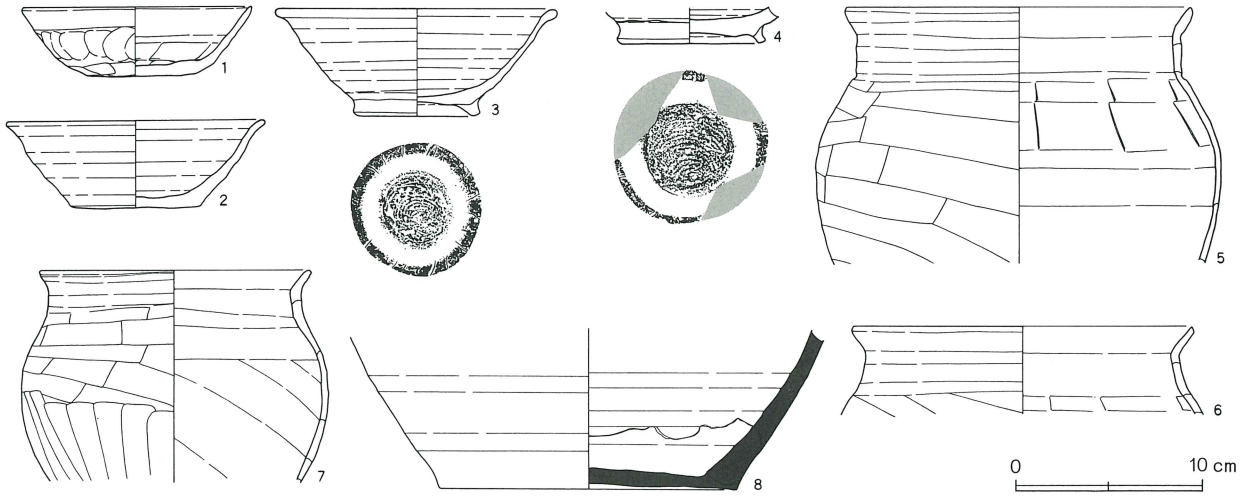
第209号住居跡（第361図）

ほぼ同規模の第208号住居跡と並ぶように、S－19グリッドで確認された。周辺は、土壙・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺

第361図　第209号住居跡・出土遺物





2.40m・短辺2.15m・深さ0.27mと小形であった。

主軸方位は、N－10°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。燃焼部の底面に小さな凹凸がみられたが、掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出した。形状は、円形で規模は、径0.26m・深さ0.08mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（5・7）が出土した。

1は、土師器の坏AⅢである。

2は、須恵器（HS）の椀である。3・4は、須恵器（NS）の高台付椀である。4は底部のみである。

5から7は、土師器の甕である。8は、須恵器（S）の壷である。5・7は胴部下位以下、6は胴部上位以下が欠損している。8は底部のみである。

以上、出土遺物から第209号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第210号住居跡（第362図）

S－19・20グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであった。

住居跡の上部は削平されていたため、床面に近い部分のみを検出した。

住居跡の形状は、北東隅がやや張る不整方形であった。規模は、長辺3.43m・短辺2.97m・深さ0.06mであった。東壁と西壁の一部には、幅0.2mの壁溝を検出した。また住居跡の北半分の床面に五基の小穴を検出した。規模は、径0.1m～0.18m、深さ0.06m～0.12mであった。

主軸方位は、N－115°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。残存状況が悪く、不明な点が多かった。袖は、検出できなかった。焚き口部から煙道部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。

貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.38m・深さ0.08mと小形であった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

第308表　第209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅢ	H	12.0	3.7		5.8	B, D, E	良好		橙	70	砂
2	椀	HS	13.3	4.7		6.6	B, I	普通	R	灰白	30	
3	高台付椀	NS	14.6	5.7		6.0	B, D, I	良好	R	灰白	95	
4	高台付椀	NS				7.1	B	良好	R	灰白	20	
5	甕BⅡb	H	18.3				B, E	良好		浅黄橙		口－90。他－70
6	甕BⅡa	H	18.0				B, E	良好		黄橙	15	
7	甕BⅡa	H	14.3				B, C, D, E	良好		外－にぶい黄橙。内－黄橙	40	カマド
8	壷底部	S				15.8	B, G	良好		青灰	90	

第309表　第210号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	S				7.5	B	良好	R	灰白	20	
2	椀	NS				8.0	B	良好	R	灰白	10	
3	高台付椀	S	16.6				B, D, G	良好	R	黄灰	10	
4	高台付椀	K	15.0				D	良好			30	
5	甕B	H	19.9				D, E	良好		浅黄橙	20	
6	台付甕	H	13.9				B, C, E	良好		浅黄橙	20	
7	台付甕	H				7.8	B, E, H	良好		浅黄橙	40	カマド
8	台付甕	H				11.4	B, D, E	良好		暗灰褐	100	

遺物は、カマド内から土師器の台付甕（7）が出土し、貯蔵穴内から土師器の甕（6）、土師器の台付甕（8）が出土した。

1は須恵器（S）、2は須恵器（NS）のそれぞれ椀である。3は、須恵器（S）の高台付椀である。1・2は底部のみである。3は底部が欠損している。

4は、灰釉陶器の高台付椀である。底部が欠損している。

以上、出土遺物から第210号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第211号住居跡（第363図）

T－19・20グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面だったため、確認作業は困難であった。

住居跡の上部は、削平され、床面に近い部分のみを検出した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.63m・短辺2.58m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

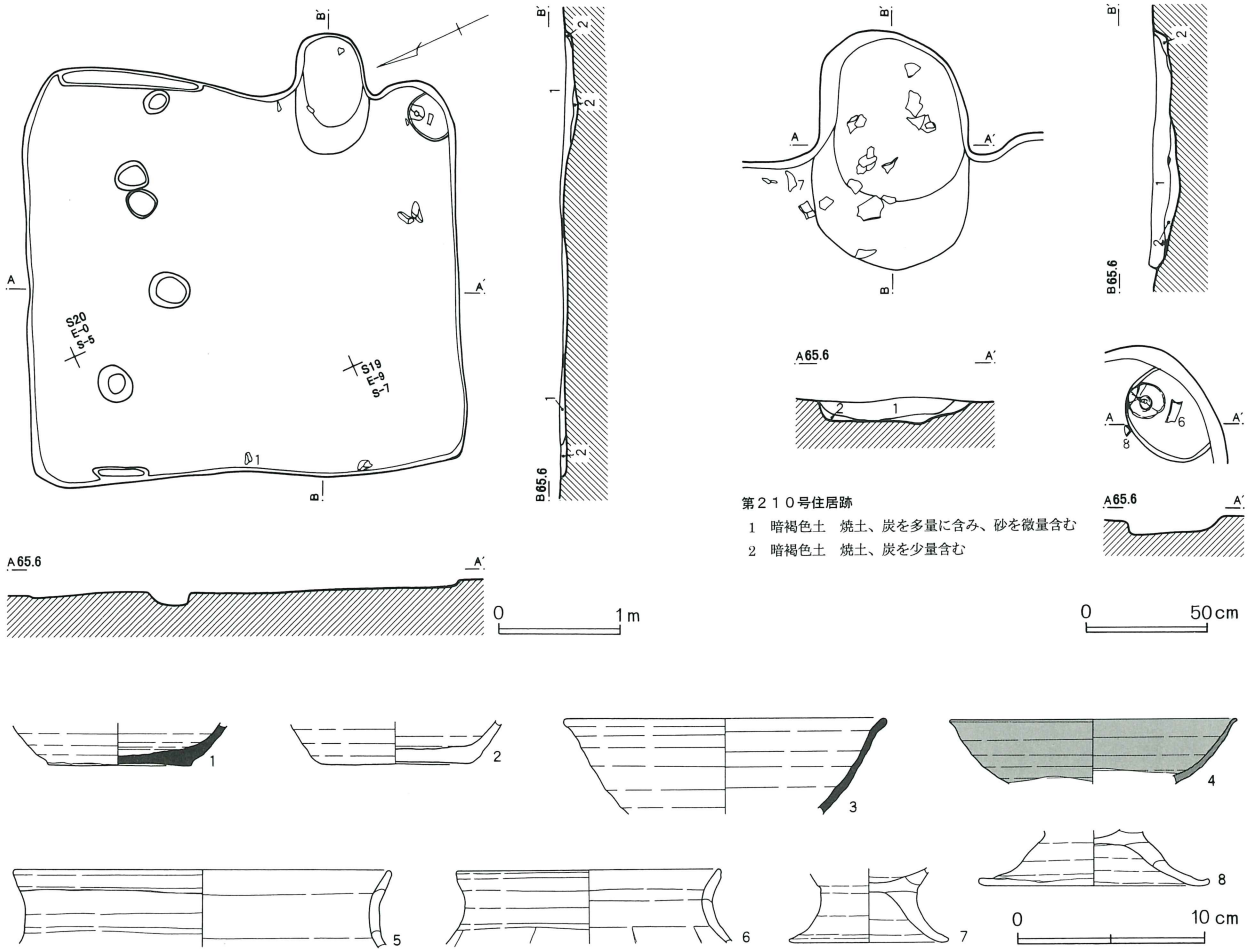
カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと判断した。燃焼部の底面は、円形に掘り込まれていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

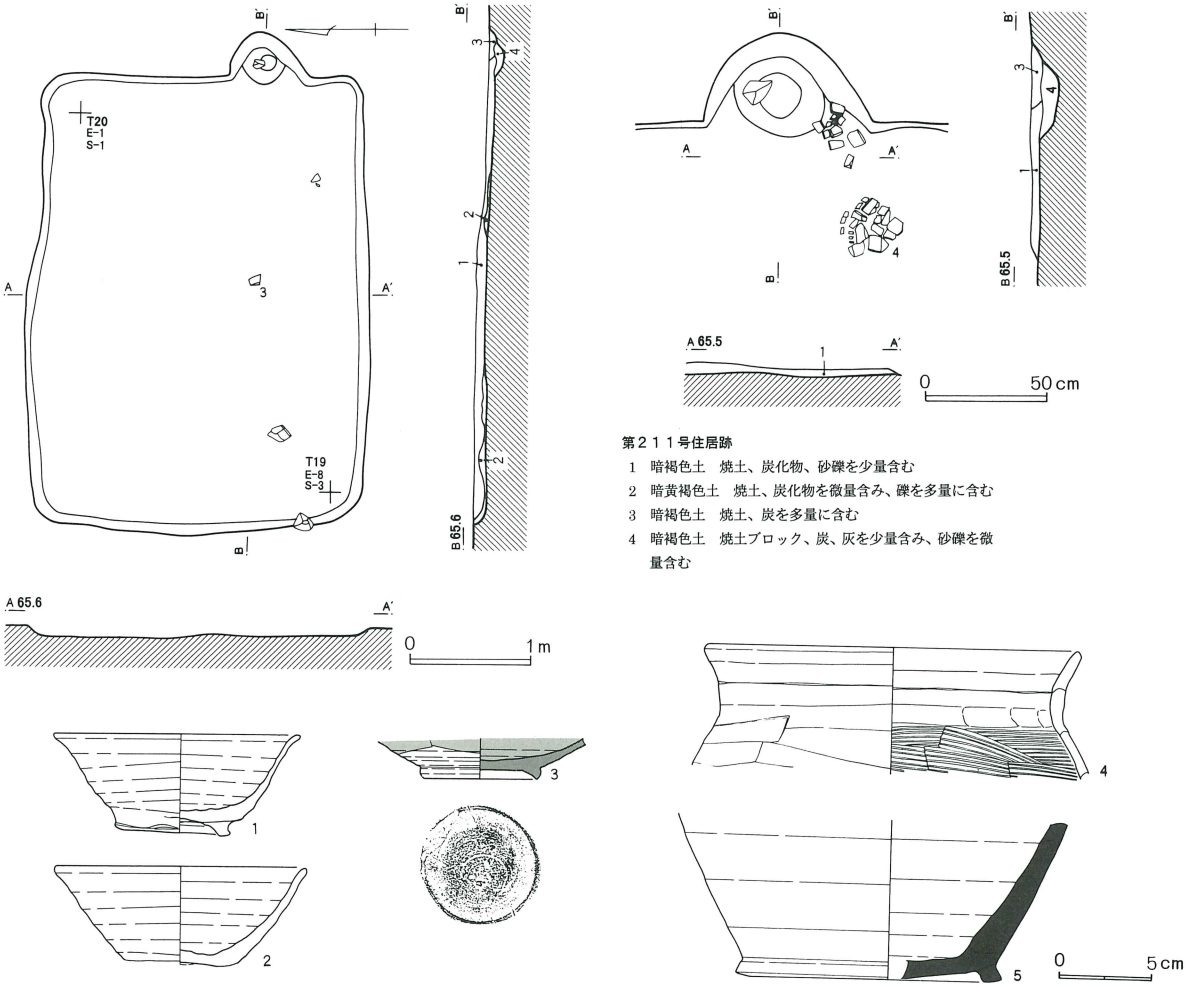
遺物は、カマド前面から土師器の甕（4）が、住居跡の中央やや南寄りから灰釉陶器の高台付椀（3）が出土した。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀である。

第362図　第210号住居跡・出土遺物



第363図　第211号住居跡・出土遺物



第２１１号住居跡
1　暗褐色土　焼土、炭化物、砂礫を少量含む
2　暗黄褐色土　焼土、炭化物を微量含み、礫を多量に含む
3　暗褐色土　焼土、炭を多量に含む
4　暗褐色土　焼土ブロック、炭、灰を少量含み、砂礫を微量含む

3は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

4は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

5は、須恵器（S）の長頸壷である。底部のみである。

以上、出土遺物から第211号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第212号住居跡（第364図）

T・U－20グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであるが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

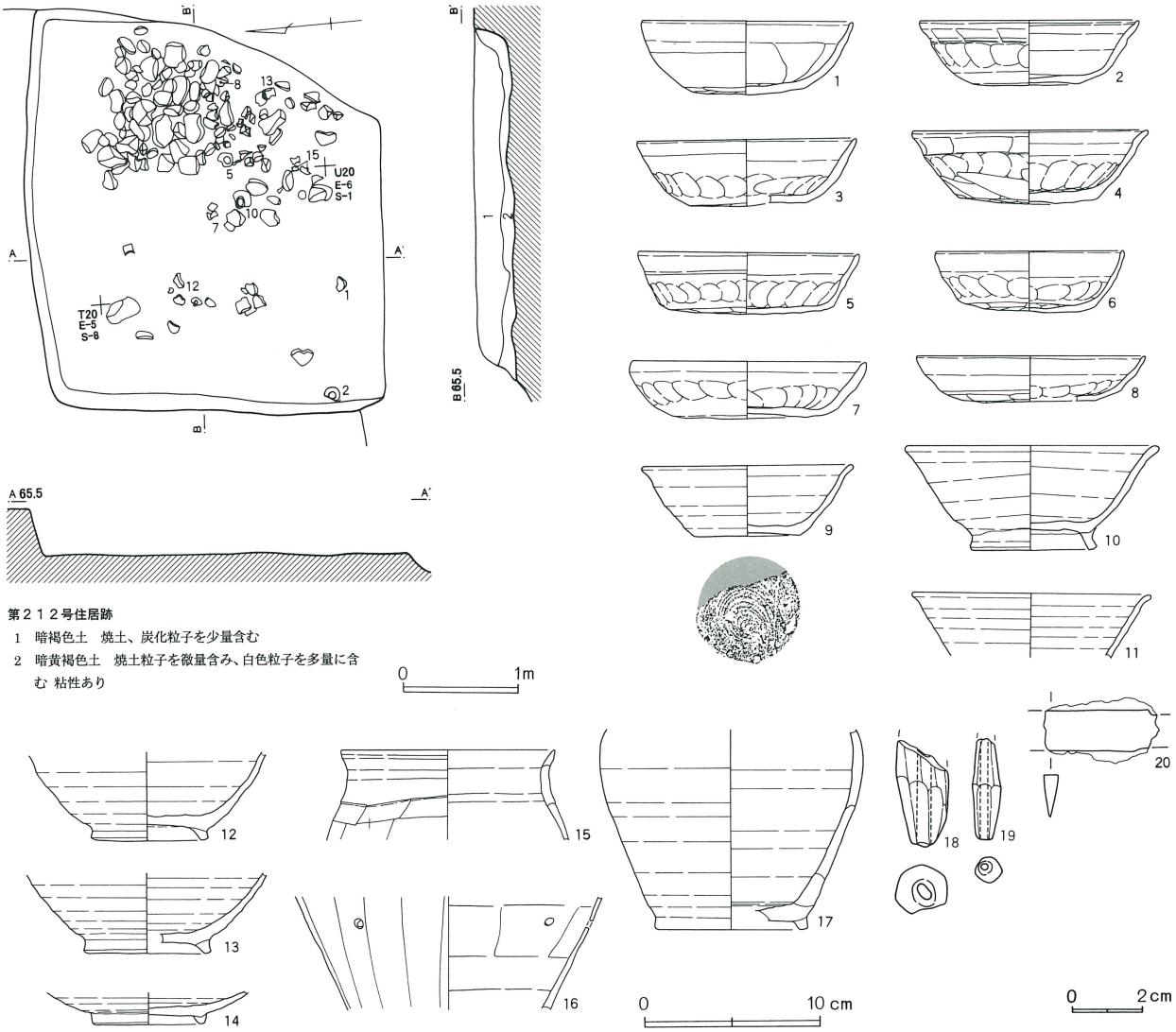
住居跡の東側と南側は調査区外のため、住居跡の形状など不明な点が多かった。残存した北壁の長さは3.30m、西壁は2.81m、深さ0.32mであった。

主軸方位は、N－93°－Eと推定した。

第310表　第211号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	12.8	5.2		5.2	B, E, I	良好	R	褐灰	80	
2	高台付椀	NS	13.2				B, E, I	普通	R	黄灰	75	
3	高台付椀	K				5.9	D	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	100	
4	甕 A Ⅲ b	H	19.6				B, D, E, K	良好		灰黄橙	20	
5	長頸壷	S				12.3	B	良好		青灰	15	カマド

第364図　第212号住居跡・出土遺物



第２１２号住居跡
1　暗褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む
2　暗黄褐色土　焼土粒子を微量含み、白色粒子を多量に含む 粘性あり

第311表　第212号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.8	4.2		6.3	B, C, E	不良		淡橙	70	
2	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.6		5.9	B, D, E	普通		暗黄褐	80	
3	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.7		6.7	B, E, H	普通		黄褐	30	
4	坏 A Ⅳ	H	13.1	4.1		7.7	B, D, E	普通		淡橙	50	砂
5	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.5		8.5	B, D, E	普通		暗黄橙	100	
6	坏 A Ⅳ	H	10.4	3.3		5.3	B, D, E	普通		暗褐	30	
7	皿	H	13.1	3.2		8.3	B, E	普通		黄褐	60	
8	皿	H	12.7	2.6		7.5	B, D, E	普通		淡黄橙	20	
9	椀	NS	12.7	4.0		6.0	B, E	普通	R	灰白	40	
10	高台付椀	NS	13.4	5.9		6.6	B, E, I	良好	R	灰黄	90	
11	高台付椀	NS	13.2				B	良好	R	黄灰	10	
12	高台付椀	NS				5.8	B, E	良好	R	灰白	50	
13	高台付椀	NS				6.8	B, E, G	良好	R	灰白	30	
14	高台付皿	NS				6.0	B, I	良好	R	灰白	50	
15	台付甕	H	11.9				B, E, H	良好		にぶい橙	20	
16	甕胴部	H					B, E, H	良好		橙	15	
17	長頸壺	HS				8.0	A, B	普通		にぶい橙		底－30。他－15

第312表　第212号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
18	にぶい橙	30		1.4	0.5	4.9	C 1	Ⅲ a	184	
19	浅黄橙	90		0.8	0.2	1.1	C 2	Ⅱ b	461	

カマドは、検出できず、東壁に造られたと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

住居跡の東側を中心として、大形の川原石がまとまって出土した。この川原石とともに土師器の坏（5・7）・皿（8）、須恵器の高台付椀（10・13）、土師器の甕（15）などが出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2から6は、土師器の坏AⅣである。7・8は、土師器の皿である。3・8は底部が欠損している。

9は、須恵器（NS）の椀である。

10から13は、須恵器（NS）の高台付椀である。14は、須恵器（NS）の高台付皿である。11は底部、12から14は口縁部が欠損している。

15・16は、土師器の甕である。17は、須恵器（HS）の長頸壷である。15は胴部中位以下、17は胴部上位以上が欠損している。16は胴部下位のみである。

18・19は、土錘である。

20は、鉄製品の刀子である。

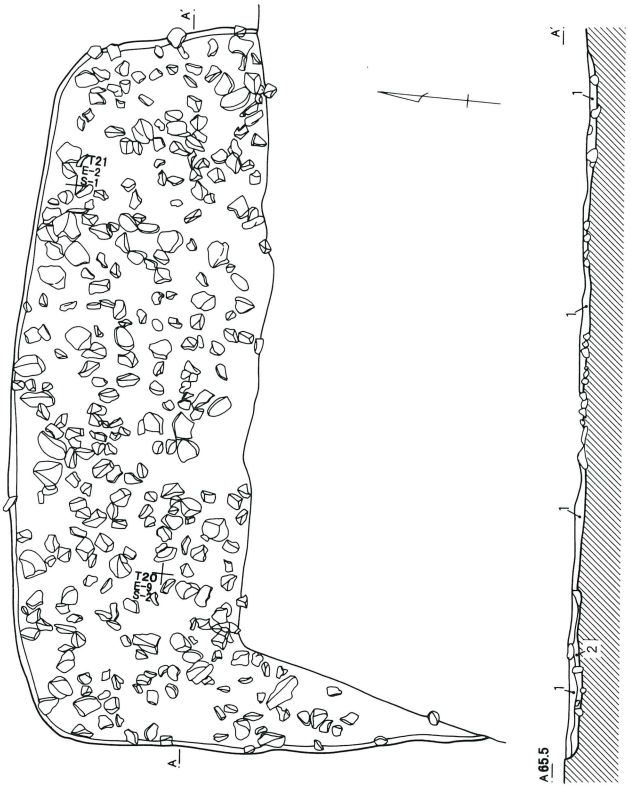
以上、出土遺物から第212号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第213号住居跡（第365図）

T－20・21グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。また覆土や床面に大形の川原石が、多量に混入していたため、覆土の除去に手間取った。

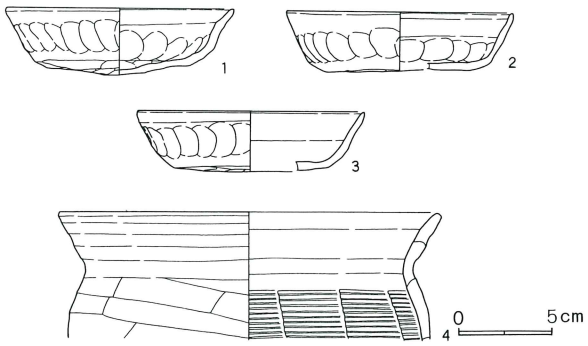
住居跡の南半分が砂利取りで破壊されていたため、住居跡の形状など不明な点が多かった。残存した北壁の長さは5.67m・深さ0.07mであった。

第365図　第213号住居跡・出土遺物



第２１３号住居跡
1　暗褐色土　焼土、炭を微量含み、砂を少量含む
2　褐色土　焼土、炭を微量含み、砂を少量含む

0　2m



主軸方位は、N－85°－Eと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1から3は、土師器の坏AⅣである。2・3は底部が欠損している。

第313表　第213号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A　Ⅳ	H	12.0	3.5		7.5	B, D, E	普　通		淡　橙	80	
2	坏　A　Ⅳ	H	11.8	3.1		7.5	B, E	普　通		淡　橙	30	
3	坏　A　Ⅳ	H	11.9	3.3		8.2	B, E, G	普　通		黄　褐	20	
4	甕　A　Ⅳ　b	H	20.0				B, C, E	良　好		橙	20	

4は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第213号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第214号住居跡（第366図）

N－21・22グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡・小穴などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。遺構確認の作業中に遺物が、まとまって出土したため、周辺を精査したところ、住居跡として確認した。

住居跡の形状は、不正長方形であった。規模は、長辺4.0m・短辺2.92m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N－4°－Eであった。

カマドは、検出できず、当初から造られなかったと判断した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

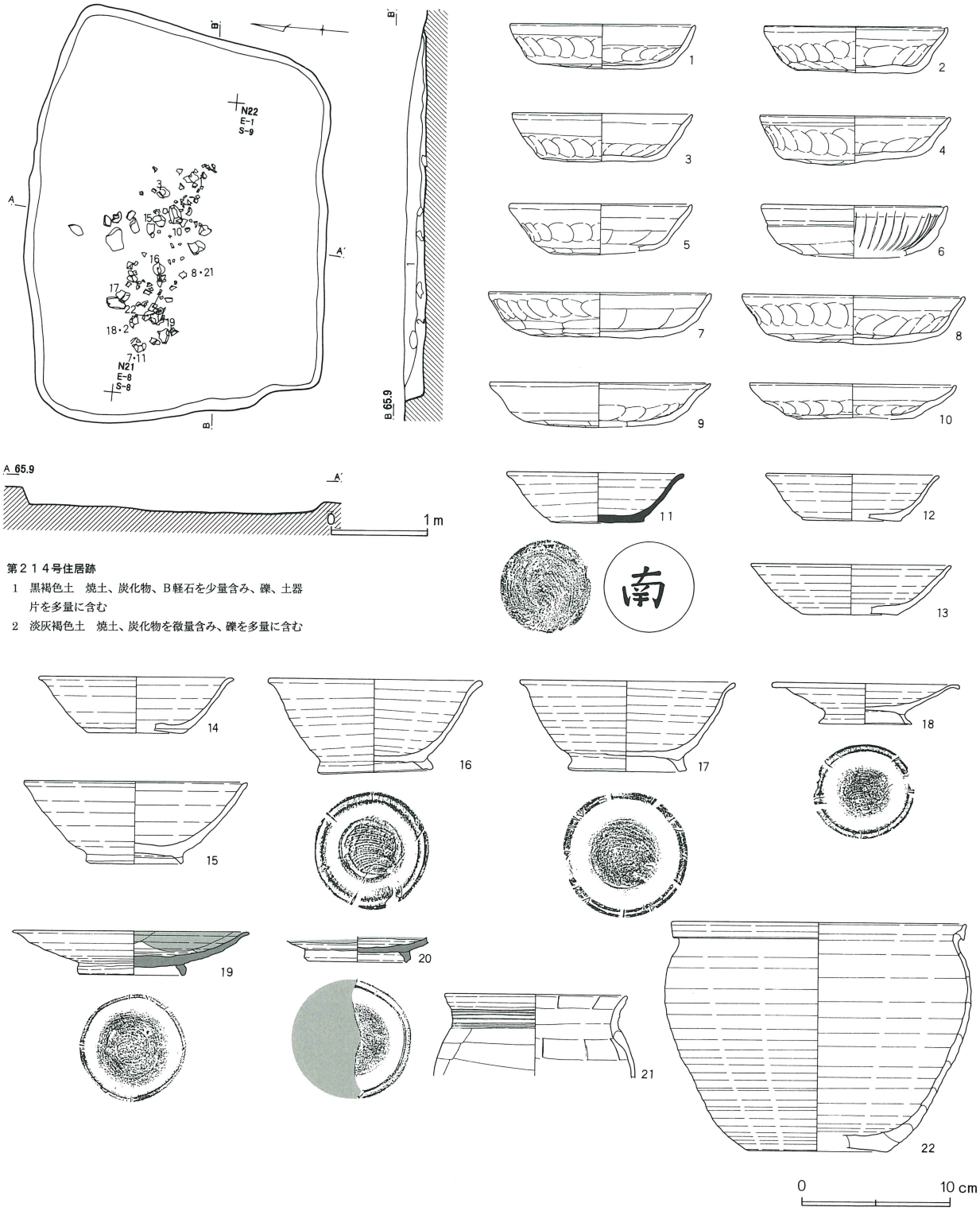
遺物は、住居跡の中央やや西寄りから土師器の坏（2）・皿（8・10）、須恵器の坏（11）・高台付椀（15・16・17）・高台付皿（18）、灰釉陶器の高台付皿（19）、土師器の甕（21）、須恵器の鉢（22）などがまとまって出土した。

1から3は、土師器の坏AⅣである。4・5は、土師器の坏AⅤである。6は、土師器の暗文土器である。7から10は、土師器の皿である。5・6・9・10は底部が欠損している。

第314表　第214号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A　Ⅳ	H	12.3	3.0		8.5	B, D, E	普　通		黄　橙	70	
2	坏　A　Ⅳ	H	12.2	3.1		7.9	B, E, H	普　通		黄　橙	90	
3	坏　A　Ⅳ	H	12.0	3.2		7.5	B, E, H	普　通		淡　橙	100	
4	坏　A　Ⅴ	H	12.6	3.1		8.9	E, H	普　通		黄　褐	80	
5	坏　A　Ⅴ	H	12.1	3.3		7.0	B, E	良　好		淡　黄	20	
6	坏（暗文）	H	12.2				B, E, H	普　通		黄　褐	40	
7	皿	H	14.8	3.0		9.1	B, E, H	普　通		黄　褐	40	
8	皿	H	14.8	3.2		9.0	B, E	普　通		黄　褐	40	
9	皿	H	19.7	3.0		7.3	B, E, H	普　通		黄　褐	30	
10	皿	H	13.8	2.2		7.7	B, D, E	普　通		黄　褐	20	
11	椀	S	11.7	3.4		6.2	B	良　好	R	灰	80	
12	椀	NS	11.3	3.1		6.6	B	良　好	R	褐　灰	30	
13	椀	NS	13.2	3.4		6.3	B, E	良　好	R	灰　白	30	
14	椀	NS	12.7	3.7		6.5	B, E	良　好	R	灰　白	20	
15	高台付椀	HS	14.3	5.5		6.1	B, E, I	良　好	R	にぶい黄橙 褐灰（外部）	40	
16	高台付椀	NS	13.9	6.2		7.3	B, I	良　好	R	黄　灰	80	
17	高台付椀	NS	14.2	6.0		7.2	B	良　好	R	灰　黄	75	
18	高台付皿	NS	12.2	2.7		6.0	B, E	良　好	R	灰　白	70	
19	高台付皿	K	15.5	2.9		6.8	B	良　好	R	灰　白	95	
20	高台付皿	K				6.5	B, D	良　好	R	灰　白	10	
21	台付甕	H	12.0				B, H	良　好		にぶい橙	25	
22	鉢	NS	19.5	15.2		9.2	D	良　好		灰　白		底－20。口縁－5

第366図　第214号住居跡・出土遺物



第２１４号住居跡
1　黒褐色土　焼土、炭化物、Ｂ軽石を少量含み、礫、土器片を多量に含む
2　淡灰褐色土　焼土、炭化物を微量含み、礫を多量に含む

11から14は、椀である。11は須恵器（Ｓ）、ほかは須恵器（ＮＳ）である。15から17は、高台付椀である。15が、須恵器（ＨＳ）の他は、須恵器（ＮＳ）である。18は、須恵器（ＮＳ）の高台付皿である。12から14は底部が欠損している。

19・20は、灰釉陶器の高台付皿である。20は底部のみである。

21は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損して

いる。

22は、須恵器（ＮＳ）の鉢である。底部が欠損している。

以上、出土遺物から第214号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第215号住居跡（第367図）

Ｏ－21グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡・小穴などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、南西隅のやや張る不正長方形であった。規模は、長辺3.92ｍ・短辺3.04ｍ・深さ0.15ｍであった。南西隅は、第28号区画溝が破壊していた。

主軸方位はＮ－14°－Ｅであった。

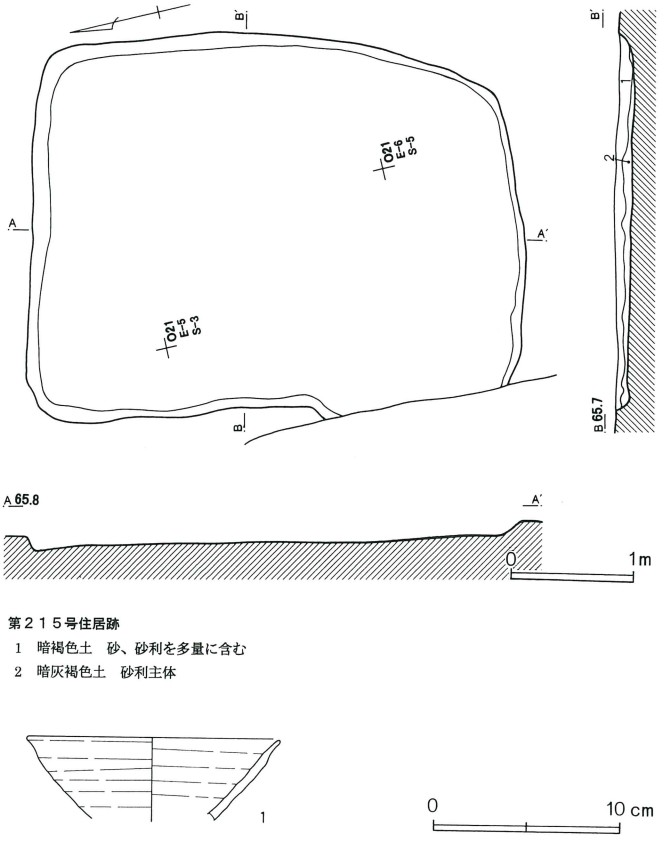
カマドは、検出できず、当初から造られなかったと判断した。

遺構の切り合い関係は、第28号区画溝より古かった。

１は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第215号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第367図　第215号住居跡・出土遺物



第216号住居跡（第368図）

Ｏ－22・23グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難を極めた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.78ｍ・短辺2.69ｍ・深さ0.20ｍであった。東寄りの南壁際に長径0.41ｍ・深さ0.17ｍの楕円形の小穴を検出した。

主軸方位は、Ｎ－99°－Ｅであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、検出できず、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、極く浅く窪んでいた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド前面から須恵器の高台付椀（１）が、住居跡の南西隅から須恵器の高台付椀（２）が出土した。

１は、須恵器（Ｓ）の高台付椀である。２は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。

３は、須恵器（ＨＳ）の高台付皿である。

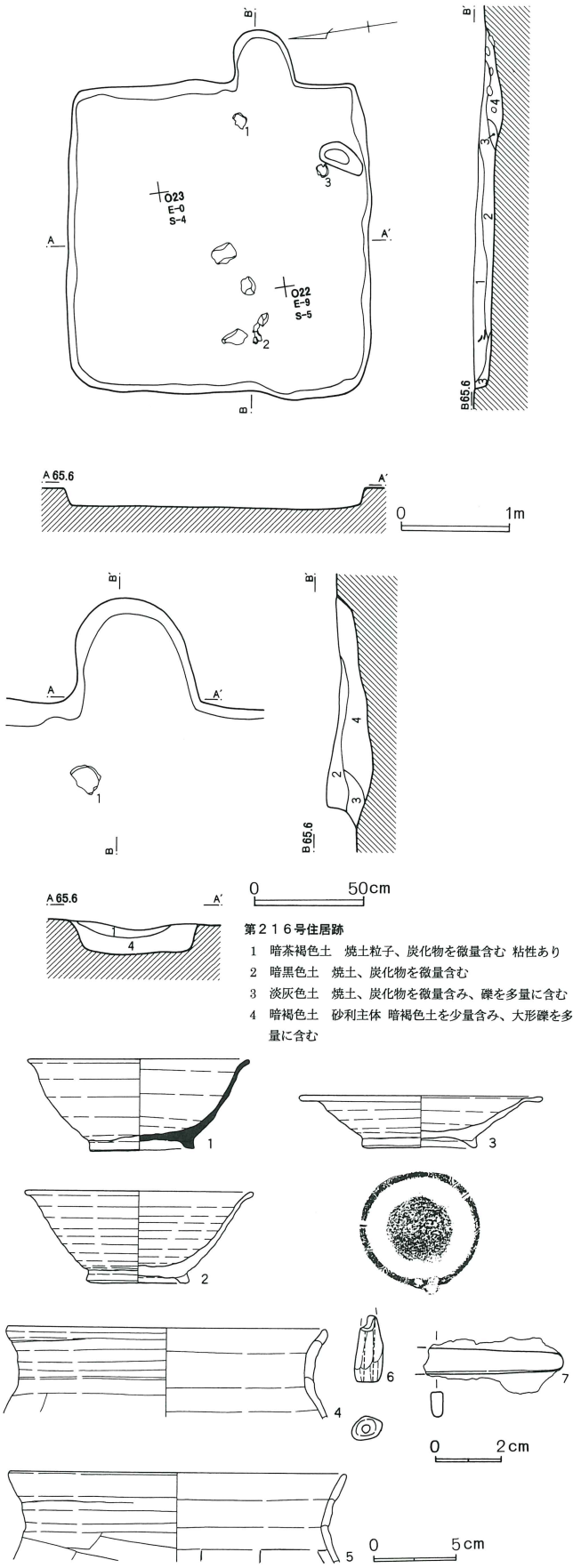
４・５は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

６は、土錘である。

７は、鉄製品の刀子茎部である。

以上、出土遺物から第216号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第368図　第216号住居跡・出土遺物



第217号住居跡（第369図・第370図・第371図・第372図・第373図・第374図・第375図・第376図・第377図）

Ｐ－22・23グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らで、覆土上面に堆積した火山灰をもとに確認したため、作業は比較的容易であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺8.25ｍ・短辺5.90ｍ・深さ0.65ｍと、非常に大形の住居跡であった。住居跡の南東部が、カマドと貯蔵穴を囲むようにやや低くなっていた。

主軸方位は、Ｎ－93°－Ｅであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内に延びていた。燃焼部の位置から、袖は、もう少し長かったと推定した。焚き口部から燃焼部にかけては、不整形でやや深い掘り込みを検出し、多量の焼土が出土した。また燃焼部奥には、径0.5ｍの浅い掘り込みがあった。支脚の抜き取り痕跡と判断した。燃焼部から煙道部へは大きな段をもって移行していた。煙道部の先端は、第652号土壙で破壊されていたが、残存部でも、長さ1.5ｍと細長かった。底面は、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマド右側の南壁やや東寄りに検出した。貯蔵穴の西側は第１号土壙と重複していた。形状は、瓢箪形で規模は、長径1.83ｍ・深さ0.36ｍであった。

第１号土壙は、長径1.4ｍ・短径1.04ｍ・深さ0.24ｍであった。

遺構の切り合い関係は、第645・652号土壙より古かった。

非常に多量の遺物が出土した。なかでも床直の遺物が多かった。カマド内から土師器の坏（19・24・37）、須恵器の高台付皿（57・58）、土師器の甕（80・86）、須恵器の壷（90）・甕

第315表　第215号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	13.3				B, E, I	普　通	R	にぶい橙	60	

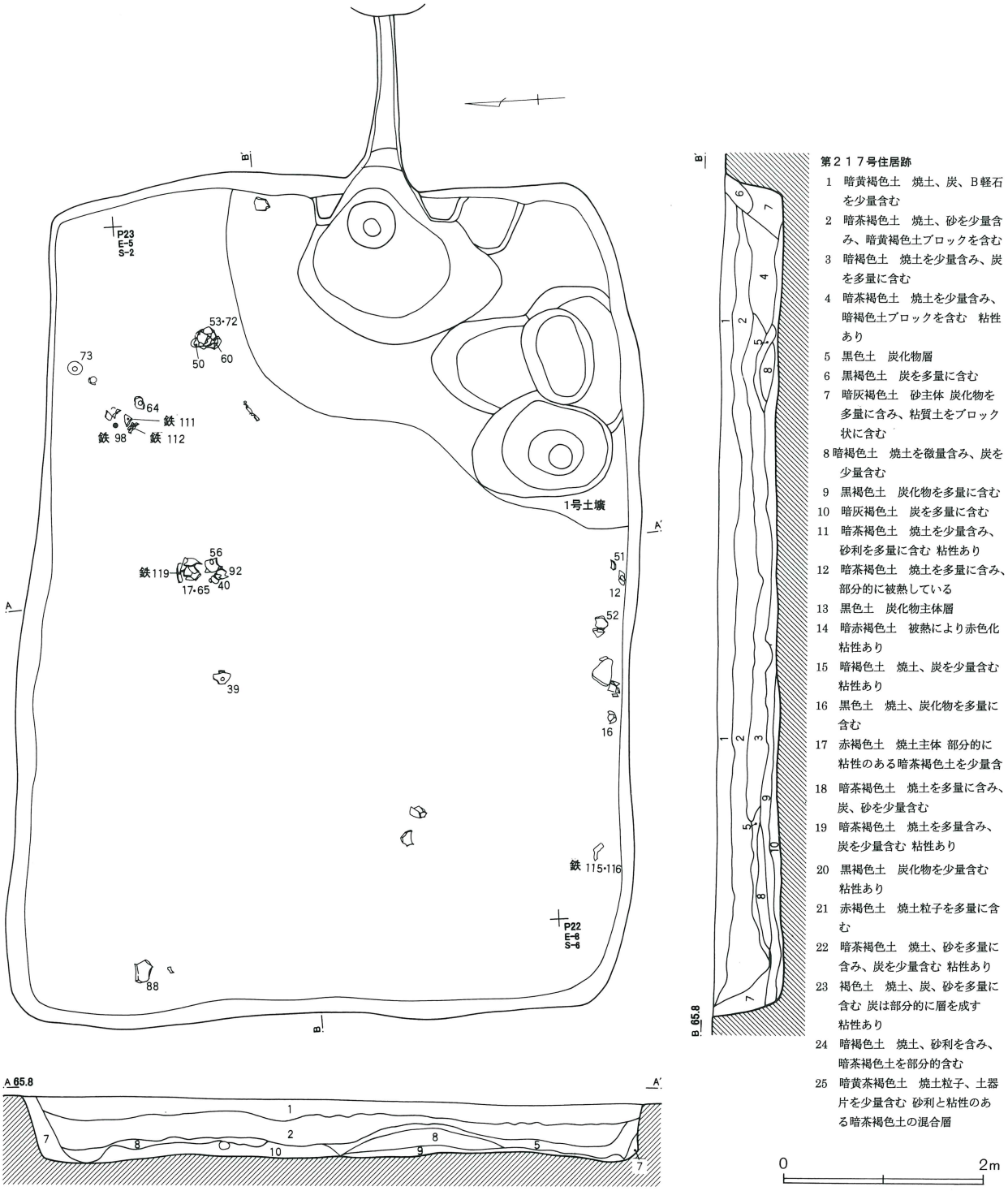
第316表　第216号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	S	13.0	5.4		6.2	B	良　好	R	褐　灰	80	カマド
2	高台付椀	HS	13.3	5.5		5.6	B, E, I	普　通	L	浅　黄	50	
3	高台付Ⅲ	HS	14.2	3.1		6.3	B, E, G	普　通	R	灰　黄	80	
4	甕BⅢc	H	19.0				B, E	良　好		内－橙。外－褐	20	
5	甕BⅢc	H	20.0				B, D, E	良　好		橙	15	

第317表　第217号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏A Ⅳ	H	12.9	3.3		7.9	B, D, E, H	普　通		暗黄褐	40	
2	坏A Ⅳ	H	12.2	3.5		8.5	B, D, E, H	普　通		淡　橙	80	
3	坏A Ⅳ	H	12.0	3.4		8.5	B, D, E	普　通		黄　橙	100	
4	坏A Ⅳ	H	12.7	3.2		7.0	B, D, E	普　通		黄　褐	40	
5	坏A Ⅱ	H	12.2	3.5		7.8	B, E, H	普　通		黄　褐	40	炭化物層上
6	坏A Ⅳ	H	12.7	3.6		7.3	E, H	普　通		淡黄褐	50	
7	坏A Ⅳ	H	12.0	3.2		8.8	B, D, E	普　通		黄　橙	50	
8	坏A Ⅳ	H	11.6	3.4		8.5	B, D, E	普　通		橙	80	
9	坏A Ⅳ	H	11.8	3.3		7.7	B, E	普　通		黄　褐	30	貯穴
10	坏A Ⅳ	H	11.7	3.4		8.3	B, E, H	普　通		明茶褐	70	カマド
11	坏A Ⅳ	H	11.9	3.5		8.0	B, D, E	普　通		淡黄褐	90	
12	坏A Ⅳ	H	11.8	3.5		6.5	B, D, E, H	普　通		暗　橙	100	
13	坏A Ⅳ	H	11.6	3.5		7.5	B, D, E, H	良　好		黒　褐	30	炭上
14	坏A Ⅳ	H	12.0	3.0		8.5	B, D, E	普　通		黄　褐	100	
15	坏A Ⅳ	H	11.8	3.3		8.5	B, D, E	普　通		黄　褐	90	カマド
16	坏A Ⅳ	H	11.8	3.3		8.3	B, D, E, H	良　好		黄　橙	60	
17	坏A Ⅳ	H	11.8	3.1		9.0	B, E, H	普　通		淡黄褐	60	
18	坏A Ⅳ	H	12.1	3.1		8.8	B, D, E, H	普　通			100	
19	坏A Ⅳ	H	12.1	3.6		7.5	B, D, E	普　通		黄　灰	90	カマド
20	坏A Ⅳ	H	11.8	3.0		7.5	D, E	普　通		黄　橙	30	
21	坏A Ⅴ	H	12.0	3.5		6.3	B, D, E	普　通		黄　橙	40	
22	坏A Ⅳ	H	11.6	3.0		7.4	B, E, H	普　通		暗茶褐	90	
23	坏A Ⅳ	H	11.7	3.4		6.7	B, D, E, H	普　通		淡黄褐	40	炭化物層下
24	坏A Ⅳ	H	11.7	3.5		7.4	B, D, E	普　通		黄　褐	100	カマド
25	坏A Ⅳ	H	11.8	3.0		6.5	B, D, E	普　通		黄　褐	30	
26	坏A Ⅳ	H	11.5	3.0		7.5	B, D, E, H	普　通		黄　褐	50	
27	坏A Ⅳ	H	11.7	3.5		7.0	B, E, H	普　通		黄　褐	30	
28	坏A Ⅳ	H	11.7	3.3		7.4	B, D, E, H	普　通		橙	50	カマド
29	Ⅲ	H	14.6	3.8		10.4	B, H	普　通		淡　橙	50	
30	Ⅲ	H	15.9	3.3		10.3	B, D, E	普　通		暗　褐	80	炭化物層上
31	Ⅲ	H	12.6	3.4		9.5	B, D, E, H	普　通		暗黄橙	40	
32	Ⅲ	H	15.4	3.1		10.5	B, E, H	普　通		淡茶褐	70	ベルト
33	Ⅲ	H	14.7	3.0		9.7	B, D, E	普　通		黄　褐	50	
34	Ⅲ	H	13.9	3.0		8.4	B, D, E	普　通		黄　橙	30	貯穴
35	Ⅲ	H	14.0	3.1		8.8	D, E, H	普　通		淡　橙	20	炭化物層上
36	Ⅲ	H	13.8	3.0		8.6	B, E, H	良　好		淡黄褐	30	

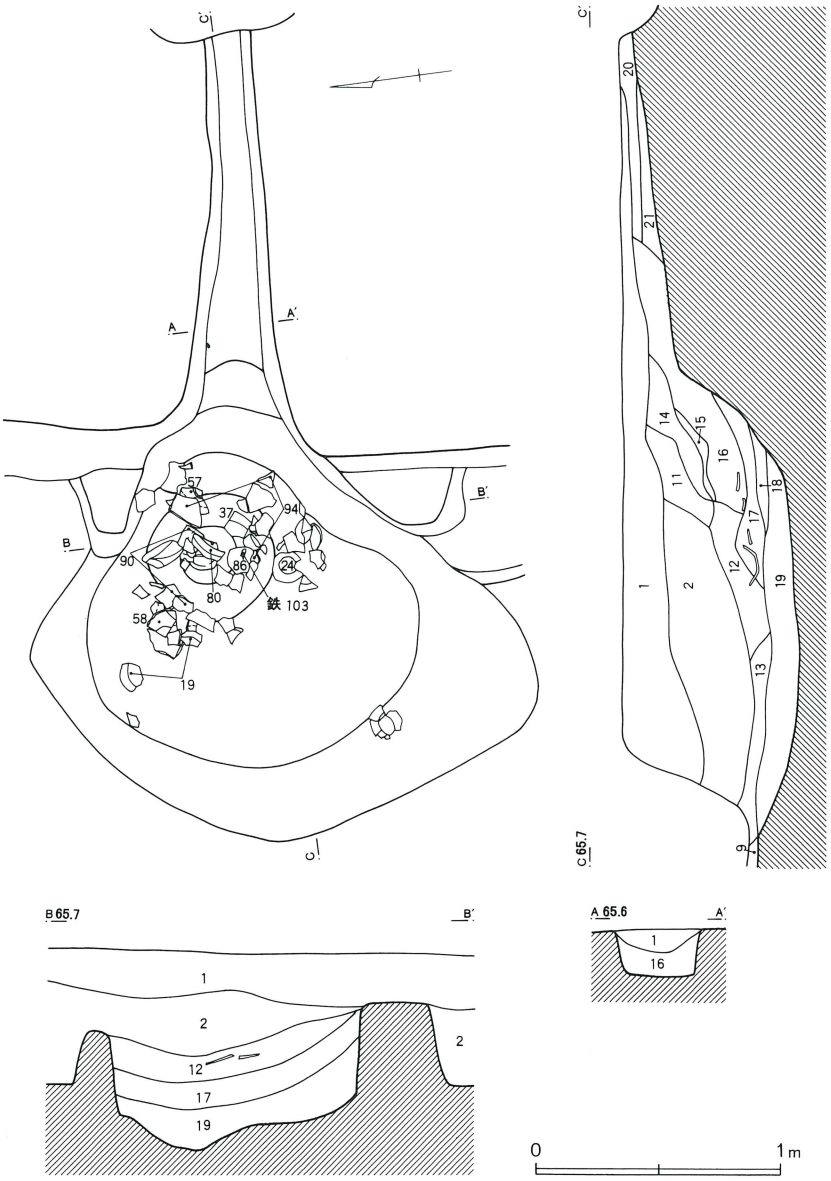
第369図　第217号住居跡



(94)、鉄釘（103）が出土した。貯蔵穴内からは、土師器の坏（2・3・4・7・20・21・22・25・26・27・29・33・34)、灰釉陶器の高台付椀（63)、須恵器の壷（89）がまとまって出土した。また第1号土壙からは、須恵器の大甕（93）を、底面に据えた状態で出土した。

住居跡の北東部からは、須恵器の高台付椀(50・53)・高台付皿（60)、灰釉陶器の高台付椀（64）・皿（72・73)、鉄製紡錘車（111・112）が出土した。また住居跡の中央やや北寄りからは、土師器の坏（17)、須恵器の坏（40）・高台付皿（56)、灰釉陶器の小形壷（92)、

第370図　第217号住居跡カマド



鉄製品（119）が出土した。住居跡の南壁際からは、土師器の坏（12・16）、須恵器の高台付椀（51・52）が出土した。

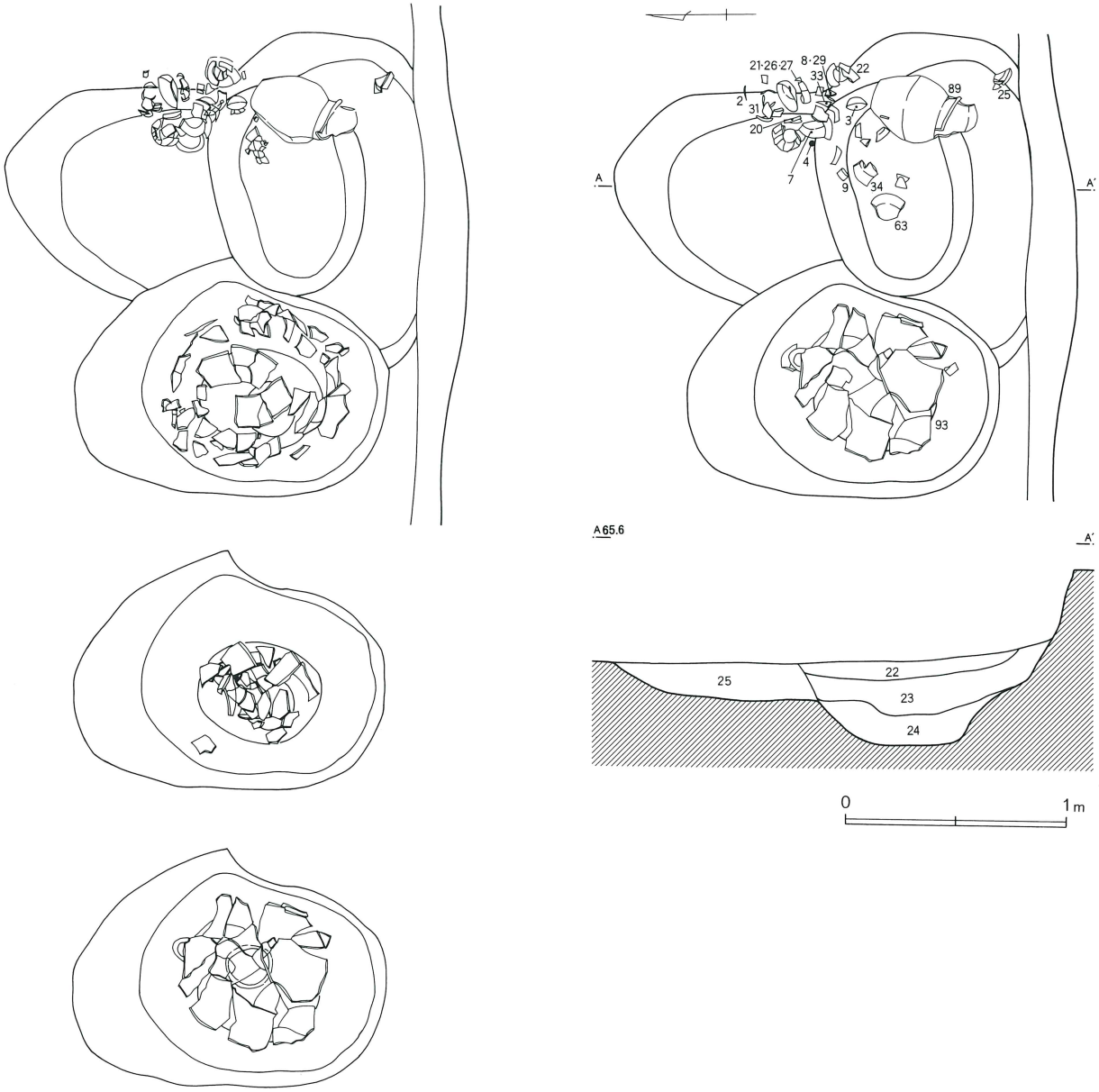
1から38は、土師器の坏である。5は坏AⅡ、21は坏AⅤ、ほかは、坏AⅣである。29から37は、土師器の皿である。38は、暗文土器である。27・29・33・35から38は底部が欠損している。24は黒色の付着物が内面体部から底部にかけて確認できる。漆の痕跡と考えられる。

39から41は、椀である。41は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。40の底部外面には、墨書「仁」がみられる。42から54は、高台付椀である。42から49は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。55は、須恵器（S）の皿である。56から60は、高台付皿である。59は須恵器（NS）、他は、須恵器（HS）である。60は墨

第318表　第217号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
37	皿	H	13.7	3.5		9.7	B, D, E	普通		淡黄褐	30	カマド
38	坏（暗文）	H	13.9				B, E, H	普通		淡黄褐	20	炭化物層上
39	椀	HS	12.6	3.3		6.6	B, E, F, H	普通	R	褐灰		底－100。他－50。P－23
40	椀	HS	12.8	3.3		6.5	B, E, H	普通	R	褐灰	60	
41	椀	NS	14.9	4.2		7.3	B, H	普通	R	灰白	25	
42	高台付椀	NS	13.7	4.0		6.4	B, C	普通	R	灰白		底－100。他－40。P－23
43	高台付椀	NS	13.8	4.3		6.6	B, C	普通	R	灰白	60	ベルト内。炭上
44	高台付椀	NS	13.8	4.9		5.8	B, C, H	普通	R	灰白	40	炭下
45	高台付椀	NS	13.8	5.0		5.6	B, C, H	普通	不明瞭			炭下
46	高台付椀	NS	14.1	5.1		6.1	B, C	普通	R	灰白		底－100。他－20。壁
47	高台付椀	NS	14.2	5.3		6.7	B, E	普通	R	灰白		底－100。他－20。壁

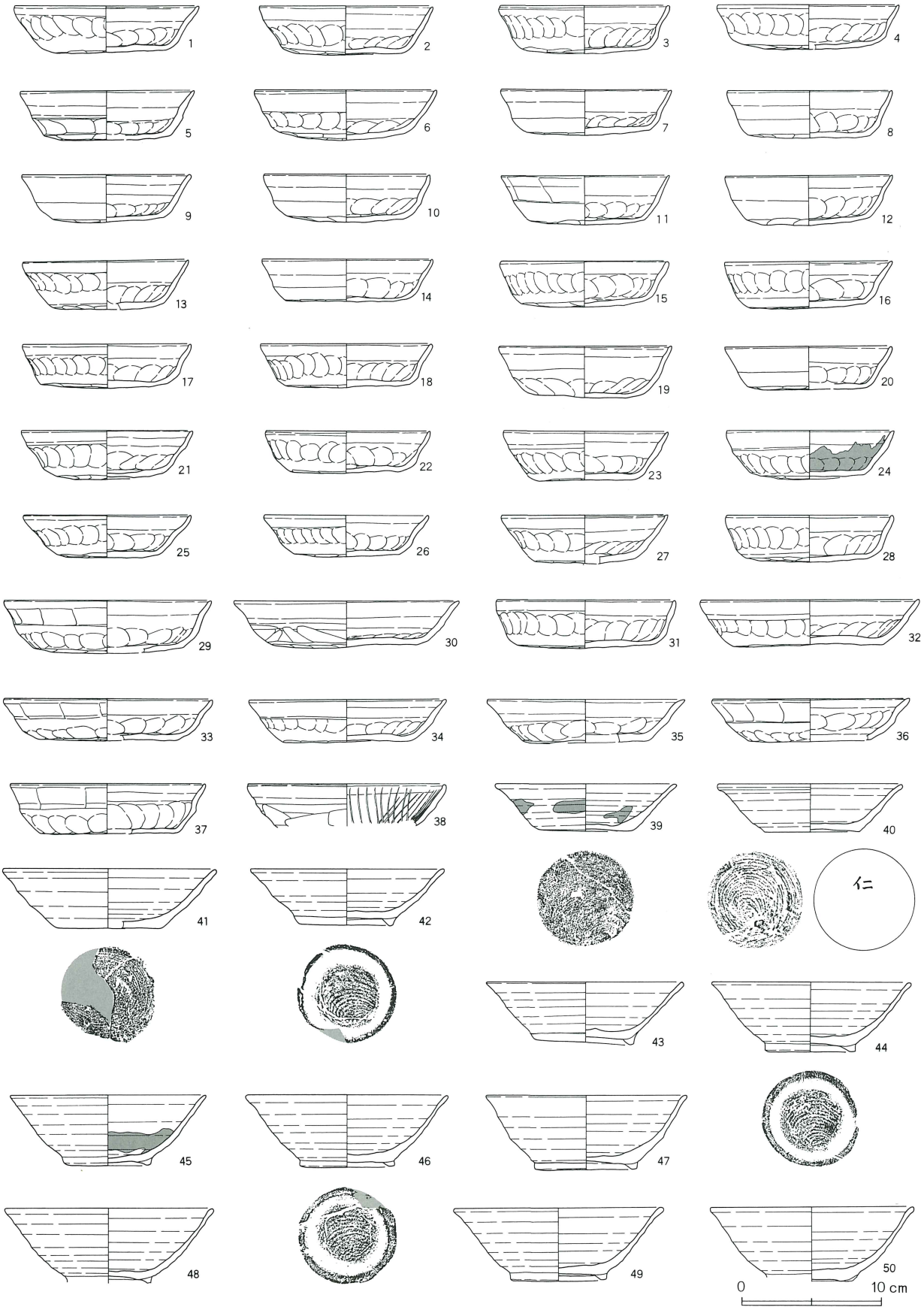
第371図　第217号住居跡貯蔵穴



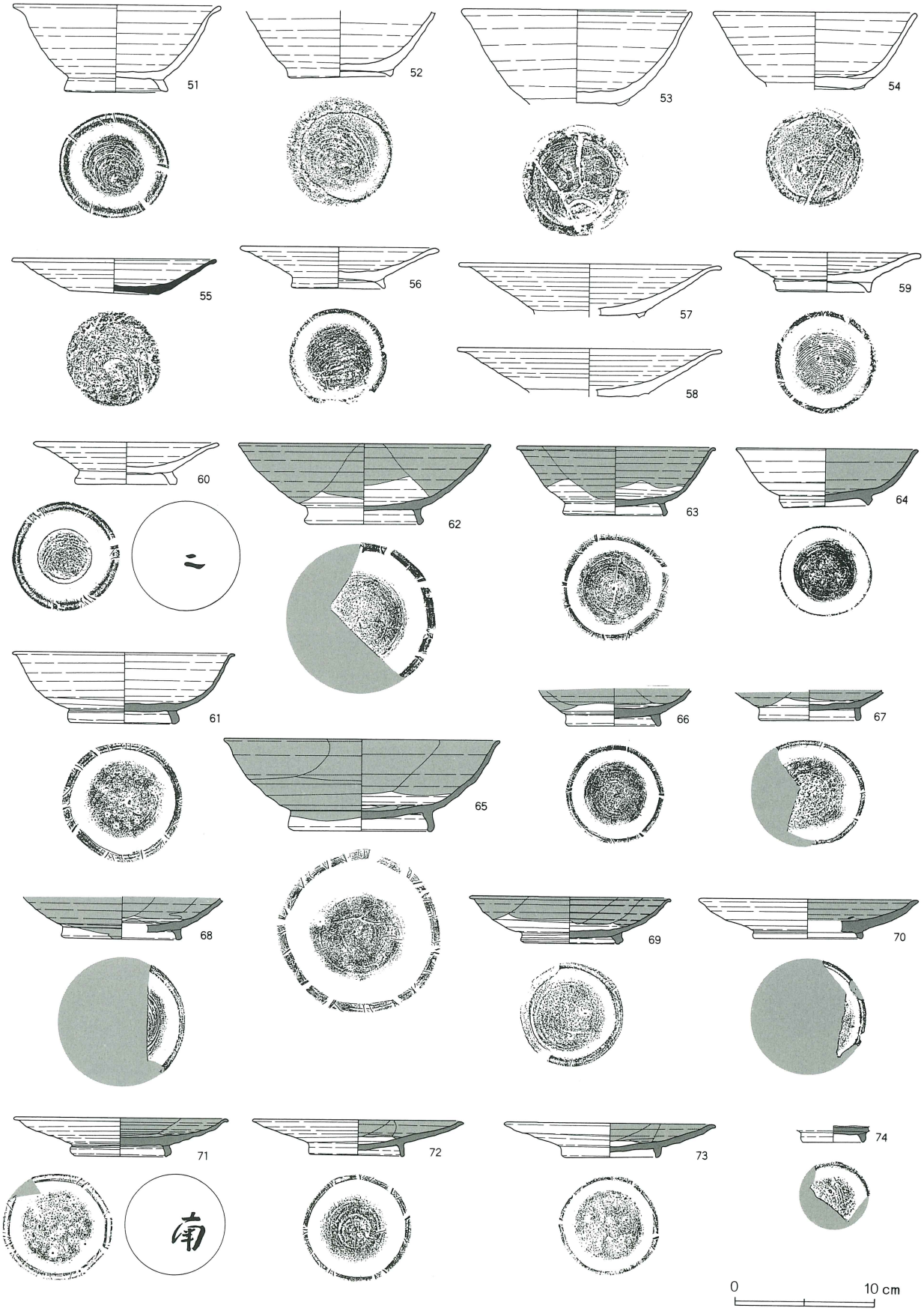
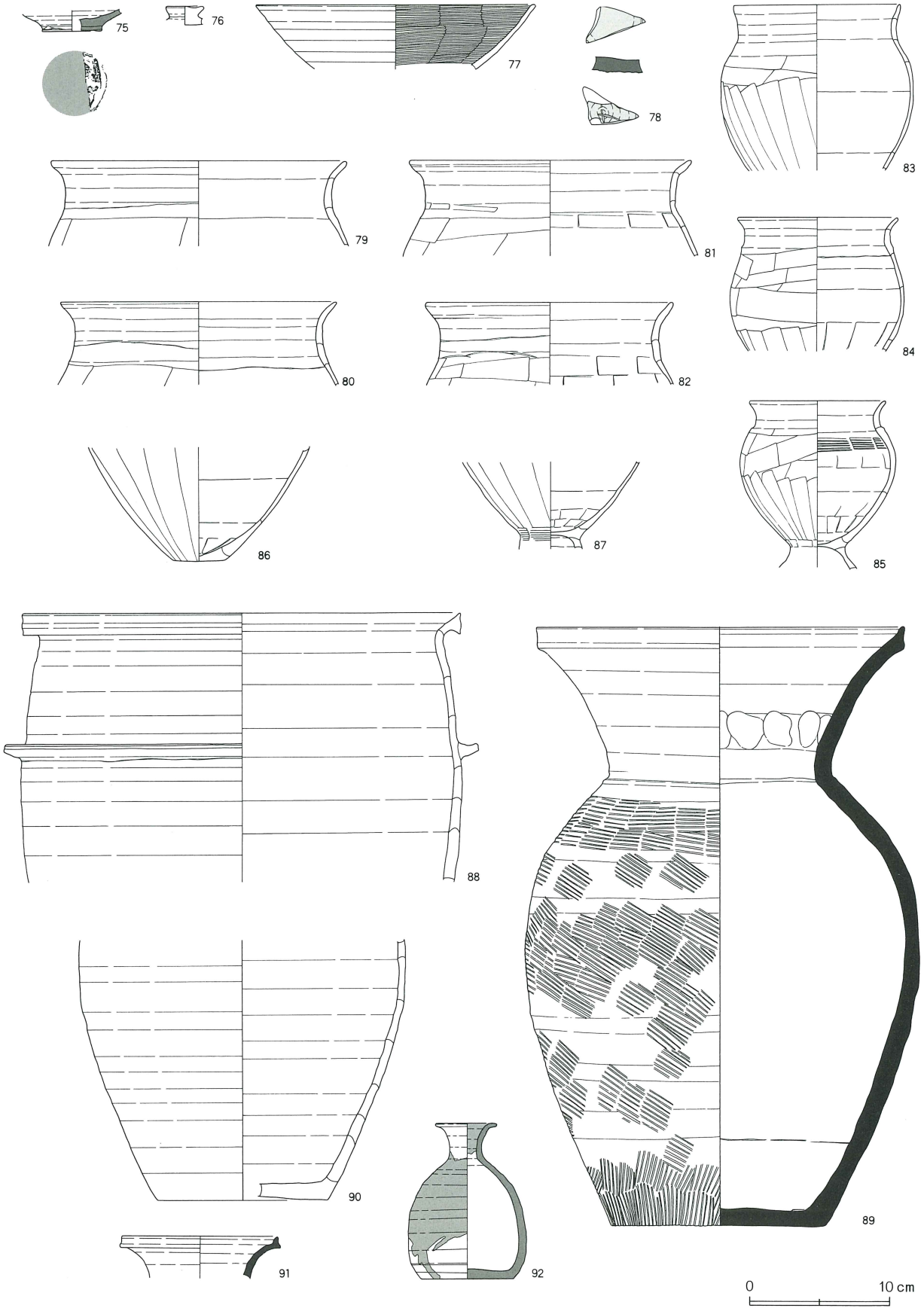
第319表　第217号住居跡出土遺物観察表（3）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
48	高台付椀	NS	14.6				B, E, H	良好	不明瞭	灰白	25	炭下
49	高台付椀	NS	14.6	5.1		6.3	B, H	普通	R	灰白	30	
50	高台付椀	HS	14.3				B, E	普通	R	褐灰	40	
51	高台付椀	HS	14.5	6.2		7.1	B, F, H	普通	R	橙		底－100。他－25。カマド
52	高台付椀	HS				7.1	B, F	普通	不明瞭	褐灰	40	
53	高台付椀	HS	16.2				B, F, H	普通	R	褐灰	80	
54	高台付椀	HS	14.3				B, E, F, G, K	普通	不明瞭	橙	90	
55	Ⅲ	S	14.4	2.4		6.3	B, F, G	良好	R	灰	40	底－100。他－30。P－23
56	高台付Ⅲ	HS	13.6	2.9		6.3	B, E, H	良好	R	灰		
57	高台付Ⅲ	HS	18.2				B, C	良好	R	黄橙	40	
58	高台付Ⅲ	HS	18.5				B, C	良好	R	橙	30	カマド

第372図　第217号住居跡出土遺物（1）



第373図　第217号住居跡出土遺物（２）



第374図　第217号住居跡出土遺物（３）